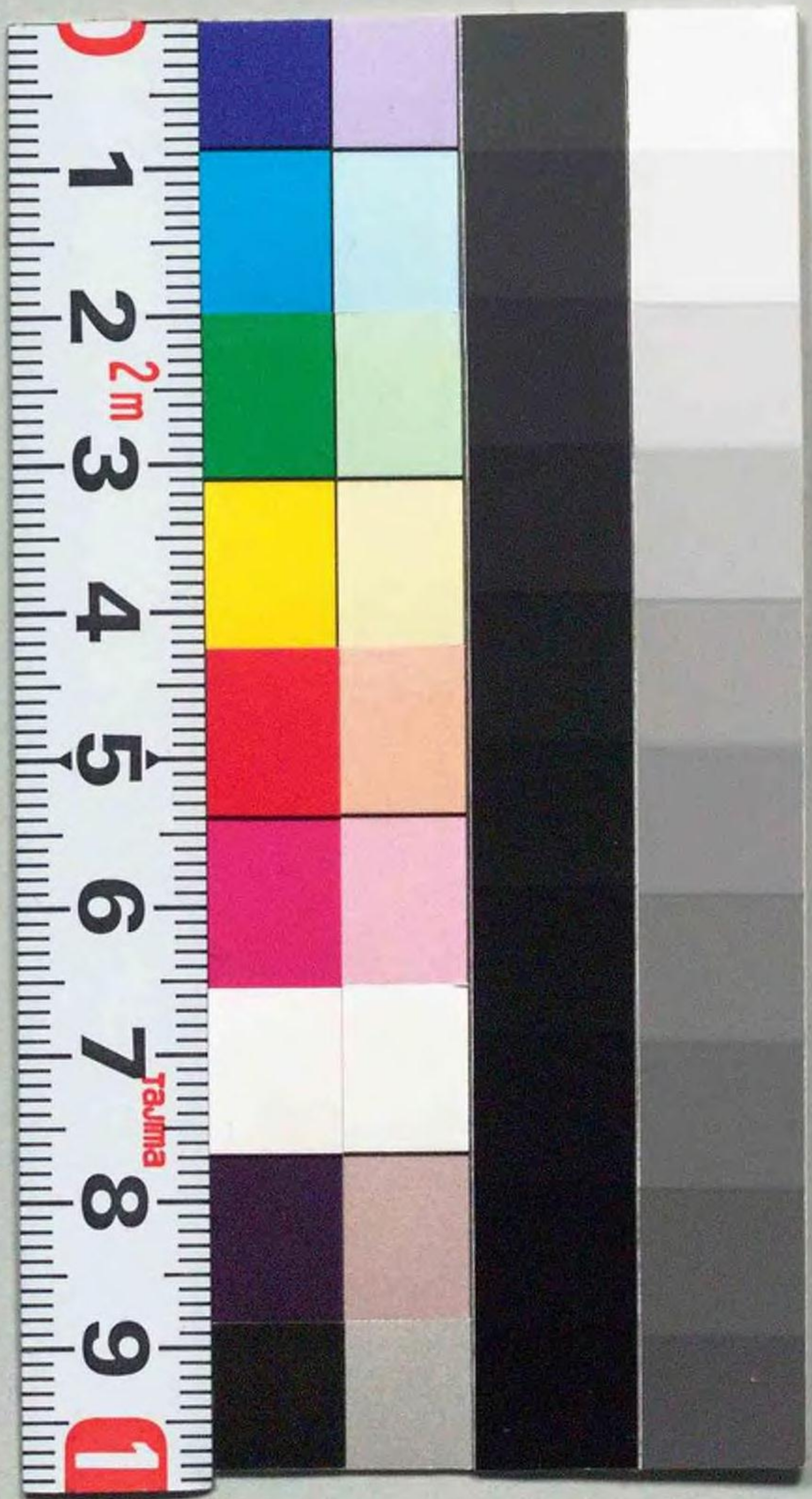
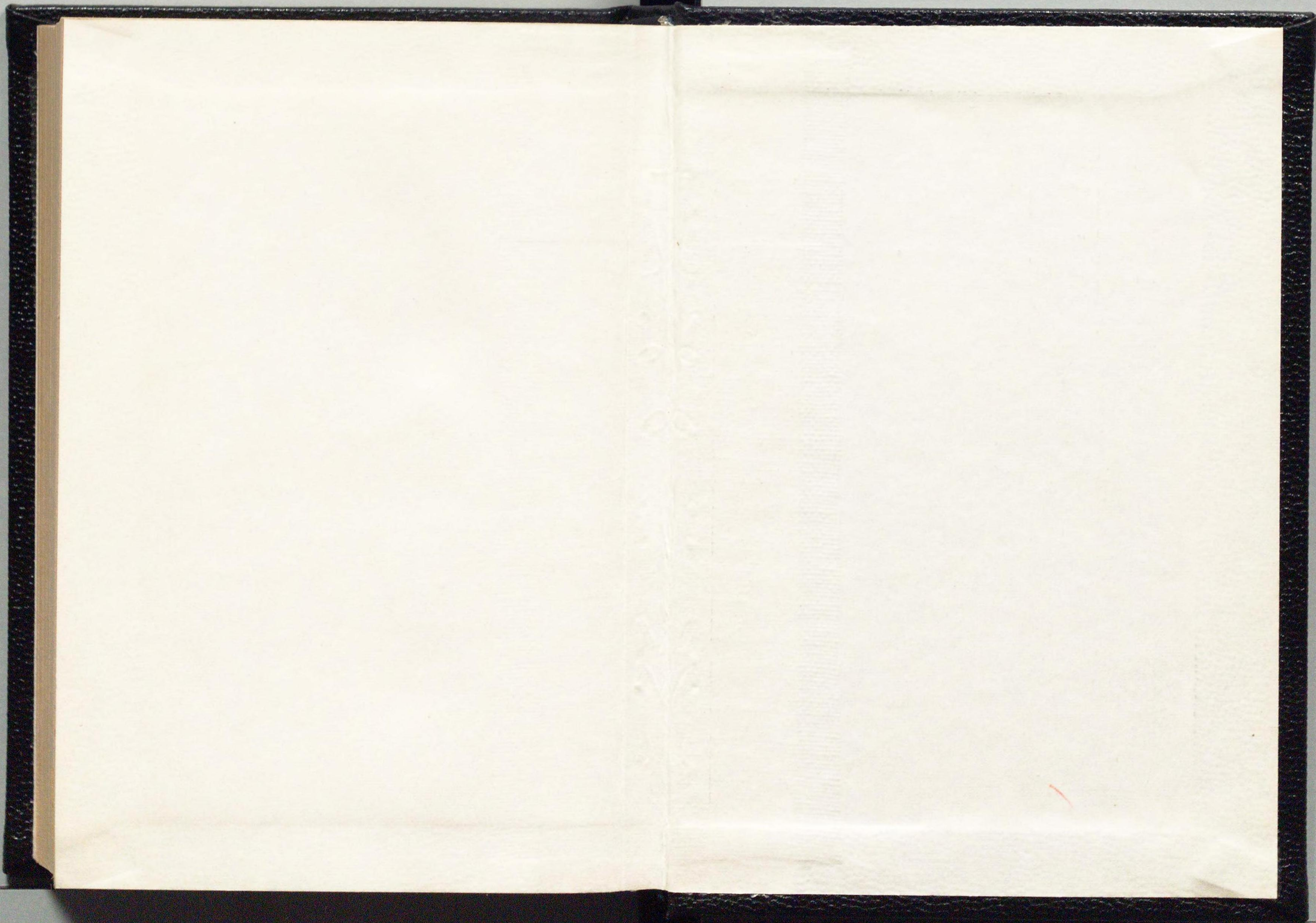
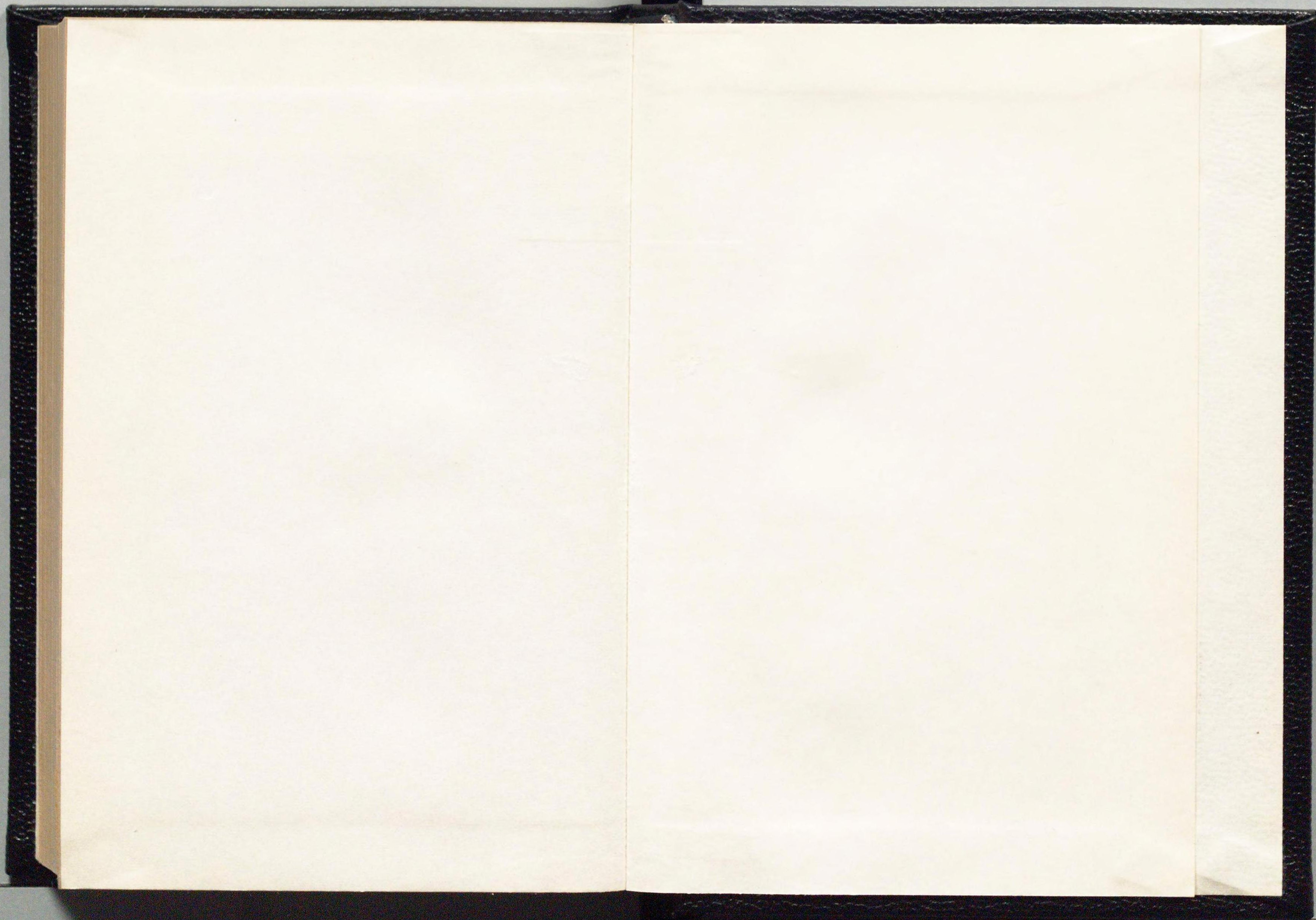


983
CT93R
Y

別書誌
合2冊







983-cT93r-Y



*00256484 *

新潮文庫

獵人日記

上卷

ツルゲーネフ
米川正夫 譯



新潮社

983
cT93r
Y

新潮文庫

獵人日記

上卷

ツルゲーネフ
米川正夫譯



新潮社版

275

1-1828

983.0193r Y

983
CT93r
Y



目次

ツルゲーネフ小傳(序に代へて).....三

ホーリとカリーヌイチ.....四

エルモライと粉屋の女房.....六

マリナーナの泉.....六

田舎醫者.....七

私の隣人ラヂーロフ.....九

郷士のオフシヤニコフ.....一〇



256481

リ	ゴ	フ	……………	二二五
ベージンの草野	……………	……………	……………	二二五
クラシーワヤ・メーチのカシヤン	……………	……………	……………	二八六
支配人	……………	……………	……………	二二七
事務所	……………	……………	……………	二三六
狼	……………	……………	……………	二二六
二人の地主	……………	……………	……………	二八二

ツルゲーネフ小傳

——序に代へて——



5 ツルゲーネフ小傳

ツルゲーネフは數多いロシヤの文豪の中でも、最も早く外國に知られ、最も廣く讀まれた作家で、ロシヤ文學といふものに對する注意と愛を、全世界の讀者の間に喚起した意味に於いて、忘るべからざる功勞者でもある。しかしその後トルストイ、ドストエーフスキイ、その他多くの現代派の作家が讀書界を征服するやうになつてからは、ツルゲーネフの名が頓に魅力と光輝を失墜したかの感がある。ツルゲーネフには深刻味がない、強烈な迫力がない、——といった風な皮相な概念が人々の頭に植付けられたらしい。甚しきに至つては、彼の作品は單に美しい詩的情趣によつて青年子女を悦ばす感傷文學に過ぎない、などといふ暴論さへ聞かれなくてもない。これは謬れるも甚しいもので、ツルゲーネフは最も高い意味に於ける詩人であり、人生百般の現象に對する繊細、かつ鋭利な觀察者、理解者であり、天衣無縫ともいふべき完璧な表現の所有者であつて、世界文學に於て第一流に位する天才の一人である。たゞ彼がロシヤ文豪中、稀に見る眞の藝術家であるがために、露骨な自己暴露や赤裸々な分析解剖を避け、すべての思想や感情を藝術的形象の衣に包んで、その中に一切を抱擁し、暗示するといふ態度を選んだため、直接讀者に聲高く呼び掛ける刺戟性が乏しく感じられるのである。この形象に一切を含有せしめるといふ、最高の意味に於ける象徴主義——アンドレーフやメエテルリンクなどの技巧的、人爲的なものと雲泥の差を有する象徴主義の體得者として、ツルゲーネフは不世出の天才プーシキンに近似してゐる。

る。彼等二人は國外に於て、近代的深刻みの缺けた微温的藝術家と見られてゐる點に於て、共通の不運を擔つてゐると云へよう。無論トルストイ、ドストエーフスキイは限りなく偉大である。それは萬人の眼を射る烈しい光である。しかしツルゲーネフや、プーシキンの内部に深く潜められたる偉大な暖みを直感するだけの洗煉されたより深い理解は、もう我々も持たなければならぬ時であらう。

イヴン・ツルゲーネフ(一八一八年—一八八三年)の藝術を理解するために、必ず知つて置かなければならぬ傳記的事實は、彼の母ヴルヴーラの生立ちとその人となりである。彼女は早く父を失つて義父の家に人となつたが、醜い容貌とひねくれた性質を持つて生まれた彼女が、繼父の愛を克ち得る筈がなかつた。冷笑・侮蔑・虐待、これが不幸な孤兒に與へられた分け前であつた。十四歳の時ヴルヴーラはかうした精神的肉體的の苦痛に堪へかねて、遂に肉親の伯父の家へ走つた。けれど彼女は、こゝでも暖い避難所を見出すことが出来なかつた。一生を我儘一杯に押し通した無理解な獨身者の老人は、頼りない孤兒に對して少しも容赦しなかつた。彼は氣短かな老人に特有の氣まぐれをもつて、二十年といふ長い年月の間、絶えずヴルヴーラを苦しめ通したが、彼女が三十四歳になつた時、この富裕な伯父が急病で頓死したために、千人からの農奴を有する豊かな領地が巨萬の富と共に、ことごとくこの見る影もない、無一物の孤兒の手に渡る事となつた。昨日まですべての人に虐げられ辱められてゐた彼女は、一躍して縣内屈指の財産家となり、多くの未婚男子の競争の的となつたのである。彼女はその中でも、殊に眉目秀麗な美男子セルゲイ・ツルゲーネフを選んで、自分の夫とした。しかし彼の求婚の動機は、單なる利害の打算に過ぎなかつたので、醜い中年の新妻に對して、夫としての義務を守る筈がなかつた。その結果は絶

え間なき家庭内の波瀾、妻のヒステリーといつたやうな、當然かくあるべき形を取つて現はれた。そしてヴルヴーラの嫉妬焦燥は、いつもわが子に對する不當な憤怒・叱責にはけ口を見出した。しかも、夫が若くして世を去つてからは、幼い頃から受けてゐた迫害と侮辱を、少しも早く埋め合はさうとするものやうに、彼女の横暴専恣は殆ど際限を知らぬ程になつた。彼女は些細な云ふに足らぬ過失のために、農奴や召使ひに慘酷な體刑を命じたり、兵役に送つたり、遠く移民部落へ流し者にしたりして、些かも自ら顧みる様子がなかつた。この間の消息は『初戀』『プーニンとバブリーン』等の小説に反映を見せてゐる。

かういふ状況の下に生長して行つたツルゲーネフの心には、早くから自由を奪はれた農民に對する同情が目醒めると共に、氣まぐれな母の壓制横暴によつて、後年彼の人と藝術の基調となつた深い憂愁の種が蒔かれたのである。實際、彼が子供らしいのび／＼した、自由な氣持ちで日を送つた事は、殆どないと云つていゝくらいである。長ずるに従つて、かうした不正・不合理の根本となつてゐるロシアの農奴制度に對する憎悪が、明瞭な形をとつて彼の心に根を張つた。大學卒業後、二十歳の青年ツルゲーネフは柏林へ留學に赴いたが、その時の氣持ちを彼は『回想記』の中でかう語つてゐる。

「わたしは自分の憎むものと同じ空氣を呼吸する事が出来なかつた。それには性格の強さが足りなかつたのであらう。わたしは敵に對して、より強い打撃を加へる爲に、それから遠ざかる必要があつた。この敵はわたしの目に一定の形を備へ、一定の名を持つてゐた——それはほかならぬ農奴制度である。」この敵に對して最後まで妥協する事なく、全力を盡して戦ふ事、それが彼の謂はゆるハンニバルの誓ひであつた。

その後のツルゲーネフの生涯は、外國とロシアとの間を往復する事に過ぎ去つたと云つてもよからう。しかもより多くの時は外國、殊に佛蘭西で送られた。實際、佛蘭西は彼にとつて第二の故郷とも云ふべきで、つひにはその終焉の地にさへなつた。ゾラ、フローベル、ドーデー等の諸文星は彼の莫逆の友であつた。しかし、彼をこの國へ固く結びつけた主な原因は、ヴィアルドといふ歌ひ女なのである。ツルゲーネフは、彼女がかつて露都を訪れたとき、相識の間となつたが、それ以來、彼はこの婦人に捧げた愛情に背かうとしなかつた。ヴィアルドは既に夫のある身で、故國に暖い愛の巢を營んでゐたが、ツルゲーネフはその家庭全體の友人となつて、清い交りをつづけながら、一生を獨身で過ごした。彼が報いられざる愛を胸の底に秘めながら、天涯に家なき孤獨の淋しみをつくぐと味はつた事實は、その書簡の端々にも窺はれるし、『ファウスト』『手紙』などの作品に明瞭な暗示を印してゐる。

ツルゲーネフの處女作は二十五歳の時に發表した敘事詩『パラシヤ』であるが、これは彼が眞に自己の道を發見するまでの摸索時代に屬するものであるから、ツルゲーネフの藝術の主なる道程を跡づけて行くには、『獵人日記』をもつて出發點とするのが至當であらう。これは既に知られてゐる通り、ロシアの農村生活を描いた二十五の短篇を集めたもので、その第一作『ホーリとカリーヌイチ』が一八四七年「現代人」に掲載されたときには、この眇たる短篇が單にロシア文學史のみならず、ロシアの社會生活に對して偉大な役割を演ずるに到らうとは、作者自身もまた雑誌の編輯者も夢にも考へなかつた。作者はこの作品に自分の頭文字を署名したに過ぎないし、編輯者は創作欄へ組み込むことを躊躇して、雑録欄へ編入したのである。しかし、この小篇が思ひがけなく識者の注意を惹いて、間もなく文壇全體の話題に上るやうになつた。

『ホーリとカリーヌイチ』は今日の讀者の目から見ると、何等奇とするに足るやうなものがないかも知れない。勿論、藝術的に渾然とした味はひのある好短篇ではあるが、しかし要するに、何等アムビシヤスな點を持たぬスケッチに過ぎない。では、なぜこの小品がかくまでに一世の注目を惹起したか？ 何かでもない、その中に現はれた對農村の態度である。

當時のロシアでは農奴制度の問題が、既に先覺者の研究と論議の對象となつて、その忌はしい軛から農民を救ふ事は、自覺せる知識階級の任務とされてゐたけれど、しかし農民そのものは無恥蒙昧な半野獸的存在であつて、これが文學作品の題材となり得るなどは、殆ど考へ得られない事であつた。もつとも、グリゴロヴィッチの『村』などの作品は既に現はれてゐたけれど、その中に描かれた農民はたゞ憐憫の對象となり得るのみで、そこに人間らしい倂を見出すことは、不可能といつていゝ程であつた。

ところがツルゲーネフは始めてロシアの農民を、優れた睿智と才能と、デリケートな感情と、純な魂の所有者として、讀者の面前に描き出して見せたのである。しかもグリゴロヴィッチの作に見られたやうな、しひて讀者の感情に訴へようとする不自然な誇張や咏嘆がなく、飽くまで沈着な寫實的手法を守りながら、その底に眞の藝術家にのみ見られる暖い同情を包んでゐる――これらすべては當代のロシアにとつて、驚異すべき新しいユニークな現象であつた。

『ホーリとカリーヌイチ』の目醒しい成功は、その頃自己の才能に疑ひを抱いて殆ど文學を捨てようかと思つたツルゲーネフに、勇氣と希望を奮ひ起させた。彼は幼い頃から蓄へた知識と觀察を傾けつゝ、農民小説のシリーズを續けて、遂に一八五一年巴里近郊の旅寓で、『獵人日記』の二十五篇全部を大成した。この書の出現はすべての心あるロシア人をして、今さら農奴制度な

るものの恐ろしく、忌はしい本質を痛感せしめたのみならず、長いあひだ解決し難い懸案として残されて来た農奴解放を實現する、直接の動機とさへなつたのである。當時まだ皇太子であつたアレクサンドル二世は、さういふ問題について殆ど風馬牛であつたが、一たび『獵人日記』を讀んで以來、農奴解放を思ふの情は、寸時も腦裡を離れなかつたと告白してゐる。

とは云へ、『獵人日記』は決して政治的宣傳を主としたパンフレットではない。天性柔和温良な詩人的魂の所有者たるツルゲーネフは、さういふ露骨で矯激な創作態度を取ることが出来なかつた。彼は不正な社會組織に虐げられて、暗い悲惨な動物的生活に陥つてゐる農民を如實に描寫しながら（思想上西歐派の陣に屬して、汎スラヴ派に對峙してゐたツルゲーネフであるから、ロシヤ農民の理想化やセンチメンタルな感傷に墮し得る筈がなかつた）、それと同時に、洗煉された藝術的直覺を以て、粗剛な表皮に蔽はれた農民の美しい人間性を、詩的憂鬱感に充ちた懐かしい自然を背景に啓示してゐる。實際、あまり露骨な仰々しい暴露的態度の缺如してゐる事が、かへつてこの作品の反抗としての力を強めてゐると云つていゝ。『ベージンの草野』に描かれた少年の純な詩情、『カリーヌイチ』『カシヤン』の藝術的素質、地主邸の下男に玩ばれ、棄てられる『あひびき』の可憐な少女——これらのものを、同じ書に收められた『二人の地主』の空疎淺薄な生活内容に比較するとき、農奴とその所有者の價值評價に際して、從來の標準を一變することが如何に焦眉の急であるかを、すべての人に痛感させずに置かなかつた。

この『獵人日記』はツルゲーネフの創作的特質を、殆ど残りなく包含してゐる。彼の藝術的進路は、この一作によつて決定されたものと云へる。

既に屢々のべた通り、ツルゲーネフは完成された最高の藝術家であるから、殆ど失敗の作とか

凡作とかいふものがない。殆どすべてが寶玉にも比すべき名工の名品であるが故に、その數多い創作の一つ／＼に立ち止まつて、精密な鑑賞を試みるといふことは、この小論のよくし得るところではない。こゝではたゞその概念を述べて、ツルゲーネフの藝術に關する正確な一般的理解を讀者に與へるに留めて置く。

『獵人日記』以後、ツルゲーネフの代表的大作が遭遇した共通の運命は、極端に相反した賛否兩様の評價である。彼の長篇小説の中で、批評家側から一致した例外のない讚辭を捧げられたのはたゞ『貴族の巢』一篇のみで、その他はすべて烈しい辯難・討論の對象とならなかつたものがない。それは一體なにに起因するのであらうか？ ほかでもない、これ等の諸作がそれ／＼、その時代の人心を支配してゐた核心問題に觸れてゐるので、批評家が單に思想方面からのみ作品に向つたからである。ツルゲーネフは高い教養を持つた思想家として、また敏感な藝術家として一般社會を支配してゐる時代風潮に、無關心でゐられる筈がない。従つて、彼は屢々政治・社會的テーマを選んだけれど、しかしツルゲーネフはより多く詩人であり、藝術家であるが故に、彼の作品に現はれた社會問題の取扱ひ方は、燒くが如き情熱に乏しく、寧ろ冷靜な客觀的批評解剖の性質を帯びてゐる。そして作品全體の重心は、生活現象の藝術的表現、個々の人物の心理描寫に存してゐるのであつて、狹義の社會問題は、悠久なる人生の一現象として偉大な全體の中に溶け込んでゐる。總じて、一切の精神的活動の生ける綜合であるところの藝術を、單に裸にされた思想問題のみの觀點から評價する事は、非常な冒險である事を考へなければならぬ。

ツルゲーネフの長篇の第一作たる『ルーヂン』（一八五六年）は、正義に對する熱情と、いかなる人をも動かさずには止まぬ雄辯を持ちながら、意志の力に缺けた實生活上の不能者であり、一

個の無用人である主人公ルーチンによつて、空論的理想主義に墮した四十年代の知識階級の典型を藝術化した名作であるが、しかしこの長篇も全文壇から一致した賞讃を博する事は出来なかつた。元來ルーチンは、青年時代の無政府主義者、バクーニンをモデルにしたものであるが、雄辯家・情熱家としてのバクーニンは、かなりよく寫されてゐるけれど、その社會的・政治的信念とそれに附隨する特性を逸してゐると非難された。またある批評家は、ルーチンが四十年代の知識階級の代表者として、作者から偉大な社會的使命を與へられてゐるにも拘らず、餘りに淺小虚弱な資質の所有者に過ぎないのに憤懣を抱いた。他の批評家は、この小説が一地主邸に於ける戀愛事件に終始して、複雑多面な現實との争闘に處するルーチンを描かなかつたのを缺點とした。勿論、この作品の中では、當代の思想的潮流も重大な役目を働いてゐるし、またそれが巨匠の驚嘆すべき技巧によつて、鮮かに物語りに織り込まれてゐるけれど、しかしその根底に横たはつてゐるのは、生きた個性の創造であり、心理的表現の問題であつた事は疑ひを入れない。

『ルーチン』から三年を経た一八五九年に發表された『貴族の巢』は、前にも述べた通り、あらゆる方面から例外なく讚辭を捧げられた唯一の長篇で、ツルゲーネフの藝術が圓熟しきつた事を遺憾なく證明する傑作である。死んだものと思つてゐた戀人の妻が、偶然姿を現した爲に、男の切なる哀願を斷乎として斥けて、熱烈な情火を冷たい尼寺の中へ葬り去つた、宗教的な強さを内面に藏せる純情の處女リーザは、現實的肉づけをせられた美しい永遠の女性の理想として、深い感激と敬虔の念を呼び醒まさずに置かない。『ルーチン』のナタリヤにおいても、ツルゲーネフの女性描寫の有する特殊の魅力は、等しく人々の注目を惹いたが、リーザに至つて遂にその頂點に達した觀がある。全體としてツルゲーネフの描いた女性は、その純真無垢な魂、感じ易い心、美

しい自己犠牲の精神、障礙に屈せぬ毅然たる意力、すべての點において男性に勝つてゐるのを見のがす事は出来ない。實にツルゲーネフの女性描寫は、作者の優美にして清純な、調和にみちた詩的世界觀の具象化といふべきであらう。

主人公のラヴレーツキイは、既にツルゲーネフの作中に屢々あらはれた、人生の失敗者・無用人のタイプに屬する人物であるが、個人的・家庭的に失敗した生活の餘力を、農民の間に於ける質朴な勞働に捧げようとする所が、從來の無用人型から離れて一步前へすすんでゐる。そればかりでなく、このラヴレーツキイが宗教的謙抑、深い國土的感情、人民の藏する眞理の認容——などの特性を附與されてゐるといふ事は、西歐派の立ち場を守つてゐたツルゲーネフとして、かなり異數のことに屬する。無用人型の實生活への復歸も、國民的精神の擡頭も、すべて目前に迫つた農奴解放によつて高潮を呈して來た、一般社會生活の光明的氣分の反響と解するのが至當であらう。

續いて翌年完成された小説『その前夜』に至つては、ロシアの社會に醗酵して來た自由に對する期待の情が、一そう明白に表現されてゐる。事實に於いて、農奴解放令の發布されたのは、すぐ翌年の一八六一年であつたから、『その前夜』といふ題名は、ツルゲーネフの藝術的直覺の鋭さを、雄辯に語つてゐるものと云つてよからう。しかし彼はロシア國民の自由の翹望を、獨自な形式で藝術化したのである。祖國の獨立運動のために戦ふブルガリヤの志士インサーロフに共鳴して、偉大な全人類的功業に燃えながら、親を棄て家を棄てて異郷の空にさすらふエレナこそ當時のロシア知識階級の期待と焦躁の象徴なのであつた。かうした政治的・社會的問題を一少女の戀愛事件に託する手法は、抒情的な傾向を帯びたツルゲーネフの藝術に必然的な附隨性であるけ

れど、同時に嚴重な檢閲の迫害を避けるための方便でもあつた。

この小説が世に現れた時、忽ち喧々囂々の論争と惡罵の渦中へ投げ込まれた。若い大學生や、文士・學者などの間では、嘖々たる好評を博したけれど、社會の上層に屬する人々は、極めて手輕な申譯的改革を期待しながら晏如としてゐたので、この長篇に現れた革命肯定の氣分に驚かさず、少からず不安を感じさせられた。「この『前夜』は決して『明日』を見られないだらう」といふ警句が行はれたのを見ても、その底に隠れた不安と恐怖を想像することが出来る。道德的側面から向けられた非難は、もつと手きびしかつた。いはゆる良家の家庭では、戀愛と結婚の問題を勇敢に躊躇なく解決したエレナを、穢らしい不良少女よばはりしたほどである。ある批評家は、この小説に峻嚴な難詰を加へたために、有志の人々からその論文の記念宴會を催して貰つたといふ逸話さへある。しかしトルストイはこの作をもつて『貴族の巢』より上に位するものとし、「當代に於いてこれだけの小説を書き得るものは、彼をおいて何人もない」と推稱した。

この當時、圓熟の頂上に達したツルゲーネフは、『その前夜』から一年おいた一八六二年に、彼の作中もつとも重きをなす力作と云はれる『父と子』を發表した。この小説ほど社會の廣い範圍に互つて、烈しい賛否・辯難の暴風を惹き起した文學作品は、殆ど他に例を知らぬくらいである。作者が主人公バザロフに與へた虚無主義者なる稱呼は、何となく不吉な威嚇を帯びた新流行語として口から口へ傳へられ、忽ちロシア全國へ擴まつて行つた。『父と子』の發表當時、これに對する批評界の態度は奇怪なものであつた。ほかでもない、全然相反した二つの陣から同時にこの作品に向けて、攻撃の矢が放たれたのである。舊時代を代表する保守派は、ツルゲーネフが作中の虚無主義者の前に跪拜して、舊い傳統の世界を愚弄し、嘲笑してゐると云つて憤激する

し、進歩派の青年は、主人公バザロフを新時代に對する諷刺畫と解釋して、自由の理想に對する裏切り者とまで痛罵した。バザロフは批評家ドロリユーボフをモデルにしたもので、作者はこの批評家に對する反感のために、ことさら冷笑的態度で舞文曲筆した——かういふ噂さへ坊間に行はれ、青年派の憎惡に油を注いだ。

『父と子』が舊時代の憤激を買つたのは當然のことで、そこに何の不思議もない。長い世紀に互つて洗煉された繊細な趣味性を有する、生れながらの貴族であるツルゲーネフは、藝術的趣味性やロマンチックな理想主義から解放された平民の子であり、かつ冷靜な科學者であり、極端な物質主義者であるバザロフに對し、深い内心の牽引を感じたのである。それは己れに缺けてゐる性格傾向に對して、しばし人の經驗する牽引と愛慕の情である。彼はバザロフの有する野性的な若々しい力に心からの愛情を寄せて、一つの偉大な肯定的人物として描き出した。従つて前時代の人々——父に對して、より多く否定的な陰影を與へたのは、自然の結果と云はねばならぬ。

しかしツルゲーネフは、己れの描く人物をみだりに理想化して、完全人に祭り上げるやうな事は出来なかつた。彼はバザロフを新時代の先驅者として、充分に熟し切つてゐない思想的半面をも如實に描出した。そのためバザロフは、骨の髄までのデモクライトであると共に、徹底的な個人主義者であつて、既成權威の否定を力説實行しながら、新しい社會的理想目的を明瞭に把握してゐない。彼は社會革命の運動にたづさはる人々を嘲笑し、彼らの努力の對象たる農民を輕蔑してゐる。つまりこの點が、農奴解放の實現に勇氣を鼓舞されてゐた當時の青年にとつて、赦しがたい侮辱と感ぜられたのである。

この場合においても、當時の時代的現象たる中間階級を描かうとする社會的動機が、生きた人間を客觀的に創造しようといふ、眞摯な藝術的本能によつて、幾分その力を弱められてゐる事實——ツルゲーネフの作品に共通の事實を指摘し得る譯である。

『父と子』によつて世間から受けた非難と罵詈は、ツルゲーネフの心に手痛い傷を負はせた。彼は厭世的な響きに充ちた抒情詩的斷片『足れり!』によつて、その精神的苦痛の一端を洩らしたが、その後(一八六七年)著した長篇『煙』において、更にその厭世的な調子を深めた。作筋は、傲岸で輕佻浮薄な美しい貴婦人の戀愛遊戲に傷つけられた男が、一旦すてた純眞な、つましい婚約の少女の胸に歸るまでの徑路を叙したもので、ツルゲーネフ独自の優婉な戀ひ物語であるけれど、その思想的背景となつてゐるのは、ロシア生活全體に對する暗い絶望的な氣分である。一切を空しい煙と見る題名そのものからして、作者のかうした氣持を窺ふことが出來よう。この長篇も、外國に亡命したロシアの革命家たちの、淺薄で無内容な生活を峻烈に暴露したために、進歩派の怒りを買つたことに言及して置く。

『煙』とその次に書かれた最後の長篇『處女地』の間には、十年といふ長い時の距たりが置かれてゐる。これはドストエーフスキイの『悪靈』と同じく、有名なネチャーエフの秘密結社事件を動機として書かれたもので、七十年代のロシア社會に瀰漫してゐた『人民の中へ』の運動を伴つた中核としてゐる。ツルゲーネフはこの小説において、二つの新しい典型を創造した。それは革命色の容貌風采をしたぢみな人間で、才氣煥發の華々しさは少しも持たないけれど、善良な温い魂と、深く潜めた智力と、不撓不屈の意力をもつて、周圍の人々を感化し敬服させながら、こつこつと目標をさして靜かに、確かな歩みを運ぶ、寡言黙行の實際家である。小説の他の主人公ネジダーノフが、感激し易いけれど持久力に乏しく、ハムレット型の弱々しい神經質な懷疑派で、從來の無用人タイプの知識階級の範圍から、一步も出てゐないのに反して、ソローミンは新時代の建設に眞の貢献をなし得る非凡なる凡人である。

女主人公のマリアンナも、謂ゆるツルゲーネフの女性の最も鮮明な代表者であるが、『ルーヂン』のナタリヤや『その前夜』のエレーナと異なる點は、彼女の勇敢な自己犠牲的行爲が、一定の男性に對する愛を源としないで、純然たる主義・理想に對する信念を原動力としてゐる點である。無論、彼女も戀ひをしたけれど、愛は彼女にとつて獨占的な意義を持たなかつた。ネジダーノフとの戀愛は、若人にあり勝ちな一時的熱中につき、ソローミンに對する感情も、理智を基礎とした落ちつきのある愛で、彼と手を繋ぎ合つた方が、事業の遂行に都合がよい、と認められたのである。

『處女地』もやはり、ツルゲーネフの長篇に共通の運命をまねがれなかつた。この作に描かれた革命運動の代表者が鈍い頭腦の所有者や、弱々しい懷疑派の集合であるために、またもや急進的青年學生の憤懣と嘲笑を買つた。ソローミンさへも彼らの目には、曖昧で不徹底な、妥協的漸進派としか映らなかつた。ツルゲーネフは外國にばかり暮してゐるので、本當の新しいロシアを知らないのだ。これが彼らの最後の結論であつた。

ツルゲーネフの晩年の作品ちゆう異色あるものとして、『散文詩』(一八八二年)一卷を逸してはならない。これは彼の折りにふれての感懷を洗煉され壓縮された、美しい、音樂的な散文に盛つた小品集で、形式の完備した點に於いて、他に匹敵を見ない名品である。そこには、ツルゲーネ

フの藝術の根本をなしてゐる一切の要素が聚約され、すべてのものが玲瓏たる珠玉に結晶して象徴的價値すら獲得してゐる。ツルゲーネフの藝術の眞髓に味到せんとする人々は、すべからくこの無韻の詩を心讀すべきであらう。

ツルゲーネフには其の他『村の一月』(五幕)『田舎婦人』(食客) (各一幕)等の戯曲がある。中でも『村の一月』(一八五五年)はツルゲーネフらしい幽婉な情緒に充ちたもので、チェーホフの静劇の先驅をしたものと云へる。

ツルゲーネフは脊髄癌を得て、半年以上も恐ろしい苦痛と戦つた後、一八八三年八月つひに巴里で客死した。

米川正夫

獵人日記 上卷

ホーリとカリーヌイチ

ボルホフ郡からジーズドラ郡へ越して来たことのある人は、オリョール縣とカルーガ縣の住民のタイプに、際立つて相違があるのに、一驚を喫したことだらう。オリョール縣の百姓は、あまり背丈が大きくなく、やゝ猫背氣味で、いかにも氣難しさうに上眼づかひに人の顔を見る癖があり、泥場で作つたやくざな小屋に住んでゐて、地主の畑へ出てお務めの仕事をするばかりで、商賣などする者はなく、粗末なものを食べて、靴の代はりに樹の皮鞋を穿いてゐる。ところが、カルーガ縣の小作百姓は、廣々とした松の木造りの小屋を住み家とし、背も高く、陽氣な悪びれない眼つきをしてゐて、顔なども小ざつぱりとして色が白く、バタやタールを商つて、日曜祭日には長靴を穿いて歩き廻はる。オリョールの村は（私はオリョール縣の東部のことを云つてゐるので、じく／＼した窪地をやつとこさで直して拵へた泥池の近くにあつて、多くは隅から隅まで耕された畑の真ん中に當たつてゐる。いつでも直ぐ間に合ふ少しばかりの楊の木と、二三本の瘦せひよろけた白樺を除けると、木らしい木は、一里四方があひだ眼にも當たらぬ。百姓家は互ひにくつゝき合つてゐて、屋根は腐つた麥藁でぞんざいに葺いてあるばかり：カルーガの村はその反對で多くは森に圍まれてゐる。百姓家もゆつくり間隔を置いて竝らんでゐる上に、立ちもしつかりして屋根は板葺きになつてゐる。門の締りも嚴重で、背戸の編み垣も壊れかゝつたり、そつぽへのめつたりしてゐないから、通りすがりの豚に踏み込まれるやうな恐れもない：で、銃獵家にとつてはカルーガ縣の方が有難いのである。オリョール縣では、いま五年もたつと、僅

かばかり残つてゐる森も藪地も、悉く跡を断つてしまふに相違ない。沼などは樂にしたくもないのである。カルーガ縣の方はそれどころか、禁伐林が何百露里となく續いてゐるし、沼地も何十露里かに亘つて繋がり、あの上品な鳥——えぞやまどりも未だに跡を断たず、お人好しの田しきも棲んでゐる。それに何時も氣忙しないしやこがけたましく飛び立つて、鐵砲打ちや獵犬を浮き浮きもさせるし、驚かせもするのである。

私は銃獵家としてジーズドラ郡を訪れてゐる中に、原中でポルトウイキンといふカルーガ縣の或る小地主と近づきになつた。これは熱心な銃獵家だつたから、勢ひ立派な人間と云はなくてはならない。尤も、この人にも二三の弱點はあつた。例へば縣内の裕福な年頃の娘といふ娘に縁談を持ちかけては、その方の話はもとより出入りまで断られた揚句、傷ついた心を抱き乍ら、ありたけの親友や知人にその悲しみを打ち明ける癖があつた。それでゐて、娘の両親には相變はらず酸っぱい桃だとか、その他自分の家の畑でとれる果物類を贈物にするのであつた。それから、いつも同じ輕口話を好んで繰り返したが、當のポルトウイキン氏は大いに面白いつもりでゐるにも拘らず、一向誰もをかしがらないのである。アキム・ナヒーモフの作品を褒め立て、『ピンナ』と題する小説に隨喜してゐる始末だし、それに吃りの癖まであつた。自分の獵犬を天文學者と呼び、「けれど」といふ代はりに、「けんど」と云ふ。自分の家では佛蘭西料理と稱するものをやつてゐるが、その秘訣は抱への料理人に云はせると、あらゆる食料品の自然の味をすつかり變へてしまふことなのであつた。この藝術家の手にかゝると、肉はふんと魚臭くなるし、魚は茸の匂ひを立てるし、マカロニーは火薬臭くなるのが落ちであつた。その代はりたどへ一切れの人蔘でも、菱形か四邊形にしなければ、決してスープの實に使はないのである。しかし、これ等の僅かなつ

まらない缺點を除けば、ポルトウイキン氏は前にも云つたとほり、立派な人物なのであつた。

私が初めてポルトウイキン氏と近附きになつた時、彼は早速その日に私を自分の家へ招いて、一晩泊まつて行くやうに勧めた。

「私の家までは、かれこれ五露里もありますので、」と彼は云ひ添へた。「歩いて行つたら、中々容易なことやありません。そこで先づホーリの家へ寄ることにしませう。」（私はこの男の吃りを一々寫さないことにするから、その點讀者の寛恕を乞ふ。）

「そのホーリといふのは何者です？」

「私の領地の百姓として……から極く近い所にあるんです……」

私たちはホーリの住居へ向かつて行つた。とある森の眞ん中に、すつかり伐り開いて綺麗に坦らした空地があつて、其處にホーリの住居がたつた一軒だけ高く聳えてゐる。住居と云つても、松の丸太で造つた小屋二三軒に分かれてゐて、それを板圍ひで繋いだものである。母屋の前には、細い柱で突つかひをした片庇が續いてゐる。私たちは入つて行つた。年の頃二十歳ばかりの、背の高い綺麗な若者が、私たちを出迎へた。

「あゝ、フェーチャ！ ホーリは家かい？」とポルトウイキン氏は訊ねた。

「留守でがす。ホーリは町へ行きましてたんで。」若者はにつこり笑ふ拍子に、雪のやうに白い齒並みを見せながら答へた。「馬車の用意をするんですか？」

「あゝ、さうだ、馬車だ。それからクワスを持つて來て貰はう。」

私たちは家の中へ入つた。少しの汚れ目もない丸太組みの壁には、安っぽい木版畫などは一枚

も貼りつけてなく、銀造りのどつしりした聖像の前には、ちやんと燈明が灯つてゐるし、菩提樹の卓はつい近頃匏をかけて、きれいに洗ひ上げてあつた。丸太の間や窓柱にも、いたづら者のごきぶりもちよろ／＼してゐないし、分別臭い様子をした油虫もかくれてゐない。若者は間もなく、上等のクワスをなみ／＼と注いだ大きな白い水呑みコップと、小麥パンの大きな切れと鹽漬けの胡瓜を十二本ばかりのせた木皿を持つて姿を現はした。彼はこれだけの物を卓の上に置くと戸口に凭れかゝつて、にこ／＼しながら私たちを見廻し始めた。私たちがこのランチを食べ終らない中に、もう入口階段の邊りで馬車の轍が鳴り始めた。私たちは表へ出た。髪を房々と渦巻かした、頬の赤い、十五歳ばかりの少年がちやんと馭者臺に腰かけて、よく肥えたまだら馬をやつとのことで制してゐた。馬車の周りには六人ばかりの逞ましい若者が立つてゐたが、みんなお互ひ同志も似てゐるし、フェーチャにもそつくりであつた。『みんなホーリの忤なんぞ！』とポルトゥイキンが教へてくれた。『みんな仔臭猫でさ、』後から入口階段へ出て来たフェーチャが、かう合槌を打つた。『おまけに、これでもまだみんな揃つちやゐねんですよ。ポタープは森へ行つてるし、シードルはおやちと一緒に市へ出掛けたし……いゝか、ワーシャ。』と彼は、馭者の方へ向いて言葉を續けた。『一息にかつ飛ばすんだぞ。旦那様のお伴だかんぞ。だけど、道のでこぼこした所は、氣いつけてそろつとやれや。でねえと、車を壊した上に、旦那の腸をでんぐり返さすからな！』ほかの仔臭猫どもはフェーチャの軽口を聞いて、にやりと笑つた。『天文學者を乗せてくれ！』とポルトゥイキン氏は物々しい調子で叫んだ。フェーチャは自分も面白さうな様子で、わざとらしくにや／＼笑つてゐる犬を宙にさし上げて、馬車の底へ下ろした。ワーシャは馬の手綱を捌いた。馬車は走り出した。『そら、あれが私の事務所です。』不意にポルトゥイキン氏は一軒の小

さな低い家を指さしながら私に向かつてかう云つた。『寄つて御覽になりますか？』結構ですな。『今ではもう使つてゐないんですが、』と彼は入りながら説明した。『それでも一見の價値はありますでな。』事務所はがらんとした部屋が二間きりだつた。めつかちの年とつた番人が、裏庭の方から走つて来た。『今日は、ミニャーイッチ。』とポルトゥイキン氏が口を切つた。『だが、水は一體どうした？』めつかちの老人は姿を隠したと思ふと、すぐ水を一杯入れた瓶にコップを二つ添へて、引つ返して来た。『一つ味をきいてみて下さい。』とポルトゥイキンは私にすすめた。『これは私の自慢の素晴らしい清水なんです。』私たちはコップに一杯づつ飲んだ。すると、老人は小腰を屈めてお辭儀をした。『さあ、これでいよく出かけても好きさうですな。』と私の新しい友人が云つた。『この事務所で、私は商人のアリルーエフに、五町歩の森をいゝ値で賣つたものですよ。』私たちはまた馬車に乗りこんで、三十分ばかり経つた時にはもう地主邸の門内へ乗りつけた。『ねえ、一つ伺ひたいものですが、』と私は夜食の時にポルトゥイキンに訊ねた。『どうしてホーリはあなたの領地内でも、ほかの百姓たちとは別に離れて住んでゐるんでせう？』
「實はかういふわけなんです。あれはなか／＼分別のある百姓としてな、二十五年ばかり前にあれの家が焼けてしまつた時、亡くなつた親父の所へやつて来て『どうか、ニコライ・クジミッチ、あの沼地とこの森に家を建てさせて下さいませんか、さうすれば、年貢も前よりか餘計にお納めしますから、』と、かう云ふぢやありませんか。『一體なんのために沼地へ越して行きたいんだ？』『いえなに、なぜといふわけはありませんので。たゞ、旦那様、ニコライ・クジミッチ、どうかお邸の畑仕事や何かは、一切御免にして頂き度うござります。その代はり年貢の方は、なんとでも思召し通りにお決め下さるやうに。』では、年に五十ルーブリだ！』よろしうござりま

す。『だが、滞りのないやうに氣をつけないと、承知せんぞ！』とんでもない、決して滞るやうなことは致しませんとも……』まあ、かう云つたやうなわけで、あの男は沼地に住むやうになつた。それ以來やつには臭猫といふ綽名がついたんで。

「は、あ、そしてうんと身代を太らせたいんですね！」

「太らしましたよ。今では現金で百ルーブリの年貢を納めてをりますけど、もつと値上げしてやらうかと思つてゐる位なんで。私はもう幾度となくあの男に『おい、ホーリ、身抜きしろよ、本當に身抜きして自由になれよ！』と云つたものですが、あの男もさる者で、ない袖は振られん、金がないなんて、まことしやかに云ひ張るんでしてね……ふむ、そんな馬鹿なことがあつていゝものか……」

翌日、私たちは茶を飲むと直ぐ、またもや獵に出かけた。村を通り抜けながら、ポルトウイキン氏は、軒の低い百姓家の傍らで、馭者に命じて車を止めさせ、よく透る聲で、『カリィヌイチ！』と呼んだ。『たゞいま、旦那様、たゞ今。』といふ聲が背戸の方から聞こえた。『いま草靴の紐を結んで居りますで。』私たちはそろ／＼馬車を進めて行つた。村はづれの所で、四十ばかりの男が追ひついた。瘦せて背が高く、小さな頭を後ろへ反らしてゐる。これがカリィヌイチなのであつた。ところ／＼痘痕の見える、色の淺黒い、人の好きさうな彼の顔は、一眼見ただけで私の氣に入つた。カリィヌイチは（あとで知つた事だけれど）、毎日旦那のお伴をして獵に出かけ、獲物袋を持ち歩いたり、時には鐵砲をかついだり、鳥の止まる所を見付けたり、水を汲んで來たり、苺を摘み集めたり、掛け小屋を作つたり、馬車の跡からついて走つたりした。かういふわけで、ポルトウイキン氏はこの男があないと、まるで手も足も出ないのであつた。カリィヌイチは極く暢氣

な、しかもこの上なく温順しい性質の男で、のべつ小聲に鼻唄を歌ひながら、暢氣さうに四方八方を見廻してゐるのであつた。ものを云ふ時は少し鼻にかゝつて、にこ／＼しながら薄青い眼を細め、楔形をした疎らな鬚をのべつしごく癖がある。歩き方は早くはないけれど、細長い棒に軽く凭れる様にながら、大股にさつさと足を運ぶ。その日一日の間に、彼は再三私に話しかけて、厭味のない物腰で何くれと世話をしてくれたが、主人の面倒を見る様子といつたら、まるで子供扱ひであつた。焼きつくやうな眞晝の暑さに堪へかねて物蔭を求めずに居られないやうな時など、彼は森の一番奥まつた所にある自分の養蜂場へ案内して行つた。カリィヌイチは香りの高い乾草の束をかけ連ねた小屋の戸を開けて、私たちをすか／＼しい乾草の上に臥させてくれた。さうしておいて、自分は網のついた囊みたいなものを頭に被り、ナイフと壺と燃えてゐる薪を持つて、私たちのために蜜の房を切りに出かけて行つた。私たちはまだ暖い透き通つた蜜を清水で飲んで、單調な蜂の唸り聲と、うるさい木の葉の囁きに耳を擱らせながら、うと／＼と假睡んだ。

微かなそよ風のざわめきが、私の眼を覺ました……眼を開けて見ると、そこにカリィヌイチがある。彼は半ば開いた戸口の闕に坐つて、小刀で木匙をこしらへてゐる。私は長い間、夕空のやうに明るく愼ましいその顔を、あかず見惚れてゐた。ポルトウイキン氏もやはり眼を覺ました。私たちは急には起き上がらうとしなかつた。長く歩き廻つた揚句、ぐつすり寝込んだ後で、ちつと乾草の上に臥てゐるのが、いゝ氣持ちなのであつた。身體は甘く萎えたやうにぐつたりして、顔はかるく上氣し、心よいもの憂さに眼がひとりでにふさがる。そのうちにやつと起き上がつて、また夕方までぶらつきに出かける。夜食の時に、私はまたしても、ホーリとカリィヌイチの話をはじめた。『カリィヌイチはいゝ百姓ですよ。』と、ポルトウイキン氏は云つた。『こまめによ

く働く男でしてな。けんど、きちんと世帯を張つて行くことが出来ないですよ、なにしろ私が始終ひつ張り出すので、毎日私のお伴をして獵にばかり出かけるもんですから……全く世帯どころぢやありませんよ——考へても見て下さい。』私はそれに同感の意を表した。やがて私たちは床についた。

翌日、ポルトウイキン氏は用事があつて、隣り村のピチュコブといふ地主と一緒に、市へ行かなければならなかつた。隣り村のピチュコブはポルトウイキン氏の地所に鋤を入れた上、その地所でポルトウイキン氏の抱へてゐる百姓女を鞭で折檻したのである。で、私は一人で獵に出かけた。日暮れ前に、ちよつとホーリの家へ寄つてみた。家の閨で一人の老人に出あつた——頭の禿げた、背の低い、肩幅の廣い、肉付きのいゝ男で——これが主人のホーリであつた。私は好奇の念を抱きながら、暫らくこのホーリをみつめてゐた。彼の顔のつくりはソクラテスを聯想させた。同じやうにでこぼこした高い額、同じやうに小さな眼、同じやうな獅子つ鼻。私たちは一緒に家の中へ入つた。例のフェーチャが牛乳と黒パンを持つて来てくれた。ホーリは床几に腰を下ろして、縮れた頰鬚を悠然と撫でながら、徐ろに私と話を始めたものである。彼は自分の尊嚴を感じてゐるらしく、ものの云ひ方も身のこなしも、ゆつたりとして、時々長い口髭の間から、にやにや笑ひを洩らすのであつた。

私たちは時きつけのことや、收穫のことや、百姓の暮らし向きのことなどを話し合つた……彼はなんでも私の話に同意するやうな風だつたけれど、後で私は妙に氣がさして來た。自分が見當ちがひな話をしてゐるやうな感じがするのであつた……とに角、なんだか變てこな調子なのである。ホーリはどうかすると、やゝこしいものの云ひ方をした。きつと大事をとるためだらう……

一つ私たちの會話の見本をお目につけよう。

「ときにホーリ、」と私は彼に云つた。「なぜお前は旦那に身のしろ金を拂つて、自由にならないんだね、え？」

「わしが自由になつてどうするのでござえますか？ 現在わしはうちの旦那様の氣性もよく呑み込んでゐるし、年貢の事だつてちやんと分つて居りますでな……うちの旦那は結構なお方でござえますよ。」

「それだつて、やはり自由の身になつた方がいゝだらうに。」と私が注意した。

ホーリはじろりと私を横目に眺めた。

「そりやもう分かりきつたこんで。」と彼は云つた。

「ぢや、一體どうして自分の身拔きをしないんだい？」

ホーリは首を一捻りした。

「だつて、旦那様、身拔きをする金がどこにありませんぞ！」

「ふむ、空つ恍けるのは澤山だよ、爺さん……」

「ホーリなんか自由な衆の仲間入りをしたら、」と彼は獨言のやうに小聲で續けた。「そしたら、鬚のない人間はみんなホーリの旦那になつてしまひませうて。」

「ぢや、お前も鬚を剃つてしまつたらいゝだらう。」

「鬚なんかなんでもござえませぬ。鬚は草も同じこんだから、刈つたつて構やあいたしません。」

* 頰鬚を蓄へるのは殆ど農夫に限られてゐるところから、農奴である間は地主が主人であるが、ただの平民とな

れば、中産知識階級全部に蔑視されると云ふ意味が出て來る

「へえ、それぢや一體どうすると云ふんだ？」

「それはつまり、ホーリがやんがて、あきんどにならうといふわけなので。商人はいゝ暮らしをして、おまけに鬚もちゃんとしやして居りますでな。」

「なんだつて、ぢやお前は商賣の方もやつてるのかい？」と私は訊ねた。

「ぼち／＼商ひをやつてをりますよ、バタダのタールだの……ときに、旦那、如何でござえます、馬車の支度をいたしませうか？」

『こいつ、口も達者だし、腹にも一物ある男だな。』と私は考へた。

「いや、」と私は口に出して云つた。「馬車は要らない。明日はお前の家の周りをうろつくことにするから。もし構はなけりや、お前んとこの乾草小屋に泊まらして貰ひたいんだが。」

「さあ／＼、よろしうござえますとも。だけど、納屋の中なんぞで、ゆつくりお出来になれませかね？ 女どもに云ひ付けて、敷布でものべさしたり、枕の一つも置かせませうわい——おい、女ども！」彼は腰を持ち上げながら、かう叫んだ。「こつちだ、こつちだ……それからフェーヂャ、お前も一緒にやつて来う。なんせ、女どもは氣の利かねもんだでな。」

十五分ばかり経つてから、フェーヂャは角燈を提げて、私を納屋へ案内した。私は香りの高い乾草の上に身を投げ出した。犬が足もとに丸まつて臥た。フェーヂャは私におやすみと云つて出て行つた。戸がぎいと軋んで、ぱたんと閉まる。私はかなり長い間、寝つかれなかつた。牝牛が一頭戸の傍へ来て、二度ばかり騒々しく鼻息を洩らした。犬は聲に威嚴を響かせながら、戸の方を向いて、うゝと唸つた。豚が物思はし氣にぶう／＼云ひながら、傍を通り過ぎて行く。どこか近くで、馬が乾草を噛んで鼻を鳴らしはじめ……私はやつとのこと、うと／＼した。

夜のひき明けに、フェーヂャが起こしに來た。この陽氣で元氣のいゝ若者はすつかり私の氣に入つてしまつた。それに、私の觀察した範圍では、彼はホーリ老人の秘藏つ子でもあるらしかつた。彼ら親子は優しい愛情の籠もつた調子で、お互ひ同志からかひ合つてゐた。老人が私を迎ひにやつて來た。私がわが家の屋根の下で一夜を過ごしたためか、それとも何かほかにわけがあるのか、とにかく、ホーリの態度は昨日よりずつと愛想がよくなつた。

「サモワールの用意が出來て居ります。」と彼はにこ／＼しながら云つた。「お茶を飲みに来てくだせえ。」

私たちは卓の傍に腰を下ろした。嫁の一人の丈夫さうな女が、牛乳を入れた壺を持つて來た。息子たちもみんな順々に、家の中へ入つて來た。

「お前んとこの若い衆たちは、實にいゝ身體をしてゐるなあ！」と、私は老人に、自分の感じを云つた。

「さよで。」砂糖の塊りを小さく噛み砕きながら、老人は云つた。「悴どもにしても、わしや婆さんに苦情を云ふ種は、何もない筈でござえますよ。」

「みんなお前と一つ家に暮らしてゐるのかい？」

「みんな一緒にござえます。自分からさうしてえといふから、こんな風に暮らしてゐるんで。」

「みんな女房持ちかね？」

「ほれ、あすこに一人いたづら小僧が、まだ嫁を貰はねえでゐますよ。」相變はらず戸に凭れかゝつてゐるフェーヂャを指さしながら、彼はかう答へた。「末のワーシカ、あれはまだ年がいかねえから、も少し待つてもよろしいんで。」

「おらが嫁なんか貰つて何にするだ？」とフェーチャが口を入れた。「このまゝでも何不足はありやしねえ。女房なんか何になるんだ？ 夫婦で唾み合ひでもしろつてのかい？」

「ちよつ、この野郎……俺はもうちゃんと知つてるぞ！ 銀の指環なんか嵌めこみやがつて……てめえは何時までも、お邸の女中どもといちやついてゐたいんだらう……『およしつてばさ、この助平！』」老人は小間使ひの口眞似をしながら、言葉を續けた。「俺はもうてめえの腹ん中ちやんと見抜いてるだぞ、こののらくら奴……」

「なら、女房なんて一體どこがいゝんだ？」

「女房は働き手だ。」とホーリは物々しげに云つた。「女房は男の片腕だかな。」

「なんだつておらに働き手が要るだよ？」

「それ、それ、てめえは他人の禰で角力をとるのが好きな奴だ。てめえ達のやうな人間の氣持ちは知れ切つてゐるわさ。」

「ふん、そんなら嫁貰つてくんろ、え？ どうした？ なに黙り込んでるだ？」

「いや、もう澤山だ、澤山だよ、口のへらねえ野郎だ。みる、旦那に御迷惑ぢやねえか。まあ、今に貰つてやるよ……もし旦那様、どうかお腹立ちのないやうに。御覽のとほりのねんねえで、まだねつから分別がついて居りませんでな。」

フェーチャは不足らしく頭をふつた……

「ホーリはうちかね？」といふ耳に覺えのある聲が、戸の外で聞こえた。——と、カリーヌイチが家の中へ入つて來た。仲よしのホーリのために摘んで來た野苺を一束手に持つてゐる。老人は愛想よく出迎へた。私はびつくりしてカリーヌイチをみつめた。正直なところ、私は百姓にこ

んな『細やかな心づかひ』があらうとは、思ひもかけなかつたのである。

私はその日いつもより四時間ばかり遅れて、獵に出かけた。それから續けて三日間、私はホーリの家で暮らした。新しく知り合つたこの一家の人々が、私の興味を唆つたのである。どういふわけで彼等の信用を博したのか知らないが、みんなは他意なく私と話をしてくれた。私はいゝ氣持ちで彼等の話を聞き、その言行を觀察した。二人の友達は互ひに少しも似た所がなかつた。ホーリは堅實な實際家肌の人間で、政治的な頭を持つた合理派であつたが、カリーヌイチはその反對に理想家で、浪漫派で、感激し易い空想家の部に屬してゐた。ホーリは現實といふものを呑み込んでゐた。といふのは、立派に世帯も張るし、小金も溜めるし、主人や土地のお役人方ともうまくばつを合はせて行つたのである。カリーヌイチは木の皮鞋を穿いて歩く始末で、その日の暮らしもやつとこさであつた。ホーリは大人數の家族を生み出して、それを従へ和合させる腕があつた。カリーヌイチの方は、いつか女房を持つたこともあるけれども、その女房を怖がつてばかりゐたので、子供もたうとう出來ずじまひであつた。ホーリはポルトゥイキン氏を、腹の底まで見抜いてゐたが、カリーヌイチは主人の前で唯々諾々としてゐるばかりだつた。ホーリはカリーヌイチを可愛がつて、保護者然とした態度をとつてゐたが、カリーヌイチはホーリを愛してゐるばかりでなく、尊敬してゐるのであつた。ホーリは餘り口敷を利かないで、にや／＼笑ひながら、何事も腹の中で合點してゐた。カリーヌイチは熱のある話しぶりをしたけれど、それかと云つて威勢のいゝ工場職人のやうに、圓轉自在な洒落を飛ばすわけでもない……けれど、カリーヌイチはホーリでさへも認めるくらゐな、生まれつきの長所を持つてゐた。例へば出血や驚風や氣狂ひを呪文で癒したり、蟲を下したりするし、蜂蜜を飼つても必ずうまく行つた。つまり當

たり屋なのであつた。現に私の見てゐる目の前で、ホーリが新らしく買つた馬を既に引き入れてくれと頼んだとき、カリーヌイチは人の好い勿體ぶつた様子をしながら、老懷疑家の頼みを實行した。カリーヌイチは自然の方に親しんでゐたし、ホーリの方は人間や社會により多く接してゐた。カリーヌイチは理窟をこね廻すのが嫌ひで、何事も盲目的に信ずる性質であつたが、ホーリは一段高い所に立つて、皮肉な眼で世の中を見下ろしてゐるほどであつた。彼は廣く見、廣く知つてゐたので、私などもいろ／＼彼に啓發されるどころがあつた。例へば、毎年乾草刈りの前に一風變はつた恰好の小さな車が、村々に現はれるなどといふことも、彼の話から知つたのである。その車には長上衣を着た男が乗り込んでゐて、草刈りの大鎌を賣るのである。現金ならば、一ルーブリ二十五コペイカ、紙幣ならば、一ルーブリ五十コペイカ、附けて買へば紙幣で三ルーブリと、銀貨で一ルーブリなのである。百姓はみんな云ふまでもなく、附けて買ふものばかりである。二三週間たつと、又この男が姿を現はして、貸金の取り立てをする。百姓はつい燕麥を刈つたばかりなので、従つて拂ふ者もあるといふわけである。で、商人と一緒に居酒屋へ出かけて、そこで勘定を済ますことにしてゐる。地主の中には、自分で鎌を現金で仕込み、それを同じ値段で百姓たちにつけ賣りにしよう、とかういふ考へを起こした者もあるけれど、百姓は反つてそれを不平がつて、悄氣かへつてしまつた位である。といふのは、大鎌の刃を爪で弾いてその音に耳を澄ましてみたり、兩手に持つて引つくり返してみたり、油断のならない顔付きをした町の商人を掴まへて、『どうだ、お前、この鎌はどうもてえしたもんぢやなさうだな？』などと、十ぺんも二十ぺんも訊ねたりする楽しみをふいにされてしまつたからである。小鎌を買ふ時にも、やはり同じやうな仕草がくり返されるのだが、たゞ違ふところは、女房どもが話に口を出すこと

で、餘りのうるさゝに、どうかすると商人の方が仕方なしに女房どもを撲りつけて、懲らしめなければならぬこともある。しかし、女房どもが一番ひどい目に逢はされるのは、先づ次のやうな場合であらう。製紙工場へ材料を納める請負人が、ある郡では『鷲』と呼ばれてゐる一種特別な連中に、ぼろの買ひ集めを頼むのである。かういつた風な『鷲』は、請負人から二百ルーブリばかりの紙幣を預つて、獲物を集めに出かけてゆく。けれども、その名に負ふ高潔な鳥とは反對に、彼等は公然と大膽に飛びかゝつて行かうとしない。それどころか、『鷲』どもは奸策と狡智を應用するのである。先づどこか村近くの繁みのなかに車をかくしておいて、自分は通行人か、それともたゞのらくら者の風を装ひながら、背戸や裏口傳ひに廻つて歩く。女どもは彼等の近づいて来るのを感じて嗅ぎつけて、こつそりとその方へ忍んで行く。かうして、賣買の取り引きがそくさと、大急ぎに済まされてしまふ。僅かばかりの赤錢と引替へに、女房は要らないぼろ切ればかりでなく、亭主の襦袢や自分の腰巻までこの『鷲』に賣り拂つてしまふことも、珍らしくないのである。近頃では自分の麻、取り分け大麻を盗んで、同じやうな手順で賣り飛ばしてしまふのを、うまい儲けのやうに考へることが流行つて來た。——これなどは『鷲』連中にとつて、商賣の發展でもあり、大した進歩でもある！ その代はり、百姓はまた百姓で警戒を始め、『鷲』が現はれたといふ噂をうす／＼聞き傳へたばかりで、ほんの少しでも怪しいと睨んだが最後、いきなり容赦なく匡正と豫防の方法を講ずるのであつた。じつさい彼等としては、癪に障るのも尤もである。麻を賣るのは男連の仕事であつて——又たしかに男連が賣つてゐる——それも町でなく——町へは自分でわざ／＼行かなければならぬから、村廻りの小商人に賣るのである。この連中は秤を持つてゐないので、麻を四十遍擱んで、それを一ブード四貫目強と勘定する。——ところが

一掴みがどんなものか、露西亞人の掌がどんなに大きいか、殊に『一生懸命になつた時』どれだけ掴めるか、それは御想像に任せて置く！ 私は世上のことに疎く、田舎に来ると『とろくせえ』このオリョール縣ではこんな云ひ方をする。人間ではあつたが、こんな話をふんだんに聞かされたものだ。けれども、ホーリはいつも自分で話をするばかりでなく、私にもいろんなことを訊ねた。私が外國に行つたといふことを知ると、彼の好奇心は急にぱつと燃え上がった。……カリーヌイチも負けてはゐなかつた。けれど、カリーヌイチの方はどちらかと云ふと、自然だとか、山だとか、瀧だとか、素晴らしい建物だとか、大きな町だとか、さういつた風の話に餘計感心するのであつた。ホーリの方は行政だとか、國家とかいふ問題に興味を持つてゐた。彼は何事も順序だつて訊ねる癖があつた。

『で、どうでがすな、これは向かうでもこちらと同じ風でござえますか、それとも違つて居りますか？ ……さあ旦那、聞かせて下せえ——どうでがすな？ ……』『へえ！ ほんまにまあ、魂消たもんだ！』とカリーヌイチは、私の話してゐる間中こんな叫び聲を立てる。ホーリは無言のまま、濃い眉を顰めて、ほんの時々、『これはこつちにや向かねえでござえますよ。だが、この方なら結構でがす、——それならちゃんと筋が通つて居りますでな。』彼の質問を残らず讀者にお傳へすることは出来もしないし、また必要もない事である。けれど私達の話の中から恐らく讀者諸君が夢にも想像されない様な一つの信念を、私は獲得したのである。——それは他でもない、ピョートル大帝は主として露西亞人である。しかもその改革の仕方が露西亞的なのである。露西亞人は自分の力と粘り強さを信じ切つてゐるので、自分で自分の身體を壊すのさへ敢へて辭さない。露西亞人は餘り自分の過去にこだはらないで、大膽にさきの方を見つめてゐる。なんでも善いもの

のだつたら氣に入るし、道理に叶つたものならさつさと取り入れる。それがどんな所から出てゐるかといふことは——一向にお構ひなしである。露西亞人の常識は、好んで獨逸人の無味乾燥な理窟ぜめを嘲弄するのであるが、ホーリに云はせると、獨逸人は面白い國民で、彼等に物ごとを學ぶのは自分も賛成だといふのである。ホーリは、自分が特殊の立場にあつて、實際的に獨立の位置を占めてゐたおかげで、私と話をしている間にも、他の百姓なら金輪際いはいやうなことを——百姓の言葉をかりると、挽臼にかけても搾り出せないやうなことを、いろ／＼と聞かせてくれた。彼は全く自分の位置をちゃんと了解してゐた。ホーリと喋つてゐる中に、私は初めて露西亞の百姓の、單純でしかも賢い言葉を聞いたのである。彼の知識は自己流のものであつたけれど、可成り廣かつた。そのくせ眼に一丁字もないのである。ところが、カリーヌイチは字が讀めた。『こののらくら者にはちゃんと言書き教授かつたんでさ。』とホーリは云つた。『こいつの手にかゝると蜜蜂までが一度も死んだことがないんで。』『ところで、お前は自分の子供に讀み書きを習はしたかね？』ホーリは暫らく黙つてゐた。『フューヂャは知つて居りますよ。』『で、ほかのは？』『ほかの奴等は知らねえでがす。』

『それはどうしたもんだね？』と問ひ返すと、老人は返事をしないで、話頭を轉じてしまつた。尤も彼は伶俐な男ではあつたけれど、それでもいろんな偏見や我執を持つてゐた。例へば、女といふ者を心底から輕蔑して、機嫌のいゝ時には、女どもをからかつたり、慰みものにしたたりする。彼の女房は口喧ましい婆さんで、一日燧燧から下りようとしないで、のべつぶつくさ云つたり、悪態を吐いたりしてゐた。息子たちはてんで相手にしなかつたが、嫁どもはまるで祟り神さまのやうに恐れて、しつかり抑へつけられてゐた。よく露西亞の民謡に、姑が『お前はわしの

息子でもなし、家の主人とも云はれぬぞ！ 自分の女房をよう撲たぬ、若い女房をよう撲たぬ：』と唄つてゐるのも止むを得ぬ次第と云はなければならぬ。私は一度、嫁どもの肩を持つてやらうと考へて、ホーリの同情心を呼び覺まさうと試みた。けれども、彼は落ちつき拂つて、『旦那様、そんな：つまんねえことにかゝづらふなんて、いゝ物好きでござえますよ——女どもは勝手に喧嘩させとくがいゝんでさ：やつ等を引き分けると、却つていけねえです。それに何もいらぬお節介をして、自分の手を汚すことあござえませんよ。』と抗議を唱へたことである。どうかすると、この意地悪な婆さんが煖爐から這ひおりて、入口の廊下から番犬を呼び出し、『こい、こい、しろ、來い！』と云ひながら、その瘦せた背中を火かきで撲りつけるか、でなければ、庇の下で立つて、傍を通るもの一人一人を相手に、ホーリの云ひ草をかりると、『畦み合ひ』を始め。それでも、自分の亭主は怖がつてゐたので、結局その云ひ付けで仕方なしに、また煖爐の上に引つ込んでしまふ。けれど、何かの拍子でポルトゥイキン氏の話が出た時、ホーリとカリーヌイチの二人が争論するのを傍で聞いてゐると、格別面白かつた。『おい、ホーリ、旦那の事だけとはやかく云ふでねえ。』とカリーヌイチが云つた。『そりやまたなんで、旦那がお前に長靴を拵らへてくれるわけでもあるめえし。』と、こちらはやりこめた。『えつ、長靴だつて？：：：なんだつて、俺に長靴なんか要るだ？ 俺、百姓でねえか：：：』ほら、俺だつてやつぱり百姓だけんど、みる：：：』かう云ひながら、ホーリは片足を上げて、カリーヌイチに靴を見せびらかした。恐らく、マンモスの皮でも造つたものだらう。『なあに、お前と俺とは一つ話に行くもんけえ！』とカリーヌイチは答へた。『ふむ、それでもせめて草靴代でもくれたらよささうなもんだに。だつて、お前は旦那の獵のお伴をするだから、きつと草靴も一日に一足は穿き潰すだらうに。』草靴

代はちやんと下さるだよ。』さうだ、去年十コペイカ玉をお頂戴したつけな。』カリーヌイチは忌忌しさうにそつぽを向いてしまふ。すると、ホーリは面白さうに聲を立てて笑ふ。彼の小さな眼はすつかり見えなくなつてしまふのであつた。

カリーヌイチは中々いゝ聲で歌も唄ふし、バラライカも少しは弾けた。ホーリはちつとそれに聞き入つてゐたが、やがて不意に首をかしげて、情けない聲で唄ひ出すのであつた。『あゝ、運命、わが運命！』といふ歌が殊に好きだつた。フェーチャはかういふ時には必ず機會を遣さないで、『おい、父つあん、何をそんなにめそ／＼やつてるんだい？』とからかふのである。けれども、ホーリは片手で頬杖をついて、眼を閉ぢたまゝ、自分の運命を訴へ続ける：：：然し、その代はりほかの時には、この男ほどの活動家はいくらゐであつた。いつも何か小まめに動き廻つて、荷車を直したり、塀に突つかひ棒をしたり、馬具を調べてみたりしてゐる。それかと云つて、彼は格別潔癖な方でもなかつた。あるとき私が注意したら、『家だつて人間の住居らしい匂ひがしなけりやなりませんわい。』といふ返事だつた。

『見るがいゝ。』と私は云ひ返した。『カリーヌイチの養蜂場なんか、實に綺麗になつてゐるよ。』「だつて綺麗にして置かなけりや、蜜蜂が居ついてくれませんでな、旦那様。」と彼は溜め息を吐きながら云つた。

『ときに、』あるとき彼は私にかう訊ねた。『旦那には御先祖代々の持ち村がお有りですか？』『あるよ。』『こゝから遠うござえますか？』『百露里ばかりだ。』『それで、旦那様、あなたはその村に暮らしておいでになりますか？』『暮してゐるよ。』『それでも、おもに鐵砲のお慰みで目を暮らしておいでなんでがせう？』『正直なところ、まあさうだな。』『そりや結構でござえますよ、』

旦那様。まあせいふく、えぞやまどりでも撃つて、お楽しみになるがよろしいけれど、でも、百姓頭は成る可くしよつちゆう替へたがよろしうがすよ。」

四日目の晩に、ポルトゥイキン氏が迎ひをよこした。私は、老人と別れるのが名残り惜しかった。私はカリヌイチと一緒に馬車に乗った。「ぢやさよなら、ホーリ、達者で暮らすがい。」と私は云つた。「さよなら、フェーヂャ。」「さよなら、旦那様、御免なされませ。どうぞ私どもをお忘れにならねえで。」馬車が動き出した。丁度、夕焼けがかつと燃え立つたばかりの頃だつた。「明日は上天氣だな。」明るい空を眺めながら、私は云つた。「いんえ、雨が降りますだよ。」とカリヌイチが云ひ返した。「ほれ、あすこで家鴨どもがばちやく／＼水を浴びてるし、それに草がどぎつく匂ひますだから。」馬車は藪の中へ乗り入つた。カリヌイチは馭者臺の上で躍り上がるやうに揺られながら、小聲に何か唄ひ出した。そして、夕焼け空を一心不亂に見つめてゐるのであつた。翌日、私はポルトゥイキン氏の手厚い歡待の家を辭した。

エルモライと粉屋の女房

夕方、わたしは獵師のエルモライをつれて「渡り」に出かけた。しかし、讀者の中には「渡り」といふのが何をさすのか、ご存じない方もあるかも知れない。一つ聞いて頂くとしよう。

春、日の入る十五分許りに、獵銃をかついで犬を連れずに、林の中へ分け入つて行くとする。どこか林の縁に恰好な場所を見つけて、あたりの様子を見まはし、ピストンを検め、仲間と目くばせする。さうしてゐる間に十五分くらゐ経つと、太陽は西に没してしまふ。けれど、林の中はまだ明るく、空氣は清らかに澄み切つてゐる。小鳥どもは、さもお喋りらしく囀り交はし、若草は樂しげなエメラルド色の輝きを放つ。その間ちつと待つてゐるのだ。林の中は次第に暗くなつて行く。夕焼けの赤々とした光りは、木々の根や幹をおもむろに亘つて、じり／＼と高く登つて行き、まだ殆んど眞裸かな下枝から、ちつと息を潜めて睡りに入りかかつてゐる梢に移つて行く。やがて、一ばん高い梢も黝ずんで、赤かつた空も蒼みがかつて来る。林の匂ひがいよいよ強くなつて、生暖かい濕り氣が微かに肌に感じられる。外から吹き込んで來た風も、身のまはりで鳴りをひそめる。小鳥どもも眠りにつくが——みんな一時ではなくて——それ／＼の種類によつて順が違ふ。まづ花鶏が鳴りを靜めると、やくあつて紅鳥、つゞいて鶺鴒といふ順である。林の中は刻一刻と暗さを増して行く。木立ちは大きな黒い塊に溶け合つて、蒼い空には早い星がおづ／＼と光り始める。小鳥どもはすつかり寝しづまつた。たゞ紅襟鳥や小さな啄木鳥だけが、

まだ睡さうな叫び聲を立ててゐる……やがて、それさへ聲を収めてしまふ。と、もう一度頭の上で田げりの聲が高らかに響き渡つたかと思ふと、どこかで高麗鶯がもの悲しげな叫びを立てる。夜鶯も初めて囀りを一聲きかせる。獵人の心は期待の念に疼き始める。と、その時ふいに——といふ啼き聲と、しゆうと唸るやうな響きがしたと思ふと、はしつこさうな翼を規則正しく、搏つ音が聞こえて来る——やがて一羽の山鶉が、長い嘴を優美な恰好に傾けながら、暗い白樺の蔭から、眞つすぐに銃口へ向けて、ふはり飛び出して来る。

つまりこれを「渡り場」で待つ」といふのである。

そこで、私はエルモライと二人で「渡り」を狙ひに出かけた。しかし、諸君、勝手ながら、私はまづエルモライをご紹介しなければならぬ。

一つかういふ男を想像して頂きたい。年の頃は四十五くらゐ、瘦せて背が高く、細長い鼻をして、額は狭く、目は灰いろで、髪は蓬々に亂れ、廣い唇には嘲るやうな表情を浮かべてゐる。この男は冬でも夏でも、獨逸風に仕立てた黄色つばい南京木綿の長上衣を着て歩いてゐたが、帯だけはロシヤ風にちやんと締めてゐるのである。青いだぶ／＼の小ロシヤズボンを穿き、頭には羊皮のついた帽子を被つてゐた。これは身代限りをした地主が機嫌のいゝ時にくれたものなので、帯には袋が二つ縛りつけてあつた——一つは前の方にあつて、火薬を入れるところ、ばら丸を入れるところ、巧く二つに捻ぢ分けられてゐるし、いま一つ後ろの方のは獲物の鳥を入れるやうになつてゐた。綿は、どうやら自分の帽子から、無盡蔵に取り出してゐるらしかつた。そんな事をしないでも、獲物を賣つた金で樂に彈藥囊でも、獲物囊でも買へた筈なのであるが、彼はそ

んな買ひものの事など夢にも考へたことがない。そして、相變はず自己流に鐵砲の装填を續けて、巧みに危険を避けながら、火薬と散彈をこぼしたり混ぜ合はしたりする手際で、見る人を感じ嘆させるのであつた。彼の鐵砲は燧石つきの單身銃で、おまけにこつびどく「はね返す」悪い癖があつた。そのために、エルモライの右の頬は、いつも左の頬より腫れてゐた。どうしてこんな鐵砲で彈丸が當たるのやら、器用な人間でもちよつと考へがつかないほどだつたが、とにかく當たる。彼はそのほかに、ワレットカといふセッター種の獵犬を飼つてゐたが、これが實に驚くべきしろものなのである。エルモライは一度もこの犬に餌をやつたことがない。「犬なんかに喰べものをくれて堪るもんけえ。」といふのが彼の理窟なのであつた。「おまけに、犬は懶巧な生き物だから自分で勝手に食ひものを見つけるのだ。」また本當にその通りで、ワレットカは通りがかりの冷淡な人間でさへびつくりするほど、瘦せひよろけてゐたけれど、それでもちやんと生きてゐた。しかも長生きをしたものである。それどころか、慘憺たる境涯に置かれながらも、かつて一度も姿を晦ましたこともなければ、主人を振り棄てようなどといふ氣配すら見せたことがない。たゞ一度まだ若い時分、戀ひに憂き身をやつして、二日ばかり行くへ知れずになつたことがあるけれど、その馬鹿な了見もやがて消え失せた。ワレットカの最も著しい特色と云へば、この世のあらゆるものに對する不可解な無關心の態度である……もし、これが犬の話でなかつたら、私は「幻滅」といふ言葉をつかつたところである。彼は大抵いつも短い尾を尻の下に巻き込んで、鬚めつ面をしたきり、時々ぶるぶると身慄ひするばかり、につこりともしない（犬が微笑する、しかもなか／＼可愛い笑ひ方をする能を持つてゐるのは、周知の事實である）。度はづれに見つともない顔をしてゐるので、邸奉公をしてゐる下男は誰でも彼でも、暇な時など折さへあれば、この犬

の縹緖を口汚くからかふのがお決まりになつてゐた。かうして、からかはれるばかりか、時には棒で殴られるやうな目にあつても、ワレートカは驚くばかり冷静な態度でそれに耐へて行つた。犬のみには限らない弱味のために、暖いうまさうな匂ひに誘はれて、さもひもじさうな鼻づらを半ば開いた臺所の戸口へ突つ込みでもしようものなら、それこそ料理人どもに格別な慰みを提供するわけで、彼らは一齊に仕事の手を放し、どつとばかり罵りわめきながら、犬を追つかけ廻すのである。獵に出たときは根氣のいゝのが特色で、感じも相當鋭敏であつた。けれどその代はり、もし何かの拍子で手傷を負つた兎にでも追ひつかうものなら、大満悦で骨も残さず綺麗に食ひつくしてしまふ。それも、人に分からうと分かるまいとお構ひなしに、ありつたけの怪しげな方言で悪態をついてゐるエルモライを、いゝ加減の距離に敬遠して置いて、どこか青々とした濯木の涼しい小蔭でゆつくり平らげるのである。

エルモライは私の隣人の一人で、昔風の地主に抱へられてゐた。昔氣質の地主は「山禽類」を嗜まず、家禽一點ばりなのである。たゞ非常の場合、例へば誕生日だとか、命名日だとか、選挙日だとかいふ時には、昔氣質の地主にしつけられてゐる料理人たちも、長嘴ものの料理に取りかかるのだが、自分の仕事がよく分らない時に、ロシヤ人が陥り易い興奮に驅られて、とてつもない味のつけ方を工夫する。そこで、客人たちは大抵もの珍らしさうに、出された料理を丹念にじろく見まはすけれど、思ひきつて手をつけるものがないのである。エルモライは月に一度だけ、えぞやまどりに鷓鴣を二羽づつ、お邸の臺所へ納めるやうに云ひつけられてゐたが、それでも自分の好きなどころで、勝手なことをして暮らすお許しを得てゐるのであつた。彼は何の役にも立たない人間——私たちのオリョールの方言に従へば、「しがねえやつ」として、人から相手に

されなくなつてゐた。火薬も散弾もむろん給與されなかつた。それは彼が自分の飼ひ犬に餌をやらなかつたのと、同じでんなのである。エルモライはまことに奇妙なたちの人間であつた。空とぶ鳥のやうに暢氣で、かなり口數が多く、見たところはぼんやりして、無器用らしいのである、非常な酒ずきで、一とところにながく尻を落ちつけてゐることが出来ない。歩くときには足を小刻みにちよこ／＼やつて體を左右にゆら／＼と揺するやうな恰好をする——それでゐて、ちよこちよこゆら／＼やりながら、一晝夜に五十露里^{エルスケ}くらは歩いてのける。この男はじつに思ひ切つて風變はりな冒険をいろ／＼やつて來た。沼地のなかや、木の上や、屋根の上や、橋の下で夜を明かしたこともあれば、屋根裏や、穴倉や、物置小屋へ閉ち籠められたことも一度や二度でなく、鐵砲や犬や、どうしてもなくてはならぬ着物までなくしたこともあり、こつびどく長い間ふたれたこともある——けれど暫らくすると、ちやんと着物もつけ、鐵砲も持ち、犬もつれて、家へ歸つて來るのであつた。大抵いつもかなりいゝご機嫌ではゐたけれど、陽氣な人間といふわけには行かない。むしろ全體に變はりものといつたやうな感じである。エルモライはいゝ話し相手があれば、ひと喋りするのが好きな方で、殊に一ぱいやつてゐる時だと、尙更なのであつた。けれど、それも永いことではなく、すぐに立ち上がつて、どこかへ出かけて行きさうにする。「おい、この野郎、どこへ行くんだい？ 外はもうすつかり夜の闇ぢやないか。」『チャープリノへさ。』『何だつてチャープリノなんかへ出かけて行くんだ、十露里もある道をよ？』『あそこにあるソフロンで百姓のところで泊まらうと思つてな。』『なに、こゝで泊まつたらいゝぢやないか。』『うんにや、そりやいけねえ。』かう云つて、エルモライは例のワレートカをつれて、眞暗な夜道をものともせず、藪をくゞり、水溜まりを涉りながら歩いて行く。そのくせ、百姓のソフロンは内へ入れてくれも

しないかも知れない。それどころか、運が悪かつたら、『まともに暮らして人間に迷惑をかけるでねえ。』と云ふので、うんとどやしつける位が落ちかも知れないのである。その代はり、春の出水の時に魚を釣つたり、手探りで蝦を捕へたり、勘で山の禽を捜し出したり、鶉をおびき寄せたり、『木精の笛』とか『郭公の飛び移り』(愛鷺家にとつてこれらの名稱は親しみのあるものでつま)とかいふ啼き聲の鶯を手に入れたりする業にかけては、誰もエルモライに肩を並らべるものがなかつた。たゞ一つ出来ないのは、犬を仕込むことであつた。辛抱が足りないのである。彼には女房もあつた。週に一度くらゐは會ひに行つてゐた。女房は半分くづれかゝつたやぐざ小屋を住まひとして、どうやらからやらその日暮らしをしてゐた。明日が日満足に腹を膨らす事が出来るかどうか、前の日に分かつてゐたやうなことは嘗てない。およそ辛い悲しい運命を擔つてゐるのであつた。暢氣で人のいゝこのエルモライが、女房には亂暴な慘たらしい當たり方をして、自分の家では怖い氣むづかしい顔をしてゐた。——で、可哀さうな女房は、どうして亭主の機嫌を取つたらいいか分からぬで、ちよつと睨まれてもおろ／＼しながら、なけなしの金で酒を買つて來たり、亭主が大威張りで煖爐の上にふんぞり返つて、昔噺の豪傑のやうな野郎をかいて寢入つてしまふと、まるで奴隷のやうに、自分の毛皮外套をかけてやつたりするのであつた。私自身も一再ならず、この男の氣むづかしい兇暴性がふと我しらず現はれるのに氣づく事がある。例へば、この男が手を負つた鳥の喉を、齒で食ひ切る時などの表情が好きでなかつた。けれど、エルモライは決して一日以上上が家に足を止めようとしなかつた。そして、よその村へ行つては、また「椀帽子」になり濟ますのであつた。これは百露里四方に通つてゐる綽名でもあるし、彼自身もときどき自分のことをさう云つてゐた。どんな下つ端の下男でも、この浮浪漢に對しては優越を感じて

ゐた——ことによつたら、つまりそのため、みんなが彼に隔てのない態度を見せるのかも知れない。百姓たちも初めのうちは面白がつて、まるで野の中で兎でも追ふやうに、彼を追ひ廻しては、ふんづかまへてゐたけれど、後では勝手にしろと放してやるのであつた。そして、この男が鱧はり者だといふことを知ると、もう構はずに打ちやつておくばかりか、時にはパンをやつたり、世間話を始めたりするほどであつた。……つまり、この男を私は自分の獵師に雇つて、これと一緒にイスタ川の端にある大きな白樺の林へ、渡り鳥うちに出かけたのである。

ロシアの川の多くは、丁度あのヴォルガと同じ様に、一方の岸は山の感で、いま一方は草地になつてゐる。イスタ川もそれと同様であつた。この小さな川は、恐ろしく氣紛れな腕り方をし、蛇のやうに這ひ廻り、たゞの半露里もまつすぐに流れない。で、場所によると、急な丘の頂きから十露里ばかりも流れの見渡せるところがあつて、兩岸の堤や池や、水車場や、楊の林に圍まれた菜園や、厚く繁つた果樹園などが指摘される。魚はイスタ川にはふんだんにゐて、とり分けもろこが多い(百姓たちは日盛りを狙つて、藪蔭に潜んでゐるところを手摺みにする)。小さな川しぎがちいちいと鳴きながら、冷たい透明な清水が方々に湧き出してゐる岩だらけの岸に沿うて飛びかはしてゐる。野鴨は池のまん中にひよつこり浮き上がつて、用心深くあたりを見廻し、蒼鷺は崖の下になつた入り江の蔭に、ぼつねんと立つてゐる……わたし達は一時間ばかり渡り場に立つて、山しぎを四羽うちとめた後、まだ日の出前にもう一度運だめしをしようと思つて(渡り鳥うちには朝でも出かけられるので)、最寄りの水車場で夜を明かすことにした。私たちは森を出て、丘をくだつた。川は紺碧の波を立てて走つてゐた。空氣は夜露の濕り氣を帯びて、しつとりと濃くなつて行く。私たちは門の戸を叩いた。犬どもが庭で一齊に吠え出した。『誰だね、

そこにあるのは？」といふしやがれた寢ぼけ聲が聞こえた。「獵をする者なんだよ。泊めて貰ひたいんだが、通してくれないか。」返事がなかつた。「金は拂ふよ。」「なら、行つて親方にさう云ひますべえ……しいつ、こん畜生めが……くたばつちまへ！」雇ひ男が家へ入つて行く物音が聞こえた。やがて間もなく門の傍へひつ返して云つた。「だめだあ、親方が通しちやなんねえて云ふだ。」『なぜいけないんだい？』「なに、心配だつて云ふだよ。お前さんたち狩人だもんで、ひよつと水車場を焼きやしねえかつてね。だつて、お前さんたち火薬や弾丸もつてゐなざるだべ。」『なんて馬鹿なことを！』『うちぢやそんでなくても、一昨年水車場を焼かれただかん。牛買ひが泊まつてつてね、そんで、何かの拍子に火い出しちまつただよ。』『そんなことを云つたつて、お前、おれたち外で寝るわけにゆかないぢやないか！』『そりやおらの知つたこんでねえ……』と云ひ棄てて、長靴の音をこつ／＼立てながら、向かうへ行つてしまつた。

エルモライは、腹さん／＼悪態をついたが、結局、溜め息をつきながら、「村まで行きますべえ。」と云つた。けれど、村まではかれこれ二露里もあつた……『こゝで泊まることにしよう。』と私は云つた。「今夜は外でも暖いから、金を拂つたら粉屋も敷いて寝る藁くらゐ寄越すだらうよ。」エルモライは「二も二もなく同意した。——わたし達は又もや戸を敲き始めた。一體お前さんがた何で用だね？」といふ雇ひ男の聲が聞こえた。「いけねえつたらいけねえだよ。」わたし達はこちらの望みを、よく納得のゆくやうに話してやつた。男は主人のところへ相談に行つたが、やがて二人づれで引つ返して來た。木戸がぎいと軋んで、粉屋が姿を現はした。背の高い、脂ぎつた顔をした男で、頸筋は牡牛のやうに逞ましく、大きな腹はまる／＼としてゐる。彼は私の申し出を承知してくれた。水車場から百歩ほど離れたところに、四方あけつ放しになつた差し掛け小屋があつた。そこへ私たちのために、藁藁や乾草が運ばれた。雇ひ男は川のほとりの草の上にサモワールを据ゑて、その前に蹲みながら、せつせと煙突を吹きはじめ……炭火がかつかと熾つて來て、その若々しい顔を照らし出す。粉屋は女房を起こしに駈け出した。そして、たうとう自分の方からわたしに家の中で寝るやうにと云ひ出した。けれど、私はこのまゝ外である方が結局いゝ氣持ちだつた。粉屋の女房が牛乳と、卵と、馬鈴薯と、パンを持つて來てくれた。間もなくサモワールが沸いたので、わたし達は茶を飲みにかゝつた。川のおもてから水蒸氣が立ち昇つて來た。風はなかつた。あたりではくひなが啼きしきる。水車の邊で弱々しい物音が聞こえて來た。それは水だめから雫がこぼれるのと、堤の水門から水が洩れる音なのである。私たちは少しばかり火をおこした。エルモライが熱灰の中で馬鈴薯を焼いてゐる間に、私はついで／＼として來た……しめやかな控へめの囁き聲に、私はふと目を醒ました。頭をもち上げて見ると、火の前に桶を逆さにして、その上に粉屋の女房が腰をかけ、私の獵師と話をしてゐるのであつた。私はずつと前から、この女の着ものや、身のこなしや、話しぶりなどで、これは百姓女でもなければ町人の生まれでもなく、お邸に奉公してゐた女だなと察した。けれど、今はじめてその顔かたちを、しげしげと見さだめたのである。年の頃は、見たところ、三十前後らしかつた。瘦せた蒼白い顔は水際だつて美しかつた昔の倂を残してゐる。わけても、大きな愁ひを含んだ目が私の心を惹いた。彼女は兩肘を膝に突いて、顔を掌の上に載せてゐた。エルモライは私に背中を向けて、木つばを火にくべ添へてゐた。

「ジェルトゥーヒナではまた獸疫はやりやまのが始まつてね。」と粉屋の女房は云つた。「教父のイワンさまのところでは、牝牛が二匹ともやられてしまつたのよ……大變なことだねえ！」

「ぢや、お前さんとこの豚はどうだね？」エルモライは暫らく無言の後に、かう訊ねた。

「みんな無事だよ。」

「せめて仔豚一匹くれえ、おらにくれたつてよかりさうなもんだに。」

粉屋の女房は暫らく黙つてゐたが、やがてほつと溜め息をついた。

「お前さん誰と一緒に来たの？」
と彼女は訊いた。

「旦那だよ——コストマーロフの。」

エルモライは樅の枝を幾本か火にくべた。すると、枝は忽ち一齊にぱち／＼と音を立てて、濃い白い煙をまともに彼の顔へ吹きつけた。

「何だつておめえの亭主はおら達を家の中へ入れてくれなかつたんだい？」

「心配なのよ。」

「へん、あのどん腹野郎め……おい、アリーナ・チモフェーヴナ、いゝ子だから、おらに酒を一杯もつて来てくんねえかよ！」

粉屋の女房は立ち上つたと思ふと、闇の中に姿を消した。エルモライは小聲に鼻聲をうたひ出した。

可愛いをなごに通ひつめ

靴といふ靴がすり切れた。

アリーナは小さなフラスコとコップを持って、引返して来た。エルモライは身を起こし、十字を切つて、ぐつと一息に飲み干した。『どうも堪えられねえ？』と彼は云ひ添へた。

粉屋の女房はまた桶に腰をおろした。

「ときに、どうだね、アリーナ・チモフェーヴナ、やつぱり按配が悪いのかね？」

「悪いんだよ。」

「どんな風に悪いんだね？」

「毎晩せきがひどくつてさ。」

「旦那はどうやらお寝みになつたやうだ。」暫らく黙つてゐたが、やがてエルモライが口を切つた。

「よう、アリーナ、おめえ医者なんかにかゝるでねえだよ。却つて悪くなるばかりだから。」

「だから、かゝつてやしないぢやないか。」

「でも、おらんとこへは遊びに来てくんろよ。」

アリーナはさし俯向いた。

「さうしたら、おら嬢のやつなんか叩き出してしまふだ。」とエルモライは言葉を續けた。「ほんのこつたよ。」

「エルモライ・ペトロギッチ、お前さん旦那を起こした方がいゝわ。ど躰よ、馬鈴薯がからからに焼けてしまつたぢやないか。」

「勝手にぐらたら寝かしときやえゝだよ。」と私の忠僕は無雑作に云つた。「さんざん駆けずり廻つたもんだから、すつかり寝込んどちまつたのよ。」

私は乾草の上でもぞ／＼身を動かした。エルモライは立ち上がつて、私の傍へ寄つた。「馬鈴薯が出来ました。おあがんなして。」

私は差し掛け屋根の下から出て行つた。粉屋の女房は桶から立ち上がつて、歸つて行かうとした。私は彼女に話しかけた。

「お前さんどこぢや、もう前からこの水車場をやつてるのかね？」

「三位一體トトリの日で、丁度二年めになりました。」

「お前の亭主はこの者だね？」

アリーナは私の問ひがよく聞き取れなかつた。

「お前の亭主はどこから出たんだい？」とエルモライは聲を高めて、もう一度くり返した。

「ベレーフのもんでございます。ベレーフの町人なので。」

「ぢや、お前さんもやはりベレーフのものかね？」

「いゝえ、わたしは邸づとめの者で……お邸に勤めてをりました。」

「どこの？」

「ズエルコフ様の。今では自由を頂いてをりますけれど。」

「ズエルコフといふと？」

「アレクサンドル・シールイチ。」

「ぢや、お前は奥さんの小間使ひをしてやしなかつたかね？」

「まあ、どうしてご存じていらつしやいます？——はい、いたしてをりました。」

私は前にも増した好奇心と同情を抱きながら、アリーナの顔を眺めた。

「おれはお前のご主人を知つてゐるよ。」と私は言葉を續けた。

「ご存じていらつしやいますか？」と彼女は小聲に答へて、顔を伏せた。

なぜ私がこれほどの同情をもつてアリーナを眺めたか、その譯を讀者にお話しなければならぬ。私はペテルブルクに滞在中、ふとした機會でズエルコフ氏と知り合ひになつた。彼はかなり重要な位置を占めて、博識な敏腕家として聞こえてゐた。その細君といふのはぶよ／＼とした、感じ易くて涙つぽい、そのくせ意地の悪い——その邊にざらにあるやうな、厄介千萬な代物であつた。それに一人の息子があつたが、これまた本當のお坊つちやんで、甘やかされた薄のろなのである。當のズエルコフ氏の風采も餘りぱつとしない方で、幅の廣い殆ど眞四角な顔の中から、鼠のやうな目が狡さうに覗いて、鼻の穴まる見えの大きな尖つた鼻が聳えてゐる。短く刈り込んだ胡麻鹽の髪が、皺の深い額の上に針のやうに突つ立つて、薄い唇はのべつびく／＼動き、甘つたるい微笑を浮かべてゐるのであつた。ズエルコフ氏は大抵いつも兩足を踏み開き、肥えた手をポケットの中へ入れて立つてゐた。あるとき私はこの人と一緒に、馬車で郊外へ出かけたことがある。二人はいろいろ話し込んだ。ズエルコフ氏は世故に長けた事務家らしく、私に「眞理の道」を諭してくれたものである。

「差し出がましいやうで失禮ですが、」と彼はしまひに滔々と辯じ立てた。「あなたがた若い人といふものは、すべて物事を行き當たりばつたり判断したり、議論したりなさる癖があります。あなた方は自分の祖國をよくご存じない。諸君にはロシアといふものが分かつてゐない——さうなんですよ！……あなた方はいつも獨逸の本ばかり讀んでいらつしやるからな。現に早い話が、今もあなたは、あれはあゝだ、これはかうだつて、つまり、その、何ですな、邸勤めをしてゐる百姓

の事などかれこれ仰しやる……なに、よろしい、私は敢へて議論しますまい。それはみんな結構としても、しかしですな、貴方は彼らをご存じない、彼らがどんな人間かといふことをご存じないです。(こゝでズエルコフ氏は大きく鼻をかんで、嗅ぎ煙草をかいだ。) まあ、一例としてちよつとした逸話^{エピソード}を持ち出さして頂きます。恐らく貴方にも興味があるだらうと思ひますでな。(ズエルコフ氏はえへんと咳拂ひをした。) 貴方は私の家内がどんな人間かご存じの筈ですが、あれ以上やさしい女はちよつと類がないくらゐで、それにはご異存ないでせうな。あれについてゐる小間使ひなどの暮らしと云つたら、それこそ天國が目の前に現はれたやうなものですからな……けれど、家内は原則として、亭主のある女を小間使ひに置かないことにしてゐるのです。それは全く困りますからな。子供が次ぎ次ぎと生まれるし、やれ何だ、それかんだと云ふことになるから、どうしたつて奥様のご用をちゃん／＼と足して行つて、細かい癖まで呑み込むなんて、それどころぢやなくなりますよ。そんな事はもう上の空で、まるで念頭にありやしません。そりやもう人情から云つても、自然な話です。そこで、あるとき私たちは自分の持ち村へ、通りすがりに寄つたことがあります、あれは何年前でしたかなあ——出たらめを云つちや申し譯がない——さう、たしか十五年前でしたつけ。ふと見ると、百姓頭のところの實に綺麗な女の子がゐるぢやありませんか。娘なんです。そのものごしにも、何です、恐ろしくしとやかなところがあるんですよ。で、家内が私にさう云ふのです。『ねえ、ココ……』といふのは實のところ、家内が私のことをごんな風に呼んでゐますのでね。『この娘を、ペテルブルグへつれて行きませうよ。わたしすつかり氣に入つちやつたわ、ココ……』で、私も『つれて行かうとも、結構だ。』と云つたわけです。百姓頭はもちろん手をついて拜まないばかりです。こんな仕合はせがやつて來よう

は、思ひも寄らなかつたんでね、さうぢやありませんか……いや、勿論、娘は世間知らずだもんですから、いゝ加減おい／＼泣きましたよ。そりや全く、初めの間は無氣味なもんですからな。何しろ生まれ落ちた家を見ずるつてやつは……誰にしても……何も不思議なことはありませんで。しかし、娘は間もなく私たちに馴ついて來ました。まづ最初女中部屋へ入れて、仕込ませてやりましたよ、勿論。ところで、あなたどうお思ひになります。娘は何でもびつくりするほどよく覺えましたな、家内などはもうすつかり惚れ込んで了つて、特別に目をかけてやるやうになり、遂には外のものをさし置いて、自分のお附きの小間使ひに取り立ててやつたのです……大したものぢやありませんか……それに全くの話が、今まであれだけの小間使ひは家にゐませんでしたよ、絶対にゐませんでしたよ。まめ／＼しくつて、おとなしくつて、素直で——何もかもすつかり條件が備はつてゐる。その代はり、正直なところ、家内もその娘を甘やかしたくありません。りゆうとした身なりをさせて、主人と同じ物を喰べさせて、一緒にお茶を飲ませるといふ有様でしてね……いや、もう殆ど想像のほかでしたよ！ かういふ風にして、その娘は十年許りも家内の手もとで奉公しました。ところが、どうでせう、ある日とつぜんアリーナが——その娘はアリーナといふ名前だつたので——取り次ぎも頼まないで、私の書齋へ入つて來て——いきなり私の足もとへ身を投げ出すぢやありませんか……忌憚なく申しますが、私がかういふことが大嫌ひなのです。人間といふものは、決して自分の品位を忘れちやなりませんからね、さうぢやありませんか？ 『一體なに用だ？』且那さま、アレクサンドル・シールイチ、お慈悲をお願ひに參りました。『なんだ？』お嫁にやつて頂きたいのでございます。私は正直に申しますが、面くらつてしまひましたよ。『ばか、奥さんに代はりの小間使ひがないのは、お前も知つてゐるぢやな

いか！『わたくし今まで通り奥さまに奉公申します。』『ばかな事を云ふな！ ばかな事を！ 奥さんは亭主もちの小間使ひなんかお置きになりやせんよ。』『マラーニヤなら、わたくしの代はりが勤まりますけど。』『指し圖がましいことはやめて貰はう！』『なんともおこころのまゝでございませうが……』私は正直なところ、ぼうつとなつてしまひましたよ。烏辭がましいやうですが、私はかういふ人間ですから、忘恩といふやつほど腹の立つことはありません。敢へて申しますが、これほど心から腹の立つことはありませんよ……今更らしく申し上げる迄もなく、私の家内がどんな人間かといふことは、あなたもよくご承知です。あれは現し身の天使、言葉につくせぬ善良の權化でしてね……どんな悪人だつて、あれには手を下すことが出来まいと思はれるほどですか。私はアリーナを追ひ返しました。いづれその中に目が醒めるだらうと思ひましてな。何にしても、人間が忘恩などといふ悪徳を持つてゐることを、信じたくなかつたわけなのです。ところが、まあどうでせう？ 半年ばかりたつと、またぞろ私のところへやつて来て、同じことを頼むちやありませんか。そのとき私は、正直、むつとして追つ拂つたばかりか、奥さんに云ひつけてやるぞと、脅かしてやつたくらゐです。私は憤慨させられたほどなんです……けれど、どうでせう、又びつくりするやうな事が起こつたんです。暫らくたつてから、家内が私の部屋へ入つて来ました。見ると、目に涙を浮かべて、おそろしくわく／＼してゐるので、私は思はずぎよつとしました。『何ことが持ち上がったんだね？』『アリーナが……』あなたお分かりでせう……私はかういふ言葉を口にすることを恥ぢとします。『そんな事があつてよいものか……！ 相手は誰だ？』『下男のペトルーシカです。』私はたうとう肝臓玉を破裂さしてしまつた。私はかういふ人間ですから……中途半端なことが大嫌ひでしてね……ペトルーシカ……は別に悪くない。罰を食はし

てやつていゝがしかし私の見込みでは、あいつが悪いのぢやないらしい。つまり、アリーナが……いや、どうも、いやはや、かうなつてから今さら何を云ふことがありませう？ 私は無論、即座にアリーナの髪の毛を切らせ、棒編の粗末な麻の着物をきせて、田舎へ送り返してしまひました。家内は大切な小間使ひをなくした譯ですが、どうも致し方がない。何しろ、家の中の不しだらを差し置くわけに行きませんからな。腐つた指は一思ひに切つて棄てた方がいゝのです……さて、こゝで一つ判断を願ひたいもので……え、貴方は私の家内をご存じなんです、實際あれは、あれは……全くもつて天使ですよ……だつて、あれはアリーナに愛着さへ持つてゐたのです……ところが、アリーナはそれを承知し乍ら、恥ぢを知らぬ振舞ひをしたんですからな……え？ 本當にどうです、ご意見は……え？ だが、これなんかもう、とやかく云ふがものはありません！ いづれにしてもほかに仕様がなかつたんです。私一箇に關しては、私はながい聞、その娘の忘恩の行爲に、悲しみもすれば腹も立てましたよ。何と云つても……あゝいふ連中に心持とか、感じとかいふものを求めるのは間違つてゐます！ 狼はどんなに大切に育ててやつても、やつぱり森の方ばかり眺めてゐるものですよ……將來のいゝ教訓です！ しかし、私はたゞほんの例證としてあなたに……』

こゝでズエルコフ氏は言葉を云ひさしにして、頭をめぐらしてしまつた。そして、我ともなしに興奮する心を男々しくも抑へながら、尙もびつたりとマントにくるまつた。

讀者も今こそは、わたしが同情の目をもつてアリーナを眺めたわけを、恐らく分かつて下すつたことと思ふ。

「お前はもうだいたい前から粉屋と一緒になつてゐるのかね？」

「二年になります。」

「それにしても、一たい旦那はお許しを出してくれたのかい？」

「お金で身抜きをしてくれましたので。」

「誰が？」

「サゼーリイ・アレクセイイチが。」

「それは何者だね？」

「わたくしのつれあひでございます。(エルモライは獨りでにやりと笑つた。)では、旦那さまがわたくしのことを、あなたにお話しになりましたのでせうか？」やゝ暫らく黙つてゐた後に、アリナはかう云ひ足した。

私はこの問ひに何と答へていゝか分からなかつた。「アリーナ！」と遠くの方で粉屋の呼ぶ聲が聞こえた。彼女は立ち上がつて、行つてしまつた。

「あれの亭主といふのはいゝ人間かい？」と私はエルモライに訊ねた。

「別にどうといふこともねえですよ。」

「二人の間に子供はあるかね！」

「一人ありましたがおつ死んでしまひました。」

「何かね、あの女が粉屋の氣に入つた、とでもいふのかね？ 身の代金は、大分出したのだらうか？」

「知りません。あの女は讀み書きが出来るので、この商賣をしてると、そりや……なんですかあ……都合のいゝことがありますからね。だから、氣に入つたに違えねえでさ。」

「ときに、お前はあの女と以前から知り合ひだつたのかい？」

「さうなんです。もとあれが奉公してゐた時分に、そのお邸へよく出入りしたものでね。お邸といふのは、こゝから餘り遠くねえでがす。」

「ペトルーシカといふ下男も知つてゐるかい？」

「ピョートル・ワシーリッチですかね？ そりやもう知つて居りますとも。」

「いまだどこにゐるんだね？」

「兵隊にやられましたよ。」

「私たちは暫らく口を噤んでゐた。」

「どうもあの女は身體がよくないらしいね？」たうとう私はエルモライにかう訊ねた。

「身體のいゝ譯がねえでさ！……ところで、明日はどうやら、いゝ獵がありさうでござえますね。旦那もそろゝお寝みになつたら？」

野鴨の一群れが口笛のやうな鳴き聲を立てながら、私達の頭の上を飛び過ぎたが、やがて程遠からぬ河へ下りる氣配が、私達の耳に入つた。もうすつかり暗くなつて、底冷えがする様になつて來た。森の中では鶯が朗かに囀つてゐる。私達は乾草の中にもぐり込んで、そのまゝ眠りに落ちた。

マリーナの泉

八月の初めには、よく堪らない暑さが続く。その頃は十二時から三時頃までといふもの、どんなに勇敢で熱心な人でも、獵などする元氣がなくなるし、どんなに忠實な犬でも、『銃獵家の拍車の掃除を』始める。といふのは、惱まし氣に眼を細め、仰山らしく舌を吐き出し乍ら、のろ／＼と御主人の後をついて廻るのである。主人に叱られても、その應へには意氣地なく尾を振つて、顔には當惑らしい表情を浮かべる許りで、一向に前へ出ようとしない。私は何かの拍子で、丁度こんな日に獵に出たことがある。私はほんのちよつとでも、どこか物蔭に身を横たへたいといふ誘惑を、長いあひだ追ひ退け追ひ退けしてゐた。疲れるといふことを知らない私の犬は、何時までも繁みの間を駆けずり廻つてゐたが、自分でもこの熱に浮かされたやうな大活躍が、結局大した効果もなしに終るといふことを、承知してゐるやうな風つきだつた。けれど、息もつまりさうなむし暑さに、私もたうとう最後の氣力と技能を貯へておかねばならぬ、といふことを考へさせられてしまつた。寛大に私のものを愛讀して下さる方々には、もう近附きになつてゐるイスタの小川まで、私はやつとのことで辿りついた。切り岸を下りて、黄色い濕つた砂地を踏みながら、この界隅で一般に『マリーナの泉』といふ名で知られてゐる清水の方へ向かつて行つた。この清水は川岸の割れ目から湧き出して、それから段々と、小さいけれど深い谷へ流れて行き、そこから二十歩許り隔てた所で、樂しげなお喋りめく音を立てながら川へ落ち込んでゐるのであつた。谷を挟んでゐる兩側の傾斜には若い榊の林が繁つて、泉のほとりには短い天鷲絨のやうな若草が

青々してゐた。太陽の光線は殆ど朝から晩まで冷たい銀色の水にさし込むことがない。私は泉のほとりまで辿りついた。草の上には通りがかりの百姓がみんなのために残しておいた木の皮造りの柄杓が置いてある。私は腹いづばい水を飲んで木蔭に身を横たへ、四邊を見廻した。泉の水が流れ落ちて、自然に出来上がった入江は、絶えず一面に小波を立ててゐたが、そこに二人の老人が、私に背を向けて坐つてゐた。一人は可成り肉付きがよく、背の高い男で、小ざつぱりした暗緑色の長上衣を着こみ、目庇つきの柔かい帽子を被つて、釣りを垂れてゐた。いま一人は瘦せた小柄な男で、つぎの當つたブラ織の上着を纏ひ、帽子も被らずに、み／＼の入つた壺を膝に抱へたまゝ、ときどき胡麻鹽頭を撫でてゐる様子は、日光を遮らうとでもしてゐるやうな具合であつた。私はこの男をつく／＼と眺めてゐる中に、シュミーヒノ村のストロップシカだと氣が附いた。こゝで讀者の許しを得て、この人物を紹介させて貰ふことにする。

私の持村から三四露里離れたところに、シュミーヒノといふ大きな村がある。そこにはコジマ、ダミアン兩聖者のために建てられた、石造りの教會が聳えてゐる。この教會の眞向かひにはかつて宏壯な地主邸が輪奐の美を誇つてゐた。邸の周りには様々な建増しの棟や、下女下男の住居や、仕事場や、厩や、植木の霜除け庇や、馬車小屋や、湯殿や、臨時の炊事場や、來客と支配人たちの用に當てられた離れや、花卉栽培用の温室や、下々のために設けられた鞆籠や、その他多少とも要り用な建物が取り巻いてゐた。この邸には、金持ちの地主が住んでゐて、萬事きまつた仕來り通りに暮らしてゐたが——或る時、一朝にして火事に見舞はれ、これだけの大身上もすつかり灰になつて了つた。地主一家は他の所に巢を求めて、屋敷は荒廢してしまつた。廣い焼け跡は菜園となつて、ところ／＼に元の土臺の煉瓦が山のやうに積み上げられてゐた。焼け残りの

丸太を利用して粗末な小屋を組み、十年ばかり前にゴシック風の涼亭を建てるために買ひ込んであつた膠板で屋根を葺いた。そして、そこには庭師のミトロファンと女房のアクシーニヤ、それに七人の子供が住はされることになつた。ミトロファンは、百五十露里も離れた主人のところへ、食糧の野菜類を届ける役を云ひつかつた。アクシーニヤはチロール種の牧牛の世話を命ぜられたが、この牝牛はモスクワで大金を出して買はれたのだけれど、残念ながらまるで生産能力がなかつたので、手に入れて以來一滴の乳も出さなかつた。同じくこのアクシーニヤは、たつた一羽だけ生き残つた『お邸の鳥』となつてゐる、ときかのある灰色の家鴨の世話も任せられた。子供らはまだ年端が行かぬといふので、何も決まつた仕事を當てがはれなかつた。そのために子供らはすつかり怠け者になり濟ました。私もこの庭師のところへ二度ばかり泊まつたこともあるし、通りすがりに胡瓜を買つたこともあるが、これはどういふわけか、夏でさへも無暗に大きく、いやな水っぽい味がして、皮が黄色くて厚ぼつたのが特色であつた。この男のところへ、私は初めてスチョーブシカに逢つたのである。ミトロファンの一家と、目つかちの兵隊の女房のお情けでちつぽけな部屋において貰つてゐる、年寄りで聾のゲラーシムといふ教會の世話役を除けると、シュミーヒノには一人もお邸勤めの者が残つてゐなかつた。といふのは、私が讀者に紹介しようと思つてゐるスチョーブシカは、およそ人間扱ひにすることも出来なかつたし、邸勤めの男と見做すことなどは、尙更もつての外の話だつたからである。

すべて人間といふものは、たとへどんなものでも社會上の位置を持ち、多少の縁戚とか知人とかを持つてゐるものである。どんな人間でも邸に勤めてゐる者なら、よしんば給金を貰はないまでも少くとも所謂「扶持米」くらゐは頂戴する筈である。ところが、スチョーブシカはまるつき

りなんの補助も受けないし、誰ひとり縁邊に當たる者もなく、彼といふ人間の存在さへ知つてゐる者がなかつた。この男には過去といふものすらなかつた。彼のことは誰の噂にも上らないし、戸籍にも入つてゐるかどうか覺束ない程である、かつてどこかの従僕を勤めてゐたとかいふ曖昧な噂はあつたけれど、彼が何者で、何處から來たのか、誰の忤か、どうしてシュミーヒノの農奴になつたのか、どういふ譯でいつの昔からか始終着てゐるブラハ織の長上衣カッタを手に入れたのか、どこで暮らしてゐるのか、何で口すぎしてゐるのか——これ等の事については、誰もてんで見當がつかなかつたし、また正直な話、誰もそんな問題に興味を持つ者がなかつた。ありとあらゆる下女下男の系圖を、四代まで溯つて知り抜いてゐるトロフイムイ爺さんチヂでさへ、たつた一度だけこんな話をしたばかりである。それによると、なんでもスチェパンは、亡くなつた先代の領主で旅團長を勤めてゐたアレクセイ・ロマヌイチが、戦争から凱旋のとき、荷物車に乗せて連れて歸つた或る土耳其古女の親類に當たるとのことであつた。よく祭りの日など、露西亞の舊い習慣で、村中の百姓にもものを恵んだり、蕎麥饅頭や緑酒を御馳走する日——かういふ日にさへもスチョーブシカは庭に並べられた食卓や、酒樽の傍へ姿を見せないし、御主人達にお辭儀をしたり、その手に近づいて接吻するやうなこともなく、御主人の見てゐる前で、番頭の脂切つた手カをなみ／＼と注がれた盃を取り、御主人の健康を祝しながら、一息きに飲むといふこともなかつた。たゞ時たま親切氣のある人間が、通りすがりにこの可哀さうな男を見て、食べさしの饅頭を分けてやるくらゐなものであつた。復活祭の當日には、彼も人から接吻して貰つたけれど、當人は油じみた袖口を折り返して、後ろのかくしから赤く染めた卵を取り出し、息をはずませて眼を

*スチェパンは本名で、スチョーブシカはスチョーバはその愛稱

ばちくりさせながら、若主人夫婦や大奥様に、捧げるやうなこともしなかつた。夏は鳥小屋の後ろにある小さな小屋の中に暮らし、冬は湯殿の脱衣場に寝起きして、凍ての厳しい日には、乾草小屋で夜を明かすのであつた。人々は彼を見馴れて、時には足蹴にすることさへもあつたけれど、誰ひとり彼に言葉をかけるものはなかつた。また彼自身も生まれ落ちてからこの方、一度も口を開いたことがないかと思はれるほどであつた。例の火事の後で、この風來者は庭師のミトロファンミトロファンの所へ身を寄せた。つまり、オリョール縣の言葉で云へば、『垂れこんだ』のである。庭師は一切構はないでおいた。俺の所で暮らすがいゝとも云はないし、また別に追ひ立てようともしなかつた。それにスチョーブシカも、庭師の家に寝起きしてゐたのではない。つまり菜園を棲家として、その邊をうろ／＼してゐたのである。彼は歩くのにも動くのにも、まるで音を立てないし、嚏みや咳をする時には、幾らかおつかかな吃驚で、手で口に蓋をする。何時も蟻のやうにこつそり小まめに働いたり、動き廻つたりしてゐた。それといふのもみんな食ふ爲、たゞ／＼食ふ爲なのであつた。それもその筈、もし朝から晩まで口すぎの心配をしなかつたら、我がスチョーブシカは干乾しになつたに違ひない。どうしたら夕方までに腹を膨らすことが出来るか、それが朝の中に分らないといふのも、まことに情けない話である！ スチョーブシカは垣根の下に坐つて、大根を噛つたり、人參をしやぶつたり、泥だらけなキャベツの玉を刻んだりしてゐるかと思ふと、時には水を入れた桶を、うん／＼唸りながらどこかへ提げて行つてゐる。それかと思へば、素焼きの壺の下に覺束ない火を起こして、懐ろから何か黒いものを取り出して、壺の中へ抛りこんでゐることもある。また時には自分の小屋の中で、木切れで釘をこつ／＼打ちつけながら、パンをのせる棚を作つてゐることもある。すべてかういふことを、まるで人目を盗むやう

に、黙々とやつてゐるので、誰かちよつとも見ようものなら、すぐにかくれてしまふのである。かと思へば、急に二日ばかり姿を晦ますことがあるけれど、彼のゐないことに氣のつく者などは、無論だれもないのである。……ところが、又ふと見ると、何時の間にか姿を現はして、どこか垣根の下あたりに五徳を据ゑて、こつそりと木つばをくべてゐる。彼の顔は小さくて、眼は黄がかつた色合ひを帯び、髪は眉の邊まで被さり、鼻は尖つて、耳は蝙蝠のやうに大きく透きとほつてゐる。鬚鬚はまるで二週間ばかり前に剃り落としたと云つたあんなばいで、それより長くもなければ、短くもならない。このスチョーブシカが、もう一人の老人と一緒に、イスタ川のほとりにゐるところを私は圖らず見付けたのである。

私はその傍によつて挨拶をすると、竝んで腰を下ろした。スチョーブシカの伴れも、やはり私の知り合ひだといふことが分かつた。これはもと、ピョートル・イリツチ*伯爵伯爵の農奴で、いまは自由な身體にしてゐらつてゐるミハイロ・サゼーリエフといふ男で、綽名を霧トウシといふ。この男の寝起きしてゐるところは、私が可成り始終足を止める旅籠屋の亭主で、肺病を患つてゐるボルポフ出の町人の所であつた。オリョール街道を往來する若い役人や、その他の閑人連中は（縞の羽毛布團にぬく／＼と埋まつてゐる商人などは、そんな事に用はないのだが）——今でもトロイツキイの大村から餘り遠からぬ所に、すつかり荒れ果てて、屋根も崩れ落ち、窓といふ窓を釘付けにした大きな木造の二階屋が、街道へのり出すやうに聳えてゐるのを見るであらう。よく晴れた眞晝の太陽の輝かしい光りを浴びた、この廢屋ほど物哀れな姿は、想像することも出来ない程である。かつてこゝには客好きで有名な、前時代の裕福な貴族の、ピョートル・イリツチ伯爵が住まつてゐた。よく縣内の地主たちが残らずこの家へ集まつて、邸で養成した音楽隊の奏

する、耳を聳するばかりの樂の音や、打ち上げ花火や仕掛け花火の音につれて、思ふ存分踊り戯れたものである。で、今この荒れ果てた地主邸の傍を通りかゝりながら、過ぎし昔や、華やかなりし青春時代を追想して、溜め息を漏らす老婆なども、恐らく一人や二人ではないであらう。伯爵はいつまでも饗宴を續けて、卑屈なくらゐ慰懃な客の群がる中を、愛相よく微笑み乍ら、永い間歩き廻つたものである。けれど彼の財産は、不幸にして、一生滄蒼を盡すには足りなかつた。身代を根こそげ棒にふつてしまつて、伯爵は就職を探しにペテルブルグに出かけて行つたが、話が決まるのを待たないで、宿の一室で死んで了つた。霧はこの人の従僕をしてゐる七十ばかりの老人であつた。彼は殆んど絶え間なく微笑を浮かべてゐたが、今ではエカチエリーナ女帝時代の人のみが見せるやうな微笑、つまり優しくて、しかも氣品のある笑ひ方なのである。話をする時には、唇をゆつくり開いたり閉ぢたりして、眼を優しく細め、言葉を少し鼻にかけて發音する。鼻をかんだり煙草を嗅いだりするのも、やはり何か大事なこともするやうに、同じく悠々と急がずにやるのである。

「おい、どうだ、ミハイロ・サゼーリツチ。」と私はきり出した。「魚は大分釣れたかい？」

「まあ、ちよつと魚籠の中を覗いて御覽なせえまし。鱸が二尾と、もろこが五尾ばかり取れましたよ……スチョープシカ、お目にかける。」

スチョープシカは私の方へ魚籠を突きつけた。

「お前どんな具合にやつて行つてゐるね、スチエパン？」と私は訊ねた。

「へ……へ……べつに……別に變はつたこともござえません、旦那、ぼつ／＼やつて居りま

すよ。」まるで幾貫といふ重いものを舌で轉がしてでもゐるやうに、スチエパンは吃り吃り答へた。

「ところで、ミトロファンも達者かね？」

「達者でござえますとも、そ……そりやもう、旦那。」

可哀想な男はそつぽをむいてしまつた。

「だが、どうも食ひつきが悪いぞ。」と霧は云ひ出した。「やけに暑いもんだで、魚の奴みんな藪の根にもぐりこんぢまつて、晝寝してやがるんだからな……みゝずをつけてくれよ、スチョープシカ（スチョープシカはみゝずを一匹取り出して、掌にのせると、二度ばかり叩きつけて、針につけ、ぶつと唾を吹きかけて、霧に渡した。）有難うよ、スチョープ……ところで旦那様、」と彼は私の方に振り向きながら、言葉を續けた。「獵の方は相變はらずやつていらつしやいますか？」

「御覽の通りだ。」

「成る程……ときに、あなたの連れていらつしやる犬はなんでござえますね？ 英吉利種か、それともフリヤンド種とでも云ひますので？」

老人は折さへあれば、自分の知識をひけらかすのが好きであつた。私達もちゃんと人並みの暮らしをして來ましたからね！ とでもいつたやうな氣持ちなので。

「何種か知らないけれど、良い犬だよ。」

「成る程……いつも犬を連れてお歩きになりますかね？」

「二つがひばかり飼つてゐるよ。」

霧はにやりと笑つて、首を振つた。

「そりやさうでござえますよ。犬が好きで堪らないといふ人があるかと思へば、中には只でも厭

だといふ人もありますからな。私なんぞは一向なにも分かりませんが、こんな風に考へてみますよ。犬なんてものは、云つてみりや、お體裁に飼つて置くべきものなんで……何もかもきちんとしてゐるのが本當で、馬もきちんとしてゐなけりやならないし、獵犬係りもきちんとしてゐなけりやならない。何も彼もさういつた按配でございますよ。お致なりなされた伯爵さまは——何とぞ天國に安らはせ給へ！——實のところ、生まれついでにの獵好きではいらつしやいませんでしたが、それでも犬はちやんと飼つてお置きになつて、年に一度は獵にお出かけになつたものでござります。金モールの附いた赤い長上衣を着た獵犬係りが、お庭に集まつて角笛を吹き立てると、御前様がお出ましになる。そこへ馬が引いて來られて、御前様はその背にお乗りになると、勢子のかしらがおみ足を取つて鐙に通し、自分の頭から帽子を取つて、その上に手綱をのせ、恭々しく差し出すのでござります、すると、御前は長い鞭をこんな按配式に、ぱちりとお鳴らしになる。それを合圖に、獵犬係りがわつと聲を上げながら、お屋敷から繰り出して行く。お附きの勢子が伯爵様の後から馬を進めながら、御前様ご寵愛の犬を二匹、絹の綱で引き立てて、こんな風に油断なく眼を配つてゐる……このお附きの勢子といふのが、コザック鞍に高々と跨がつて、頬つぺたを眞赤にしながら、大きな目玉をぎよろ／＼動かしてゐるのでござります……それに、こんな時は、お客だつて、云ふまでもなく大勢集まつて見えますよ、お遊びごとにしる、おもてなしにしる、すべて式の如くに……あつ、切りやがつた、こん畜生め！——彼は不意に釣竿をぐつとしゃくつて、かう云ひ添へた。

「どうだね、伯爵は一時大した暮らしをしてゐられたさうぢやないか？」と私は訊ねた。老人はみ／＼と鼻を吹きかけて、また糸を垂れた。

「そりや、華族の中でもぱり／＼の方でしたからね、當たり前の話でござりますよ。よくペテルブルグあたりから、その、一流の貴族がたが訪ねて見えましたよ。水色の綬をかけて、テーブルに向かつて召し上がつてゐる姿を、始終お見受けしたもので。御前様も何がさて、お客様をもてなすことにかけては、名人でしてな、よく私をお呼び寄せになつて、『霧、わしは明日迄に生きた蝶鮫が要るのだが、届けるやうに云ひ付けてくれ、分かつたか？』と仰しやる。『畏りました、御前様。』と私はお受けするわけで。金糸で繡ひとりした上着だとか、鬘だとか、ステッキだとか、香水だとか、飛び切り上等のオーデコロンだとか、煙草入れだとか、こんなに大きな繪だとかいふものを、巴里からちぎ／＼にお取り寄せになるのでござります。宴會でもお開きになるといふと——いや、もうそれこそどえらい騒ぎでしてな！ 花火をぼん／＼上げるやら、三頭馬車を飛ばすやら、終ひには大砲までぶつ放すのでござりますよ。樂隊だけでも年ぢゆう四十人からの人数が、ちやんと頭敷を揃へてゐる始末、その指圖をする役目に獨逸人を抱へてをられましたか、この獨逸人め、すつかり増長しやがつて、御主人がたと同じテーブルで食事がしたいなどと云ひ出したので、御前様も到頭をと／＼ひ來いと云つて、おん出しておしまひになりました。うちの樂隊連中はあんな奴がゐなくなつたつて自分のする事はちやんと辨へてゐる、とかう仰しやりましたな。何と云つても、地主様の勢ひには叶ひません。そこで、やがて踊りが始まると——それこそが夜が明けるまで踊り抜く。曲は主に蘇蘭曲とかなんとか云ふものでござりましたよ……よう……よう……よう……奴さん掛かりやがつたぞ！（老人は小さな鱸を水の中から引き上げた。）おい、どうだ、スチヨーパ？——さて、御前様は本當に殿様らしいお方でした。老人はまた糸を垂れながら、言葉を續けた。「それにお心も至つてお優しい方でな、どうかして下々の者を殴りつけなさ

るやうなことがあつても、すぐにけろりと忘れておしまひなさる。たゞ一つ困つたことには、側女を多勢お置きになつて居られました。いやはや、その側女どもときたら、お話にも何にもなつたもんぢやない、つまりそいつ等が伯爵家の身代を叩き上げてしまつたのでございますよ。みんな大抵下々の方からお取り立てになつたのだから、それだけでも有難いと思ひさうなものだのに、中々どうして——奴等は歐羅巴中でも一番上等なものを貰はなけりや、承知することぢやない！尤も、一方から見りや、何分上つ方のことだから、御自分の好きな事をしてお暮らしになるのも一向さし支へない話だけれど……それかといつて、身上を潰してしまふつて法はありません。中でも一人アクリーナといふのが居りましたつけ。今ではもう亡くなつてしまひました——神よ、何とぞ天國を與へ給へ——たゞの百姓上がりで、シートフ村の小頭の娘のくせに、手のつけられないやうな性わる女で、よく伯爵様の横面を引つぱたくやうな眞似をしやがるんで！すつかり御前様をまるめこんでしまつたのでございます。私の甥なども、そのあまの新しい着物にチョコレートをこぼしたといつて、頭をくりくり坊主にされた上、兵隊にほいやられてしまひました……しかも、そんな目に遭つたのは私の甥ばかりぢやありません。さやう……けれどなんと云つても、あの頃は結構な時勢でございましたよ！」老人は深い溜息をつきながら、かう云ひ添へると、そのまゝうなだれて、口を噤んだ。

「話の様子では、お前の旦那は喧ましい方だつたらしいね？」暫らく無言の後、私は切り出した。「あの時分はすべてがさういふ風でしたからね、旦那様。」と老人は頭を一振りして云ひ返した。「今ぢやもうそんなことはしなくなつたよ。」相手から眼を放さないで、私はかう注意した。

彼は私をちらと横目に見た。

「そりやもう、當節の方がいゝに決まつてゐますよ。」と彼は呟いて、針を遠くの方へ投げた。私たちは木蔭に坐つてゐたけれど、その木蔭でさへも息苦しかった。熱し切つた重苦しい空氣はまるで死んだもののやうにぢつと澱んでゐるのであつた。顔は火のやうに燃えて、風のそよぎを憧れ求めたけれど、その風がまるでなかつた。太陽は黒ずんで見えるほど、蒼い空から容赦なく照りつけるのであつた。すぐ目の前の向かう岸には、燕麥の畑が黄色くひろがつて、ところどころに苦蓬が頭を覗けてゐたが、燕麥の穂は一つとしてそよとも動かない。少し下手の方には、一匹の百姓馬が膝まで水に浸しながら、川の中にぢつと立つて、濡れた尻尾を大儀さうに振つてゐる。水面に垂れかゝつてゐる藪の下で、時々大きな魚が浮かみ上がつて、ぶく／＼と泡を立てるかと思ふと微かな小波を後に残して、また靜かに底深く沈んで行つた。蟋どもが赤茶けた色をした葉の中で、かまびすしく鳴き立ててゐる。鶉は何だか澁々といつた風な啼聲をたて、禿鷹は野の上をふはふはと舞ひながら、のべつ尾羽を扇のやうに擴げ、翼を慌たゞしく搏つて、一つ所にぢつと靜止する。わたしたちは、暑さにぐつたりしてしまつて、身動きもせず坐つてゐた。不意に後ろの谷で物音がして、誰やら泉の方へおりて來た。私は振り返つて見た。それは年のころ五十ばかりの埃だらけな百姓で、ルバーシカを着て、木の皮鞋を穿き、しなの木皮で編んだ籠と百姓外套を肩に擔いでゐた。泉に近寄ると、貪るやうにがぶ／＼と水を飲み、さて、やをら身を起こした。

「やあ、ヴラスぢやねえか？」と霧は男の顔をつく／＼と見て叫んだ。「ご機嫌よう。一體どこから舞ひ戻つたんだ？」

「ご機嫌よう、ミハイロ・サエーリツチ。」と百姓は、私たちの傍へやつて來ながら、かう云つた。

「遠方からだよ。」

「どこをうろくしてゐたんだ？」と霧は訊ねた。

「モスクワまで行つて來たんだ、旦那のそこへよ。」

「何しに？」

「お願えごとがあつて行つたのよ。」

「なんのお願えだね？」

「年貢を負けて貰ふか、旦那の畑で使つて貰ふか、ほかの土地へやつて貰ふか、何とかして貰ふべえと思つてよ……悴がおつ死んだもんだから——おら一人ぢやもう手に合はねえだ。」

「お前の悴が死んだつてか？」

「おつ死んだよ。今ぢやもう故人だが、百姓は暫らく黙り込んでゐたが、やがてかう言ひ足した。

「モスクワで辻馬車稼業をやつて暮らしてゐたのでな、正直な話が、おらに代はつて年貢を納めてくれたもんだよ。」

「一體、お前はいま年貢の約束になつてるのかい？」

「ところで、旦那の首尾はどうだつた？」

「どうもかうもねえ！ 玄關拂ひだあ。『何だつて、俺のところへ來るなんて、出過ぎた眞似をす

る。そのために支配人ちゆうものがあるぢやないか。まづ一番に支配人に相談すべきだ……それにほかの土地なんて、どこに變はらせる所がある？ 貴様はそれより、まづ未納金ををさめるのが順だ。』つてね、大變なお腹立ちだつたよ。」

「ふん、それでお前は何かね、すこ／＼後戻りかね？」

「後戻りよ。亡くなつた悴が何か金目のものでも残しちやみねえか、問ひ合はせでもしべえと思つたけど、何も取りとめたことが分かんかつたよ。おら悴の親方に、實はフィリップの親父でがす、と云つたのだけど、先方ぢや、『そんなことが本當かどうか分つたもんどぢやねえ。それに、おめえの悴は何一つ残して行きやしなかつた。それどころか、俺に借金があつたくれえだ。』とかういふ返事なんで仕方がねえ、そのまゝ後戻りよ。」

百姓はまるで他人事のやうに、にこ／＼しながら、この話をして聞かせたが、その小さなくしやくやした目には一滴の涙が浮かんで、唇はびく／＼引つ吊つてゐた。

「それで、これからどうする、家へ歸るのかね？」

「でなくつて、どこへ行くところがある？ 知れたことよ、家にけえるのさ、嬬も今ごろは腹へこになつて、吠えづらかいてゐるだべ。」

「それぢやお前は……その……なにしたらいいだらう……」と不意にスチョーピシカが云ひ出したが、妙にてれて口を噤み、餌壺の中を掻き廻し始めた。

「で、支配人のところへ行くかい？」いくらか吃驚したやうにスチョーパを見やりながら、霧は言葉を續けた。

「あんな奴のところへ行つてどうするだ！……それでなくつてせえ、年貢の滞りがあるぢやねえ

か。悴は死ぬ前に一年ばかり思つてゐたもんで、自分の年貢さへ納められなかつたんだからな。：だけんど、俺あもう半分自棄くそだ。逆さに振つたつて鼻血も出やしねえ。：もう、おめえ、どんなに智恵を絞つて、細工して見たつて、俺から何一つ取るこたあ出来やしねえ！（かう云つて百姓はから／＼と笑つた。）あのキンチリヤン・セミヨーヌイチがどんなに頭を捻つてみたつて、もうかうなつちや。：」

ヴラスはまた笑ひ出した。
「そんな事いつたつて——それぢや困るぢやねえか、ヴラス。」と霧が一句一句間を置きながら、かう云つた。

「一體なにが困ると云ふんだ？ な。：に。：（ヴラスの聲は途切れた。）なんてえ暑さだあ。」袖で顔を拭きながら、彼は言葉を續けた。

「お前の旦那は誰だね？」と私は訊ねた。

「**伯爵でござえます。ヴレリアン・ペトロキッチで。」

「ピョートル・イリツチの息子さんだね？」

「ピョートル・イリツチの息子さんで。」と霧は答へた。「亡くなられたピョートル・イリツチは、まだ御存命中に、ヴラスの村を息子さんにお頒けになりましたんで。」

「どうだ、お達者かね？」

「い、按配に、お達者でいらつしやいます。」とヴラスは答へた。「とても血色がよくなつて、顔なんか一皮かぶつたやうでござえます。」

「ときに、旦那様、」私の方に向きながら、霧が言葉を續けた。「モスクワ近在なら好からうと思

ひますが、こゝぢや年貢に苦勞いたしますよ。」

「一戸あたり幾らなんだね？」

「九十五ルーブリで。」とヴラスは呟いた。

「まあ、かういふわけで、土地はまるで猫の額くらゐしかなくつて、せい／＼御邸の森や林があるだけでござえます。」

「それさへも賣つちまつたぢやう話でがすよ。」と百姓が口を入れた。

「まあ、さういつたやうなわけなんで、：：スチヨーバ、餌をくれんか。：：おい、スチヨーバ、なんだ、お前居眠りでもしてゐるのか？」

スチヨーブシカはびくりと身體を慄はした。百姓は私たちの傍に腰を下ろした。みんなはまた暫らく黙り込んでしまつた。向かう岸で誰やら唄を歌ひ出したが、それがひどく元氣のない調子だつた。：：ヴラスは可哀さうに悄氣こんでゐた。：：
三十分ばかり経つて、私たちは別れ別れになつた。

田舎醫者

ある秋のこと、私は遠方の淋しい野原からの歸り途に、風邪を引いて弱り込んだことがある。仕合はせと、發熱したのは郡役所のある町の宿屋だったので、私は醫者を迎へにやつた。三十分ばかりして、郡役所附きの醫者がやつて來た。背の高くない、瘦せた、髪の毛の黒い男である。ありふれた發汗劑を處方して、芥子泥を貼るやうに命じ、禮の五ルーブリ札をいとも手際よく袖口の折返しへ突っ込んだ——尤も、その時えへんと空咳をして、そつばを見たものである。——そして、そのまゝ歸り支度をしたのであるが、どうした事かつい話し込んで、腰を据ゑてしまつた。私は熱に惱まされて、夜つびて眠れないものと覺悟してゐたので、いゝ話し相手と一喋りするのには、却つてもつけの幸ひだったのである。茶が出た。醫者はそれからそれへと話が盡きなかつた。なか／＼氣の利いた男で、話し振りもはき／＼して、可成り面白かつた。世の中には妙なことがあるもので、ある人とは長く一緒に暮らして、友達づきあひをしてゐながら、唯の一度も眞底から打ち明けた話が出来ないくせに、相手によると知り合ひになるかならないかに、もういきなり、此方からでなければ先方から、まるで教會で懺悔でもするやうに、腹の底の底まで喋つてしまふことがある。私はどうしてこの新しい友人の信頼を得たのか分らないが——とにかく彼は何といふことなしに、所謂「藪から棒に」可成り珍らしい出來事を聞かせてくれたのである。そこで私はこれからの男の話を、寛大な讀者諸君に御披露しようと思ふ。私は成る可く醫者自身の言葉で話すことにしよう。

「あなたは御存じないでせうね。」と彼はぐつたりしたやうな顫へ聲で（これは混りけのないベルゾフ煙草の利き目なのである。）云ひ出した。「あなたはこゝの判事のムイロフさんを御存じないでせうね。パーエル・ルキツチを……御存じない……まあ、そんなことはどうでもよろしいので。（彼は一つ咳拂ひをして、目を擦つた。）さて、實のところ、そのお話といふのは、左様、なんと申したらよろしいか——出鱈目にならないやうに、判然り云ひますと、大齋期の間のことで、雪解けの最中でした。私はその判事のところへ遊びに行つて、歌留多の勝負を戦はして居りました。この町の判事はいゝ人で、歌留多をやるのが大好きなんです。すると、俄然（この醫者は盛んに『俄然』といふ言葉を使つた。）下男が、私に用のある人が來たといふぢやありませんか。一體なんの用かと聞きますと、手紙を持つて來てゐるから、きつと病家からでせうといふ返事で。さう、その手紙を寄越して下さい、と云つて、見ると案の定、病家からでした……いや、結構——これは御承知の通り、我々にとつて飯の種なんですからね……さて、要件といふのはからなんです。その手紙を寄越したのは、さる地主の未亡人で、娘が死にかゝつてゐますから、どうか人助けだと思つて、是非とも御來診を願ひたい、お迎への馬車も差し遣はしてあります、といふ文句なんです。なに、それだけならば何も大した事ではないのだが……その屋敷といふのは、町から二十露里もあつて、外は眞の闇夜だし、おまけにお話にも何にもならないやうな道なんです。しかも、その未亡人は貧乏暮らしをしてゐるので、二ルーブリ以上はどうも當てにすることが出来兼ねるし、それだつて至極あやしいくらいなんです。悪くしたら麻の反物か、何かの轆き割りくらゐを、お禮に貰ふのが落ちかも知れない。しかし、何しろ義務といふやつが第一ですからね——人間ひとり死にかゝつてゐるといふ場合です。私は俄然、常任委員のカリオピンに歌

留多を渡して、ひと先づ家に歸ることに致しました。みると、入り口の階段の傍に、やくざな、がた／＼馬車が待つてゐるのです。馬は百姓馬で、太鼓腹をしてゐるが、それも一通りや二通りの太鼓腹ではない。毛はもしや／＼して、まるで荒毛氈そつくり、馭者は遠慮して、帽子も被らずに控へてゐる。そこで、私は腹の中で考へました。「どうやら見受けたところ、御主人がたもお蠶ぐるみで、馬車を乗り廻していらつしやる御身分ぢやないらしい……あなた、お笑ひになりますね。けれど、私は率直に申し上げますが、われわれ貧乏人は、一應はなんでも頭に入れて、含んで置くものなんですよ……馭者が殿様然と坐り込んで、帽子もやたらに脱がうとせず、おまけに鬚の中にた／＼笑ひをし乍ら、鞭をちよい／＼動かしてゐるといふ風だつたら、十ルーブリ札二枚は必ず外れつこなし！ ところが、いま見ると、それとは大分勝手が違ふらしい。が、どうも致し方がない。義務が第一だ、とかう考へましてね、どうしても無くてはならない薬品類を持つて、出かけました。あなたは想像もおつきにならないでせうが、やつとのことで先方の家まで辿りついた始末です。道はまるで地獄のやうに非道いんですからね。小川がある、雪は溶け残つてゐる、泥濘はお話にならない程だし、水溜まりは到るところにある。おまけに、一とこころでは俄然堤が切れてゐたりして——えらい騒ぎでした……が、とにかく無事に着きました。見ると、小つぽけな蘘葦きの家なんです。窓々に明りがさしてゐるところを見ると、私を待ち兼ねてゐるにちがひない。如何にも上品さうな老婦人が、レースの部屋頭巾を被つて私を出迎へると、どうか助けて下さい、死にかゝつて居ります、と云ふ。そこで私は、御心配は要りません……御病人はどちらにいらつしやいます？ と云ひますと、どうぞこちらへ、と案内されて行つてみると、小ざつぱりした部屋で、片隅には燈明がついてゐて、寢臺の上には、年の頃はたちばかりの

娘が、昏睡状態である。その身體からは熱の臭ひがむん／＼して、息づかひがさも苦しさう——熱病なのです。そこには、姉妹らしい娘が他に二人ゐて——おろ／＼しながら、涙ぐんでゐる。「つい昨日までは丈夫でびん／＼してゐて、食事も大變すゝんだのですが、今朝になつてから、頭が痛い」と云ひ出しました。それが夕方になると、出しぬけにこんな姿になつてしまひました……と云ふのです。そこでまた私は、御心配は要りません——何しろ、これが醫者の務めですから、と云つて、診察にかゝりました。悪い血を出して、芥子泥を貼るやうに指圖して、水薬を處方しました。さうしてゐる間に、私は病人の顔を眺めました。見ると、どうでせう——實に正直な話が、今までこれほどの顔を見ることがありません……美人なんですよ、一口に云へば！ 私はなんとも言へない可哀さうな氣持ちになつて來ました。得も云はれぬほど氣持ちのいゝ面ざしで、眼なんかと云つたら……やがてその中、いゝ按配に落ちついて來ました。うまく汗が出て來て、どうやら正氣づいたらしく、あたりを見廻すと、につこり笑つて、手で顔を一撫で致しました。ふたりの姉妹はいきなり屈みこんで、一體どうしたといふの？ と訊ねました。なんでもないの、と云つて、顔を反ける……見れば、もう寢入つた様子です。で、私は、さあ、これから病人をそつとして置かなくちやなりません、と云つて、みんなでそつと足音を盗みながら、部屋を出てしまひました。たゞ小間使ひを一人だけ、萬一の用心に残して置きましたので。客間ではもうちやんとサモワールがテーブルの上に置いてあつて、ジャマイカ産のラムもすぐ傍に添へてある。私たちの商賣では、こいつがないと濟まされませんのでね。茶が出て、どうか泊まつて行つてくれといふ頼みですから……私も承知しました。この時刻になつて、何處へ行くわけにも參りませんからね！ お婆さんはのべつ溜め息のつき通しです。「まあ、あなたなんといふことで

す？」と私は云ひました。「大丈夫、取り止めて見せますよ。御心配は要りません。それより一休みなすつた方が好いでせう。もう一時廻りましたからね。」『では先生、もしかの事がありましたら、起こすやうに仰しやつて下さいまし。』『申しますとも、申しますとも。』そこで、お婆さんは引き上げました。二人の娘も矢張り自分の部屋へ落ちついてしまひました。私の寢床は客間に用意してくれましたので、私も横になりましたが——なか／＼寢つかれませんか——實に何とも奇妙な話で！ 身體はもうへと／＼に疲れてゐるのだから、こんな筈はないのだけれど、何時までも病人のことが頭を離れない。到頭、我慢し切れなくなつて、俄然とび起きてしまひました。一つ出かけて行つて、患者が何をしてゐるか見てやりませう、とかう思つたわけなので。病室は客間のすぐ隣りなものでした。さて、起き上がつて、そつと扉を開けました——心臓はどき／＼と早鐘をたいて居ります。見ると、小間使ひは口をぼかんと開けて、前後不覺の有様、しかも怪しからん奴で、軒までかいてゐるぢやありませんか！ 病人は私の方へ顔をむけて、横になつたまゝ、可哀さうに両手をぐつたり投げ出してゐるのです。傍へ寄つて行くと……突然ばつと眼を開けて、ぢいつと私を見据ゑるのです……『誰？ 一體だれなの？』と問ひかけられて、私は間諜ついでしまひました。「どうか吃驚なさらしないで、お嬢さん。私は醫者ですよ、お氣分はどんなかと思つて、ちよつと拜見に上がったのです。』『あなたは先生のですの？』さうですよ、さうですよ……お母様が私を呼びに、わざ／＼町まで使ひをお寄越しになつたので。お嬢さん、さきほど悪い血を出して差し上げましたから、これから少しお寝みなさいまし。かれこれ一日もしたら、きつともとの身體にしてさし上げます。』『あゝ、ほんとに、ほんとに、先生、私を死なさないで下さい……後生です、後生です。』『なにを仰しやるのです、滅相な！』さう云つてゐるうちに、また熱が

出て来たなど、私は腹の中で考へながら、脈をとつてみると、案の定、熱がある。病人はちつと私を見てゐたが——突然、わたしの手を握まへるぢやありませんか。『わたし云つてしまひますわ、なぜわたし死にたくないか、云つてしまひますわ、云つてしまひますわ……今は二人きりなんですものね。たゞ、先生、お願ひですから、誰にも仰しやらないで……實はね……』私が身を屈めると、娘は髪の毛が私の頬にふれるほど、耳もと近く口を寄せました。——正直に白狀しますが、私は頭がくらく／＼としてきました。——そこで、娘はひそ／＼囁き始めましたが……さう、何が何やら少しも分かりません……あゝ可哀さうに、これは謔言なのでした。……ひそ／＼、ひそ／＼と耳打ちするのですが、それが恐ろしく早口で、まるで露西亞語ぢやないやうなんです。話し終ると、ほつと溜め息をついて、頭をぐつたり枕へ落とし、指を立ててちよつと脅かすやうな眞似をしました。『よくつて、先生、誰にも仰しやつたら承知しませんよ……』と云つたやうな具合なので。私はどうやらからやらそれを落ちつかせて、水を飲ました上、小間使ひを起して、部屋を出しました。

こゝで醫者はまたぞろ勢ひ猛に嗅煙草を吸ひこんで、ちよつと氣の遠くなつたやうな風を見せた。『けれど、』と彼は話を續けた。「翌る日病人は豫期に反して、容態がよくなるたのです。私は考へに考へた揚句、俄然おもひ切つて腰を据ゑる事にしました。ほかの患者が待ち焦がれてはゐたのですけれど……お察しでもありませんが、そつちの方も忽かせにするわけには行きません。そんなことをすれば、商賣の方にさし響きますからね。しかし、何よりも第一に、娘は全く危篤状態でしたし、それに第二としては、正直に申し上げなければなりません、私自身もこの娘にひ

どく心を牽かれたのです。その上、家族ぜんたいが私の氣に入りましたので。別に財産家といふではないけれど、全くのところ、珍らしく教養の出来た人達なんです……父親といふのは學者で、著述家だつたのですが、お定まりの話で、不自由勝ちの中に死んで了ひました。けれど、子供たちには立派な教育を授けて、本なども夥しく残して行きました。私は何くれとなく病人の面倒を見させぬか、それとも外に何かわけがあつたか知りませんが、この家の人達は私をまるで、云はゞ身内の者のやうに隔てなくしてくれるのです……とかくしてあるうちに、雪解けは愈々癒ひどくなつて、交通の方法は、その、全く杜絶してしまひました。藥品類でさへやつとの思ひで町から取り寄せるといふ始末……病人の容態は一向はかへくしくない……かうして一日一日、一日一日と過ぎてゐる中に……俄然……その時……（醫者はちよつと言葉を休めた。）全く、どんな風にお話したらよろしいやら……（彼はまた嗅煙草を吸ひ、空咳をして、茶をぐつと一口飲んだ。）ざつくばらんに申しますと、病人はえゝと、その……つまり、私に戀ひするやうになつたとでも申しませうか……いや、戀ひしたといふわけでもありませんが……尤も……全くなんと云つたらいか、えゝと……（醫者は目を伏せて顔を赧らめた。）

「いや、」と彼は勢ひこんで語り續けた。「色の戀ひのといふ沙汰ぢやありません、第一、自分の相場といふものを考へなくちやなりません。その娘は教育もあれば、頭もよく、本もうんと讀んでゐるのですが、私はラテン語さへ、正直なところ、すつてんてんに忘れてゐるのですからね。風采からいつても（と醫者は薄笑ひを浮かべながら、自分の様子に流眇をくれた）、これはまた別に自慢の種になりませんでな。とは云ふものの、有難いことに、まんざらの馬鹿に生みつけられた譯でもない。白いものを黒いと云ふやうなこともなく、これで多少は物の道理も分かつて居りま

す。早い話が、アレクサンドラ・アンドレーヴナが——その娘さんはアレクサンドラ・アンドレーヴナといふ名でしたよ——私に寄せて下すつた氣持ちは愛情などではなくて、友達としての好意と云ふか、尊敬と云ふか——さういふ風のものだつたのは、私にもよく分かつて居りました。もつとも、當人はその點で感違ひをしてゐたかも知れませんが、何分場合が場合なんですから、その邊はよろしくお察しを願ひます……しかし、」醫者は息もつかずに、さもまごついたらしい様子で、この途切れ途切れな物語りを終つた後、更にかう云ひ添へた。「私はどうやら少々お調子に乗り過ぎたやうですね……こんな話し方では一向お分かりにならないでせう……御迷惑でせうが、こゝで何も彼も順序立ててお話し致しませう。」

彼はコップのお茶をぐつと飲み乾して、いくらか落ちついた聲で話し出した。「さて、そこです。病人はだん／＼悪くなる一方でした。一日一日とよくないのです。あなたもは醫者ではいらつしやらないから、お分かりにはなりませんまいけれど、我々の心の中がどんなものか殊に病氣が手に合はないと感づき出した最初の間、我々の心の中は全く想像の外ですよ。醫者の體面の持つて行き場がありませんやね！ 俄然、筆にも言葉にも盡くせないほど氣遅れがして來る。今まで知つてゐた事も、すつかり忘れてしまつて、病人が自分を信用してくれないやうな氣がするのです。傍の者もこつちが途方に暮れてゐるのに氣がついて來て、症状を話すのも澁りがちになり、何だか上目づかひにひとをじろ／＼眺めて、頻りにこそ／＼耳打ちをしてゐる……全く、嫌な氣持ちですよ！ だつて、この病氣には適藥がある筈なんだから、唯そいつを見つけたへすればいゝのだ。あゝ、あれぢやないかしら？ かう考へて、試してみると、駄目だ、違ふのです！ 藥の利きめが本當に現はれて來るまで待ち切れなくて……あれぢやないか、これぢやな

いかと狼狽へてばかりゐる。時には處方原書まで取り出して見ることがあります……この中にこそ必ずあるに違ひない、と云つたやうな氣持なのです！ どうかすると、かけ値のない話が、當てずつぽうに本を開けて、あはよくば紛れ當たりに當たつてくれと、そんな事を心頼みにするやうにもなります……ところが、そんな事をしてゐるうちに、人間一匹死んでゆくのです。もしほかの醫者が手がけたら、生命拾ひをしたかも知れないですからね。そこで、自分で責任を負ひかねるから、立會ひ診察にして貰ひたいと云ひ出すわけですが、さういふ時にどんな間抜け面をしてゐるか、我ながら情けなくなりますよ！ やがて、甲を經るに従つて、馴れつ子になると、案じる程のこともない。人が死んだつて——何も俺が悪いんぢやない、俺は出来るだけのことはちやんとしたのだと、結構澄まして居られます。しかし、それでもまだ苦しいことがありますよ。自分が盲目的な信賴を受けてゐるのを見ながら、どうにも癒しやうがないのを腹の中で感じてゐる場合ですな。つまり、かういつた風な信賴の念をアレクサンドラ・アンドレーヴナの家中の者が、私に捧げてくれたのです。——娘が危篤だといふことさへ忘れるやうな始末なので。私もまた私で、なに大丈夫ですと、安心させてはゐるものの、内々膽つ玉を縮み上がらしてゐました。運の悪い時には悪いもので、道路の雪融けはお話以上で、馭者が薬を取りに行つて歸るまで、二日も三日もかゝるといふ有様。私は病人の傍に付きつきり、一歩も病室を出ないやうにしながら、なんですな、いろんな笑ひ話をして聞かせたり、歌留多のお相手をつとめたりするのです。夜も枕もとに坐りつきりでした。老母は眼に涙を浮かべて、禮を云ふのですが、私の心の中は、そんなお禮を云つて貰ふ値打ちはないといふ氣持ちで一杯でした。あなたには腹藏なく申し上げますが——今さら隠し立てしたつて仕様がありません——私は自分の患者に惚れてしまつたので

す、アレクサンドラ・アンドレーヴナも、私に離れ難ない氣持ちを持つやうになりましたね、もう私よりほかに、誰ひとり病室へ入らせないので。私を相手に四方山の話始めて、どこで修業したかだの、どんな風に暮らしてゐるかだの、身内にはどんな人がゐるかだの、どんな家へ往診に行くかだの、根掘り葉掘り訊ねるぢやありませんか。私は病人が話し込むのはよくないと思ひながら、これを差し止める——つまりその、きつぱりと禁じてしまふことが、どうも出来な。よく我れと我が髪を掻き掻きながら、この悪黨、貴様は一體なにをしてゐるのだ？ と自分を責めてもみましたが——また時によると、娘は私の手をとつて、自分の掌に握つたまゝ、長い間ぢいつと私の顔を見つめてゐる。暫らく見つめた後、顔を反けて、ほつと溜め息をつきながら、あなたはなんて優しい方なんでせう！ と云ふ。その手は燃えるやうに熱くて、大きな眼は物憂げにとろりとしてゐるのです。『え、あなたは優しい方ですわ、いゝ方ですわ。あなたはこの近所の人達とはまるで違ひます……いえ、あなたはあんな風ぢやありません……どうして私は今まであなたを知らずにゐたのでせう！』と云ふから、私は『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、氣を落ちつけて下さい……私は誓つて申しますが、お氣持ちはよく胸に應へます。一體なんの取柄があつてそんなに仰しやつて頂けるのやら……でも、どうか氣を落ちつけて下さい、お願ひですから、氣を落ちつけて下さい……萬事うまく行きますよ、あなたももとの身體におんななさいませよ。』——ところで、こゝでお断りしておかなければなりません、と醫者は身を乗り出して、眉をつり上げながら云ひ足した。『この一家は近所の人とあまり交際をして居りません。小地主連は格が下がるし、物持ち連とつきあふのは、自尊心が承知しない。敢へて申し上げますが、並み外れて高い教養を持つた家族なので。——従つて私としても、ねえ、悪い氣持ちは致し

ません。病人はもう私の手からでなければ、薬を受けつけないのです……いぢらしい様子で、私の腕を藉りて身を起こし、薬を飲み終ると、私の顔をちらと眺める……と、私は氣もそぐろになつてしまひます。ところが、病人の容態は次第に悪くなつて來ました。益々いけないのです。死んでしまふ、間違ひなく死んでしまふ、と私は心に思ひました。ねえ、さうぢやありませんか、自分が身代はりに棺の中に入つてもいゝくらゐな氣がしてゐるのに、周りでは母親や姉妹たちが様子を見てゐて、私の眼色を窺つてゐるのですからね……信用もだん／＼薄らいで來ます。『如何です？ どんな風ですの？』と聞かれると、『大丈夫です、大丈夫ですとも……』と答へはするものの、大丈夫どころか、頭の中がこんぐらかつてしまつてゐるのです。さて、私は或る時、夜中にたつた一人、例の如く病人の傍に付き添つてゐました。小間使ひは相變はずそこに腰かけたまゝ、遠慮會釋なしに高軒なのです……勿論、可哀さうに、こんな小娘を責めてみたつて始まりません。この娘だつてすつかりまゐつてゐるのですからね。アレクサンドラ・アンドレーヴナはその晩終夜大變調子が悪かつた。熱で弱り切つたのですね。丁度最夜中になるまで、のべつ寢返りばかり打つてゐましたがその中にやつと寢入つたらしい風でした。とにかく、身動きもしないで靜かにしてゐました。片隅の聖像の前では燈明が細々と灯つてゐる。ちつと坐つてゐる中に、つい頭が下がつて來て、私までう／＼してしまひました。すると突然、まるで誰かに脾胃を突かれた様な氣がして、はつと振り返つて見ると……ねえ、どうでせう？ アレクサンドラ・アンドレーヴナが双の眼を一杯に見開いて、私を瞞めてゐるではありませんか……唇は弛んで、頬はまるで燃えるやう。『どうしたのです？』『先生、わたしはもう駄目なんぢやないでせうか？』『滅相な！』『いけません、先生、いけません、願ひですから、私が助かるなんて仰しやらないで……』

そんなこと仰しやらないで……先生にわたしの氣持が分かつて下すつたら……ねえ、後生ですから、わたしの容態を隠さないで下さい！』かう云ふ當人は、はあ／＼と忙しない息遣ひをしてゐるのです。『もしわたしがどうしても死ぬものだと、判然り自分で分つたら……その時こそわたし貴方に何も彼もお話しますわ、何も彼も！』アレクサンドラ・アンドレーヴナ、飛んでもないことを！』『ねえ、實はわたし、ちつとも眠らないで、前からあなたを眺めてゐましたの……後生一生の願ひ……わたし、あなたを信じます、あなたは親切な方です、正直な方です、この世にありとあらゆる神聖なものに賭けて願ひしますから——私に本當のことを聞かせて下さい！』これが私にとつてどんなに大事なことか、それをあなたが分かつて下すつたら……先生、後生ですから、教へて下さいな、わたし危篤なんでせう？』『何を教へることがありません。アレクサンドラ・アンドレーヴナ、滅相もない！』後生一生の願ひですから！』かうなつたら、もうあなたに隠し立ては出來ません、アレクサンドラ・アンドレーヴナ——あなたは全く危篤なのです。けれど、神様はお慈悲深いから……』『わたし、死ぬんだわ、死ぬんだわ……』と娘はさも嬉しさを調子で云つて、顔までなんだか浮き浮きして來ました。私はぎよつとした位です。『どうか心配しないで下さい。心配しないで。わたし、死んでいふもの、ちつとも怖ありませんわ。』娘は不意に身を起こして、片腕をつきました。『今こそ、え、今こそわたしすつかり云つてしまへますわ。私は心の底からあなたに感謝してゐますの。あなたは優しい、いゝ方ですわ。わたし、あなたが好きなんですの……』私はきよとんとして、相手の顔を見つめてゐました。なんだか息苦しいやうな氣持ちでしてね……』『ねえ、わたし、あなたを愛してゐますのよ……』アレクサンドラ・アンドレーヴナ、一體わたしになんの取り柄があつて！』『いゝえ、いゝえ、あなた

は私の氣持ちがお分かりにならないのです……わたしの氣持ちが分からないのよ……』かう云ふなり、俄然兩手を差し延べて、私の首に巻きつけると、いきなり接吻するぢやありませんか……御想像くださるでせうが、私はすんでのことで聲を立てないばかり……そのまゝ膝をついて、枕に顔を埋めてしまひました。娘は黙つてゐましたが、その指先は私の髪を抑へたまゝ、わなわなと慄へてゐるのです。ふと氣がつくと、泣き聲が聞こえるぢやありませんか。私はいろいろと慰めたり、誓つたりしはじめましたが……もう全くのところ、何を云つたのやら、自分でも覺えがありません。『小間使ひが起きてしまひますよ、アレクサンドラ・アンドレーヴナ……』ありがたう……本當に……どうか氣を落ちつけて下さい。』と私は云ひました。『え、よして下さい、澤山ですわ。』と娘は繰り返すのでした。『あんな人達なんか、どうだつて構はないぢやありませんか。よしんば眼を覺まして、起きて來たつて……どうせ同じことですわ。だつて、わたしは死ぬ身體なんですもの……それに、なんだつてびく／＼なさるの、何を怖がつてらつしやるの？ 頭を上げて頂戴……それとも、あなたはわたしを愛してはいらつしやらないのでせうか、わたしの心の迷ひだつたのでせうか……もしさうだつたら、どうか御免あそばせ。』アレクサンドラ・アンドレーヴナ、何を仰しやるのです？……私はあなたが好きなんです、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。娘はひたと私の顔を睨めて、兩手を大きく擴げました。『それなら、私を抱いて下さいな……』私はぶちまけて申しますが、どうしてあの晩、氣が狂はなかつたか、我ながら合點が行かないほどです。私は自分の患者が、我れと我が身を滅ぼすやうな眞似をしてゐるのを承知してゐたし、完全に病人が正氣でないのも、見てとつて居りました。その上、末期に近いといふことを覺悟してゐなかつたら、當人も私のことなど考へはしなかつたらう……この事も、私にはちやんと

分かつてゐました。全く、なんと云つたつて、誰ひとり戀ひもしないで二十五やそこいらで死んで行くのは、考へただけでも情けない話ですからね。つまりそれが苦しさに、娘は夢中で私に飛びかゝつて、救ひを求めたのです——これでお分かりになつたでせう？ いづれにしても、娘は私を抱き締めたまゝ、離さうとしません。『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、少しは私も可哀さうだと思つて下さい。それに御自分の身體だつて、粗末になすつてはいけません。』と云ふと、『なぜです、何を大事がるんですの？ だつて、私はどうせ死ななくちやならないんですもの。』といふ返事です。これがのべつ出て來る口癖なのでした。『ねえ、もしわたしが生きながらへて、いつぱしのお嬢さま顔をするやうになると知れてゐたら、恥づかしくつて、それこそ恥づかしくつて、顔むけが出來ませんわ……さうしたら、どうしますの？ 一體、誰が必ず死ぬなんてあなたにさう云つたんです？ 』いゝえ、駄目よ、およしなさい。わたし、瞞されやしないから。あなたは嘘をつくのが下手ね。まあ御自分の顔を見て御覽なさい。『あなたは達者におなりになりますよ、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。私がすつかり癒してお目にかけます。私たちは二人でお母様に祝福して頂いて……二世のえにしを結びませう。さうして二人は幸福に暮らすのです。』『いけません、いけません、私はあなたに誓つて頂いたんですもの。あたし、どうしても死ななくちやなりません……あなた、わたしに約束したでせう……ちやんとさう云つたでせう……』私は苦しかつた、いろ／＼な理由で苦しかつたのです。全く妙なもので、世の中には時々こんなことが持ち上がるものですよ。ほんのつまらない事のやうには思はれますが、しかし辛いものですよ。突然、娘は止せばいゝのに、私の名を訊ねようなんて考へを起こしました、つまり苗字ぢやなくて、名前なんです。ところが不仕合はせなことに、私の名前はトリーフォンと云ふのです。さや

う、さうです、トリーフォン——トリーフォン・イワーヌイチなので。家ではみんなが私のことを先生、先生と呼んでみましたかね。仕方がないから、お嬢さん、トリーフォンでございます、と申しました。すると、娘は眉を蹙めて、首を捻り乍ら、何やら佛蘭西語でぼそ／＼云ふのです——いやはや、どうも厭な氣持のものですね。それから俄然笑ひ出しましたが、これ又いゝ氣持ちのものぢやありません。さて、こんな風にして、私は娘を相手に殆どよつびて過してしまひました。夜が明けて、部屋を出た時には、まるでぼつとしてゐましたよ。それからもう晝すぎにお茶を済ましてから、また病室へ入つてみますと、どうもはや、驚いたことには、まるで相恰が變はつてしまつてゐるのです。棺に納められる死骸だつて、まだしも人間らしい顔をしてゐる位です。正直、嘘のないところ、どうして私はあの責め苦を持ち堪へたか、今でも合點が行きません。ほと／＼合點が行かない程ですよ。それからまだ三日三晩といふもの、病人は苦しみ通しました……しかも、その夜な夜なの恐ろしさ！娘が私に口走る言葉といつたらお話にもならない程なんです……いよ／＼最後といふ晩に、まあお察し下さい——私は病人の傍に付き添ひながら、神様に向かつて、もう一刻も早くこの女を引き取つて下さるやうに、そして私も一緒に御召し下さいましたと、たゞそればかり祈つてゐました……すると俄然、老母がさつと戸を開けて、部屋へ入つて來ました……私はもう前の晩からこの老母さんに、もう望みが少なくなつて、容態が面白くないから、坊さんを迎へるのも悪くないでせうと注意しておいたわけなので。病人は母親を見るが早いから、『まあ、丁度來てくだすつてよかつた……お母さん、私たちを見て頂戴、私たちお互ひに愛し合つてゐるのよ、私たちは二人で約束を交はしたの。』『一體あの娘は何を云つてゐるんですの、先生、何を云つてゐるんですの？』私は死人のやうに冷たくなつてしまひました。『あ

れは謠言です。熱が高いので……』と云ひますと、娘は『よして、よして、あんたはたつた今までの別なことを仰しやつたくせに。私から指環まで受け取つたぢやありませんか……何を白つぱくしていらつしやるの？うちのお母さんは優しい人だから、赦して下さいますわ、察して下さいますわ。私は死んで行く身ですもの、嘘なんかついたつて始まりません。さあ、手を貸して頂戴……』私はいきなり席を躍り上がつて、部屋を駆け出してしまひました。老母は云ふまでもなく、様子を悟りました。

「しかし、もうこれ以上あなたを悩ますのは遠慮させよう。それに、白状しますが、當の私だつてかういふ事を一々思ひ出すのは苦しいですからね。病人はその翌日息を引き取りました。神よ、彼女に天國を與へたまへ！」と醫者は早口に云ひ添へて、溜め息をついた。いまはの際に、娘はみんなを人拂ひして、私と差し向かひになりました。『勘忍して頂戴。』とかう云つたものです。『わたしはあなたに對して、濟まない事をしたかも知れませんが……こんな病氣で……でも、信じて下さいね、わたしはあなたよりほか、誰も戀ひした事がないんですもの……私を忘れないでね……あの指環を大切に頂戴……』

醫者はつと顔を反けた。私はその手をとつた。「いや！」と彼は云つた。「何か他の話をしようぢやありませんか。でなければ、小さな賭けで歌留多でも一つ如何です？何せ、われ／＼風情がこんな高遠な感情に耽ける柄ぢやないですからね。我々風情の考へることは、どうか子供がぎやあ／＼泣かないやうに、女房ががみ／＼云はないやうにと、たゞそれだけより外にはありませんやね。その後わたしもまあ、正式に結婚しました……さうです……商人の娘を貰ひましたよ。七千ルーブリの持參金つきで、名をアクリーナと

いふのだから、トリーフォンとは好一對ですよ。(トリーフォンもアクリーナも農民に多い名前である)打ち明けたお話が、意地の悪い女房ですけど、まあ仕合はせなことには、一日寝てばかりおまましてな……ときに、歌留多は如何です？」

私達は一コペイカがけの歌留多を始めた。トリーフォン・イワーヌイチは私から二ルーブリ半まき上げて、自分の勝利に大満悦の態で、夜おそく歸つて行つた。

私の隣人ラヂーロフ

秋になると、山鷓はよく古い菩提樹の庭に寄つて来る。さういふ庭が、このオリョール縣には可成り澤山ある。われ／＼の祖先たちは、永住の地を定める時に、必ず上等の土地を二町歩ばかり、菩提樹並み木のある果樹園にしたものである。五十年か、たか／＼七十年も経つうちに、かうした地主邸、云ひ換へれば『貴族の巢』は、だん／＼地表から跡を絶つて行つた。家は腐つたり、取り毀し家として賣り渡されたり、石を壘んで造つた長屋は廢墟と化してしまひ、林檎の木は立ち枯れになつたり、薪にされたりして、塀や編み垣は跡かたもなくなつた。たゞ菩提樹ばかりは相變はらず、時を得顔に生ひ繁つて、今は一面に耕された畑に取り巻かれながら、輕薄な現代の人々に『嘗てこゝに安らかなる憩ひを求めた祖先や近親たち』のことを語つてゐる。かうした古い菩提樹ほど美しい木はない……情け容赦もない露西亞の百姓の斧でさへ、かういふ木には双を加へかねるものである。葉は細かくて、逞ましい枝が廣く四方に延び、その下には不斷の蔭を作つてゐる。

ある時エルモライと二人で、鷓鴣を追ひながら野原をうろつき廻つてゐる間に、私は向かうの方に一つの荒れた庭を見つけ、そこを目指して歩いて行つた。木立ちの中へ足を踏み入れるか入れない中に、一羽の山鷓が藪の中から荒々しい羽音を立てながら、ぱつと飛び立つたので、私は直ぐさま火蓋を切つた。と、その途端に、五六歩離れたところで、きやつといふ叫び聲が聞こえた。若い娘の吃驚したやうな顔が木立ちの間から覗いたと思ふと、すぐにまた隠れてしまつた。

エルモライが私の傍へ駆け寄つて『なんだつて、こんな所で鐵砲なんか撃ちなさる。こゝは地主の住居ぢやありませんか。』

私がそれに答へる間もなければ、また犬が氣取つた物々しい様子をしながら、射ち落とされた鳥を私のところまで啗へて来る暇もなく、輕快な蹠音が聞こえて、鼻鬚を生やした背の高い男が繁みの中から姿を現はし、不満げな顔付きで私の前に立ち止まつた。私は言葉を盡くして詫びを云つた後、自分の姓名を名乗つて、他人の領地で撃つた鳥を返さうと申し出た。

「よろしい。」と彼は笑顔でかう云つた。「その鳥は納めて置ませう。が、それには条件があります。あなたに宅で食事をして頂きたいので。」

正直なところ、私はこの招待をさして嬉しく思はなかつたけれど、辭退するわけにもゆかなかつた。「私はこゝの地主で、あなたとはお隣り同志になるラヂーロフといふ者です。お聞き及びかもしりませんが。」と新らしい知人は言葉を續けた。「今日は日曜ですから、宅の食事もひどく粗末ではない筈です。でなかつたら、御招待もしなかつたでせうからね。」

私はいふ場合に誰でも云ひさうな挨拶をして、主人の後からついて行つた。つい近ごろ掃除したばかりらしい小徑づたひに行くと、間もなく菩提樹の林を出はづれた。私たちは菜園へ入つて行つた。古い林檎の樹と、勢ひよく生ひ繁つたすぐりの叢の間に、淡青色をしたキヤベツのまるい頭がまだら模様を描いてゐるし、つめ草(ホップ)は高い棒にうね／＼と絡みつき、畦には枯れ切つた豌豆の蔓を纏らした蒼色の桿が、ところ狭く立ち竝らんでゐる。大きな平つたい南瓜が、まるで地べたへ轉がしたやうに實つてゐるし、胡瓜は埃つぽい刺々した葉蔭から黄色く見え、編み垣の縁に沿つて丈の高い蕁麻がゆら／＼と揺れてゐる。鞭韌すいかづら、にはとこ、

野茨などが、二ところ三ところに塊まつて生えてゐる——もとの「花壇」の名残りである。赤ちやけて粘々した水を湛へた小さな生簀の傍に井戸があつて、まはりは一面の水溜まりになつてゐる。その水溜まりの中で家鴨どもが氣忙しさうにばち／＼やつて、しきりに方々つつ突き廻してゐる。一匹の犬が全身を慄はし、眼を細めながら、空地で骨を齧つてゐる。すぐ傍には斑の牝牛が、ときどき瘦せこけた背中へ尻尾を振り上げ乍ら、大儀さうに草を捲つてゐる。やがて小徑がうねりして、太い楊や白樺の間から、入り口階段の曲がりくねつた、古い、くすぶつた椗葺屋根の家が見えて來た。ラヂーロフは足を止めた。

「尤も、」人の好きさうな眼付きで、まともに私の顔を見つめながら、彼はこんなことを云ひ出した。「いま考へ直してみますと、あなたは私の家へなんか、ちつとも寄りたいとは思ひにならな

いでせうね。もしさうだとすれば……」
私は彼に全部まで云はせないで、飛んでもない、お宅で御馳走になるのは實に愉快です、と辯

明した。

「では、どうぞ御隨意に。」
私たちは家の中へ入つた。青い厚地の羅紗で仕立てた長い長上衣カフタンを着た若者が、入り口階段で私たちを出迎へた。ラヂーロフは早速この男に、エルモライのところへウォートカを持つて行つてやるやうに命じた。私の獵師は氣前のいゝこの家のふるまひ主の背中に、恭々しく一禮したものである。いろんな繪をこちや／＼と貼りつけて、鳥籠を方々へぶら下げた控へ室を通りぬけ、小さなひと間へ入つて行つた——これがラヂーロフの書齋なので。私は獵の七つ道具を外して、鐵砲を片隅へ立てかけた。裾の長い上衣を着た若者が、まめ／＼しく私の服に刷毛をかけてくれ

た。
「さあ、これから客間の方へまゐりませう。」とラヂーロフは愛想よく云つた。「母を紹介さして頂きます。」

私は彼の後について行つた。客間の真ん中に据ゑたソファに、餘り背の大きくない老婦人が腰をかけてゐた。鳶色の衣裳をつけて、白いレースの頭巾を被つてゐたが、その瘦せた顔は如何にも善良さうで、おづ／＼とした憂はし氣な眼付きをしてゐる。

「あの、お母さん、御紹介します。隣り村の***さんです。」

老婦人はちよつと腰を上げて、私に會釋をしたが、袋みたいな厚い毛糸の手提げを、しなびた手から離さうとしなかつた。

「もう、前からこちらの方へお見えになつていらつしやるのですか？」と彼女は眼をばち／＼させながら、弱々しい小さな聲で訊ねた。

「いえ、つい近頃です。」

「暫らくこちらに御滞在のおつもりで？」

「冬までと思つて居ります。」

老婦人はそれきり黙りこんだ。

「ところで、こちらは、」とラヂーロフは背の高い瘦せた男を指さして見せながら、すかさずかう云つた。私は客間に入つて来る時、この男に氣がつかかなかつた。「この人はフォードル・ミヘーイチ：さあフェーチャ、お客様に得意の藝を御覽にいれる。なんだつて、隅つこの方に小さくなつてゐるんだ？」

フォードル・ミヘーイチは、すぐさま椅子から身を起こし、窓の上からやくざなヴァイオリオンを持つて来て、弓を手にとつた。けれど、普通だれでもするやうに、端の方を持つのではない、真ん中を掴むのであつた。——それからヴァイオリオンを胸にあてがつて、眼を瞑ると歌を唄ひ唄ひ絃をぎいぎいこすりながら踊り出した。彼は見たところ七十ばかりで、かさ／＼骨ばつた手足に裾の長い南京木綿の上衣が、いとも惨めにだぶついてゐた。その踊る様子といつたら、時には威勢よく小さな禿頭を振り立てたり、時には氣でも遠くなつたやうにその頭を動かして、筋ばつた頸をのびしながら、一つ所で足をばた／＼やつたりするのである。どうかすると、眼に見えて骨の折れるらしい恰好で膝を屈げる。齒のない口からは、さも老いぼれらしい聲が洩れてゐた。ラヂーロフは私の顔色から、フェーチャの『藝』があまり私の御意に叶はないのを察したと見えて、

「いや、結構、もういゝよ、爺さん。」と云つた。「あつちへ行つて、御褒美にありつくがい。」

フォードル・ミヘーイチは早速ヴァイオリオンを窓の上に載せ、初め先づ客の私、それから老婦人最後にラヂーロフといふ順で會釋をして、そのまゝ出て行つた。

「あれでもやはり地主だつたんですよ。」と新しい知人は言葉を續けた。「しかも裕福な方だつたんですが、すつかり零落しちやつて——今ではこの通り、私の家で居候をしてゐる有様なのです。もと盛んな時代には、縣内でも一二と云はれる發展家としてね、他人の細君を二人まで連れて逃げ出したり、唱歌隊を抱へたりして、自分も歌や踊りの名人だつたんですがね……しかし、ウオートカを一つ如何です？　もう食事の用意は出來て居りますが。」

さき程ちらりと庭で見た例の若い娘が、部屋へ入つて來た。

「あゝこれがオーリヤです！」とラチーロフはちよつと顔を反けながら云つた。「どうぞ、お心安く、可愛がつてやつて下さい……さあ、食事にまゐりませう。」

私たちは食堂へ入つて、座に着いた。まだ私達が客間から出たり、席を決めたりしてゐる間に、もう例の『御褒美』の利き目で眼をぎら／＼させ、鼻をほんのり赤くしたフォードル・ミヘーイチが『凱歌のいかづち轟き渡れ！』を唄つてゐた。老人はクロスもかけない片隅の小さなテーブルに別に食事の支度をして貰つてゐるのであつた。この可哀さうな年寄りには、決して身綺麗とは云へなかつたので、何時もみんなから少し離して置かれてゐたのである。彼は十字を切つて、一つ溜め息をつくつと、まるで鱧のやうに、がつ／＼食べ始めた。食事は前觸れがあつただけに、可成り上等で、それに日曜でもあつたので、ふりん／＼したゼリーや、『西班牙の風』と稱するケーキまでちやんと附いてゐた。かれこれ十年も地方の歩兵聯隊に勤めて、土耳其戦役にまで従軍したといふラチーロフは、食事の間にいろ／＼な話を初めた。私は身を入れてそれを聞きながら、そつと内緒でオリガの様子を眺めてゐた。この娘は飛び離れて縹緞がいゝといふ程でもなかつたけれど、きつぱりとして落ち着いた顔の表情、眞つ白な秀でた額、厚いふさ／＼した髪の毛、取り分け、小さいけれど惻愍さうに生き生きと澄み切つた鳶色の眼は、私でなくとも、見る人の眼を眩らしたに相違ない。彼女はラチーロフの話す一言一言に、耳を傾けてゐるらしかつた。その顔にはたゞの關心どころでない、一生懸命な注意の色が現はれてゐた。ラチーロフは年配から云へば、その父親といつてもいゝ位であつた。彼女に向かつて『お前』言葉を使つてゐたけれど、娘でないと云ふことは直ぐに一眼で察しられた。話の間に彼はふと、亡くなつた細君のことを口に出したが、その時オリガを指さしながら、『これはその妹なんです、』と云ひ添へた。彼

女は忽ち顔を赤らめて、眼を伏せてしまつた。ラチーロフは暫らく黙つてゐたが、やがて話題を轉じた。老母は食事の初めから終ひまで、一言も口を利かないで、自分も殆ど何一つ食べなければ、私に薦めもしなかつた。その様子には、なんとなくおど／＼した、頼みの綱を切られたやうな、諦めの色が滲み出してゐた。それは、見る人の心を痛ましく緊めつけるやうな、彼の老いの悲しみである。食事の終り頃に、フォードル・ミヘーイチは主人と客に『祝辭』を述べようとしたが、ラチーロフは私の顔をちらと見て、老人に口を噤ませた。老人は片手で口をこすつて、眼をばちくりさせ、一つお辭儀をして、また腰を下ろしたが、今度はもう椅子のどつ端に尻を載つけた。食事が濟んでから、私はラチーロフと一緒に書齋へ赴いた。

いつも一つの思想や熱情に激しく捕はれてゐる人間は、どんなに持つて生まれた性質や、才能や社會上の地位や、教育などが違つてゐても、何かしら共通なところを備へてゐて、その應待振りにどこことなく外面的な類似が見られるものである。ラチーロフをつく／＼観察すればするほど、彼もやはりさういつた人間の一人だといふ氣がするのであつた。彼は領地のこと、作物の出来榮え、草刈のこと、戦争のこと、郡内の噂ばなし、目前に迫つた選挙のことなど話したが、その話しぶりは極めて自然で、可成り身を入れてゐる様にさへ思はれたけれど、だしぬけに嘔吐と吐息をついて、過激な労働で疲れ切つた人のやうに、ぐつたりと眩椅子に身を沈めて、顔を撫で廻すのであつた。どうやら見受けたところ、彼の善良で暖い心はたゞ一つの感情に滲み渡つて、その中に浸つてゐるやうに思はれた。私は彼が何一つとして、熱心な愛着を持つてゐないのを見て、それだけでもいゝ加減に吃驚した。食べる事にも、飲む事にも、獵にも、クルスクの鷺にも、逆落としといふ飛び方をする鳩にも、露西亞文學にも、跪足の馬にも、匈牙利馬にも、歌留

多遊びにも、球突きにも、舞踏會にも、大小の街々への旅行にも、製紙工場や甜菜糖の工場にも、けばくしく塗り立てた四阿にも、茶を飲む事にも、贅澤三昧に飼ひ馴らされた側馬にも、帶を腋の下邊に高々と締めた肥つちよの馭者——どういうわけか知らないが、頸を動かす度に眼を横にひつ吊らして、今にも眼の玉が飛び出しさうにする、威容堂々たる馭者にも——一切無興味なのであつた：『一體全體、この地主はなんといふ人間なのだらう！』と、私は腹の中で考へた。とは云ふものの、彼は運命を呪ふ嫌人主義者を氣取つてゐるわけではさら／＼ない。それどころか、たゞ見たばかりでも、無性やたらに人が好くて、客ずきで、こちらが厭になつてしまふくらゐ、相手かまはず誰とでも近附きになりたがるたちなのである。尤もそれと同時に、こんなことも感じないではゐられない——彼は本當に人と友達交際をしたり、隔てなく打ちとけたりすることは出来ない。それは一概に他人に用がないからではなくて、彼の生命が一時すつかり内部の方へ向けられてゐたからである。私はラヂーロフをつく／＼見入りながら、いま現在にしても、これから先きにしても、彼が幸福になり切つた姿を、どうしても想像することが出来なかつた。彼は美男子といふのではなかつたが、その眼付きにも、微笑にも、その身體ぜんたいにも、何かしら非常に人を惹きつけるものが潜んでゐた——全く潜んでゐたのである。で、この男をもつとよく知つて、芯から好きになつてやりたいやうな氣がするのであつた。それはなんと云つても、時には曠野地方の地主らしい態度がちらつくけれど、とにかく愛すべき人物であつた。

私たちが新任の郡貴族會長の話を始めかけたところへ、突然戸口で『お茶の用意が出来ました。』といふオリガの聲が響いた。私たちは客間へ移つた。フォードル・ミヘーイチは、相變はず自分の席と決めた小窓と扉の間の片隅で、殊勝らしく足を縮こめながら腰かけてゐた。ラヂ

256431

ーロフの母親は靴下を編んでゐた。開け放した窓越しに秋めかしい爽々しさと、林檎の匂ひが流れて来る。オリガは甲斐々々しくみんなにお茶を注ぎ分けてゐた。で、いま私は食事の時よりも氣をつけて、彼女の様子を眺めた。彼女は一般に田舎住まひの若い娘の例に洩れず、ごく口數が少なかつたけれど、それでも何か上手にうまい事を云はうと焦りながら、しかも惱ましいほど空虚と無氣力さを感じてゐると云つたやうなところは、一向眼につかなかつた。さも言葉に盡くせないほどの氣持ちが胸に溢れてゐます、とても云ひたさうに溜め息をついたり、思ひ入れたつぷりで上目づかひをしたり、夢見るやうな、そこはかとなない微笑を洩らしたり、そんな眞似は一切しなかつた。彼女はまるで大きな幸福か、さなくば大きな不幸の後に一息いれてゐる人のやうな、落ちついたさり氣ない様子をしてゐる。その歩きぶりも、身のこなしも、はき／＼として自由であつた。私はこの娘がすつかり氣に入つてしまつた。

私はまたラヂーロフと話しこんだ。どういふ道筋を辿つて行つたのか、もうまるで覺えがないけれど、ごくつまらない事が、非常に大きな事件よりも、反つて深い印象を與へることが始終あるといふ、分かりきつた意見の交換に行きついたのである。

「さやう、」とラヂーロフは云ひ出した。「私はそれを自分で體驗しましたよ。わたしは、御承知の通り家内を持つて居りました。僅かな間で……たつた三年きりです。家内は産で亡くなりましたので。私は一人で生き残れないやうな氣がしました。恐ろしい悲しみに打ちのめされて、まるで死んだやうになつてゐましたが、泣くにも泣けないで——氣狂ひのやうに、無性に歩き廻つたものです。家内の亡骸には、かたの如く衣裳をつけて、卓の上に安置しました——そら、この部屋なのです。やがて司祭が來、番僧が來て、歌つたり、祈つたり、香を焚いたりし始めました。私

は額を床につけて禮拜しましたが、涙ひとしづく出ればこそ、心はまるで化石したやうだし、頭もそれと同じなのです——私は全身が妙に重くなつた様な気がしました。かうして、先づ一日過ぎました。本當にはなさらないでせうが、その晩はすやくと眠つたくらゐです。翌朝、家内の傍へ行つて見ると——折から夏のこと、太陽が死體の頭から足の先きまで一杯に照りつけて、眩しいくらゐ。ふと見ると……（こゝでラヂーロフは思はず身慄ひした。）あなた、どうでせう？ 片方の目がよく閉いでゐなかつたので、その眼玉の上を蠅が歩いてゐるぢやありませんか……私はそのまゝ棒倒しに倒れてしまひました。それから正氣づくが早い、いきなり泣き出して、止め度なく泣き續けました……」

ラヂーロフは口を噤んだ。私は先づ彼の顔を眺め、續いてオリガを見やつた……その時の彼女の表情は、死ぬまで忘れることが出来ないであらう。（當時の露西亞では義兄義妹間の結婚は宗教と法律で禁じられてゐたのである）老母は編物を膝に置いて、手提からハンケチを取り出し、そつと涙の露を押し拭つた。フォードル・ミヘーイッチは、急に立ち上がつて、例のヴァイオリンを引つ擱むと、しや嘎れた奇妙な聲で歌を唄ひ出した。大方わたしたちの氣を浮き立たせようといふつもりなのだらう。けれど、一同は先づその一聲を聞くなり、思はずびくりと身慄ひした。ラヂーロフは静かにしてくれと頼んだ。「しかし、」とラヂーロフは云つた。「すんだ事はすんだ事ですからね、今さら取り返しがつくわけぢやありません。それに、なんといつても……この世のことは、すべてだん／＼良くなつて行くものですよ、たしかヴォルテールだつたかが云つたやうにね。」と彼は急いで附け足した。「さうです。」と私は相槌を打つた。「勿論ですとも。その上どんな不仕合はせだつて、我慢しきれないといふことはないし、血路を開き得ないといふ窮地は、決してないものですよ。」

「さうお思ひになりますか？」とラヂーロフは問ひ返した。「いや、或ひはお説の通りかも知れませんが。今でも覺えてゐますが、私は土耳其戰爭に従軍したとき、半死半生の有様で病院に暫らく居りました。創傷熱にやられたのです。そりやもう、設備は完全だとは云へませんでした——何しろ戰場のことですからね——それでも收容されただけがまだしもなんで！ ところが、またぞろ病傷者が擔ぎこまれました。——何處へ臥かしたものだらうと、軍醫は彼方此方と走り廻つたが——場所が見つからない。やがてそのうちに、私の傍へやつて来て、看護手に、『生きとるか？』と訊ねる。するとこちらは『今朝は生きて居りました。』と答へるのです。軍醫は屈みこんで、耳を澄ますと、私がまだ呼吸をしてゐるものだから、奴さんたうとう我慢しきれなくなつて、『いや、人間つて何といふ始末の悪い代物だ。全く今にもまゐりさうになつてゐて、必ず死ぬに決まつてゐるくせに、いつまでもひく／＼しながら引つぱつて、たゞ場所塞ぎをして他の者の邪魔になるばかりだ。』と、かういふ云ひ草なんです。そこで、私は腹の中で、『ミハイル・ミハイロイチ、お前もいよく駄目らしいぞ……』と自分で自分に云ひ聞かしたものです。ところがこんな達者になつて、御覽の通り、今でも息災にして居ります。だから、つまりあなたの仰しやるのが本當なんですよ。」

「いづれにしても、私の云つたことは本當ですとも。」と私は答へた。「よしんば、あなたが死んでしまはれたにもせよ、とにかく、それは一方の血路を開いたわけですからね。」

「勿論ですとも、勿論ですとも。」拳固でどんと卓を強く叩きながら、彼はかう云ひ足した。「たゞ一思ひにやりさへすればいゝんです……窮地なんて、そんな事は無意味です……何もぐ／＼引つぱつてゐる事はない……」

オリガは、つと席を立つて、庭へ出てしまった。
 「おいフェーチャーつ踊れ！」とラヂーロフは叫んだ。
 フェーチャーは躍り上がつて、見世物熊の周りをはやして歩く例の『山羊』と稱する道化の様に、乙に氣取つた一種特別な足取りで、部屋の中をぐる／＼廻りながら、『わたしの家の門ぎはで』を唄ひ出した……

車寄せの邊りで、輕快な馬車の轍の音が聞こえたと思ふと、間もなく部屋の中へ背の高い、肩巾の廣い、がつちりした老人が入つて來た。郷士のオフシャニコフである……ところが、オフシャニコフはなか／＼風變はりな面白い人物なので、讀者のお許しを蒙つて、この男の話は改めて次の章へ譲ることにしよう。今はたゞ、私事に渡るけれど、その翌日エルモライと一緒に、夜の引き明けに狩りに出かけ、そのまゝ獵場から家へ歸つたと、これだけ附け加へて置かう。――一週間経つて後、又ラヂーロフの家へ立ち寄つたところ、主人もオリガも不在であつた。二週間許り過ぎた時、彼が突然姿を晦ましたといふ噂を聞いた。老母を打ち棄て、例の義妹と手に手をとつて、何處かへ行つてしまつたとのことである。府内一圓に大騒ぎが始つて、皆この出來事を取り沙汰した。私はそのとき初めて、ラヂーロフが身の上話をしてゐたときのオリガの表情を、はつきりと間違ひなく覺つたのである。そのとき彼女の顔に溢れてゐたのは、たゞの同情ばかりではなくて、嫉妬の炎も燃えてゐたのである。

いよ／＼田舎を引き上げようといふ前に、私はラヂーロフの老母を見舞つた。彼女は客間に坐つて、フォードル・ミヘーイッチと、子供らしい歌留多の勝負を闘はしてゐた。
 「御子息から何か便りがありますか？」到頭、私はから切り出した。

老母はさめざめと泣き出した。で、私はもうそれ以上、ラヂーロフのことを根掘り葉掘りしなかつた。

郷士のオフシャニコフ

親愛なる讀者諸君、ひとつかういふ男を想像して見て頂きたい。年の頃は七十ばかり、肥つて背が高く、顔は幾らかクルイロフ(ロシアの有名な寓話作家)の面差しに似通ひ、長く垂れかゝつた眉毛の下に、澄んだ伶俐さうな眼を輝かし、物々しい態度をして、話し振りには落ちつきがあり、足取りはゆつたりしてゐる。これが前にちよつと紹介したオフシャニコフである。何時も袖の長い、ゆつたりした青い上着を着て、釦を上から下まできちんとかけ、瑠璃色の絹ハンカチを頸に巻き、てらに磨き上げた房つきの長靴を穿いてゐて、全體の様子が裕福な商人然としてゐた。手が眞つ白で、ふくふくとして、如何にも綺麗であつた。よく話の間に、上着の釦に手をかける癖があつた。オフシャニコフはその物々しい、どつしり構へた態度と云ひ、物分かりのよさと云ひ、不精などところと云ひ、一本氣で強情なところと云ひ、すべてがピョートル大帝前期の露西亞貴族を想ひ起こさせるのであつた………無宮廷服を着たらさぞ似合ふだらうと思はれた。彼は舊時代の最後の人の一人であつた。近隣の人たちは、みんな彼を一方ならず尊敬して、その知遇を名譽と心得てゐた。同じやうな郷士仲間兄弟は、彼を殆ど神様のやうに崇めて、道で出會つても、遠くの方から帽子を脱ぐといふ有様で、彼を自慢の種にしてゐた。おしなべて云ふと、この地方では今に至るまで、こんな風の郷士と百姓との區別はつけ難いのである。世帯向きも百姓よりまじとは云へないくらゐで、仔牛は可愛さうな位ちつぽけだし、馬は生きてゐるとは名ばかりで、馬具も繩で作つたのを使つてゐる。オフシャニコフは別に金持ちといふ評判はとつてゐなかつたけれ

ど、しかしこの一般原則の例外になつてゐた。夫婦二人きりで、居心地のいゝ小ざつぱりした家に住み、召使ひも小人敷にして、露西亞風の服装をさせ、働き手と稱してゐた。この召使ひ連中が、主人の畑仕事をするのであつた。彼自身も敢へて貴族ぶりもしなければ、地主顔もしなかつた。つまり、所謂一身の程を忘れる「やうな事がなく、他家へ行つても直ぐに二つ返事で椅子に腰をかけようとせず、新しい客が入つて來ると、必ず一應は席を立つ。けれどそれが如何にも品位のある態度で、愛想のいゝ中にも堂々たる感じを帯びてゐるので、客の方でも我れ知らず慇懃な會釋をするのであつた。オフシャニコフは昔ながらのしきたりを守つてゐたけれど、何も迷信からではなく（彼は可成り自由な精神を持つてゐたので）、たゞ癖になつてゐるからである。たとへば、彈條ばねつきばねの馬車を乗り心地が悪いと云つて嫌ひ、競走用の馬車か、でなければ皮のクッションをつけた綺麗な小馬車に乗つて、自分で栗毛の逸物を馱してゐた（彼は栗毛馬しか飼はなかつた）。馱者は青っぽい百姓外套を着て、革の帯をしめ、羊の毛皮で作つた低い帽子を被り、頭をお河童に刈り込んで、赤い頬つべたをした若者であつたが、これが恭々しげに主人と並らんで控へてゐるのである。オフシャニコフは、いつも食事の後でひと寝入りし、土曜日ごとに湯屋へ出かけて行き、たゞ宗教方面の書物ばかり讀んで（本を讀むとき、丸い銀縁眼鏡をさも鹿爪らしく鼻の上のせる）、そして、いつも早寝の早起きであつた。けれども、鬚鬚はすつかり剃り落として、髪を獨逸風に刈り込んでゐた。客が來ると、喜んで愛想よく迎へたが、悪丁寧にお辭儀をしたり、あたふたと騒ぎ立てたり、それ乾物、それ漬物と、ありつたけのもので御馳走したりするやうなことはなかつた。『おい！』彼は立たうともしないで、軽くつれあひの方へ顔を向けながら、悠悠たる調子でかういふのであつた。『お客さま方に何かお美味いものを持つて來なさい。』穀類は

神様の授かりものと稱して、他人に賣り拂ふのを罪だと信じ切つてゐた。で、一八四〇年に、地方一圓の大飢饉で、麥の相場が恐ろしいほど跳ね上がった時、彼は近在の地主や百姓達に、自分の貯蔵をすつかり分配してやつたので、翌年みんなは感謝の言葉と共に借りた穀類を現物で拂ひ戻したものである。オフシャニコフのところにはよく近在や隣りの者が分別を借りに來たり、仲裁を頼みに駆けつたりした。そして、いつも彼の裁きに服従し、その忠告を用ひるのであつた。彼の骨折りで、はつきりと境界定めをした者も少くなかつた。けれども二三ど女地主連と喧嘩をしてからといふもの、御婦人たちの仲裁をするのは一切お断りだ、と云ひ出した。彼はばたばた急いだり、そはくしたりするのが大嫌ひで、女どものお喋りや「取越し苦勞」が我慢できなかつたのである。或る時、どうした事か、彼の家が火事になりかゝつたことがある。雇ひ男が慌てふためいて『火事だ！ 火事だ！』と嘯鳴りながら、主人の部屋へ駆け込んだ時、オフシャニコフは『ふむ、一體なにを嘯鳴り立てるんだ？』と落ちつき拂つて云つた。『俺の帽子と杖を寄越しなさい。』彼は自分で馬を乗り馴らすのが好きであつた。ある時、氣の荒い牡馬が彼を乗せたまゝ眞つしぐらに坂道を谷へむけて駆け出した。『これ、やめなさい、やめなさい、若駒つて仕様のないものだ——生命が無くなるぞよ。』とオフシャニコフは言葉やさしく宥めたが、あわやといふ間に、馬車は後ろに乗つてゐた小童や、馬もろともに、谷へ雪崩れ落ちてしまつた。仕合はせと谷の底は砂溜まりになつてゐたので、誰も怪我をした者はなく、たゞ馬が脚の關節を外したばかりである。『それ、見るがいゝ。』地べたから身を起こしながら、オフシャニコフは落ちつき拂つた調子で言葉をつけた。『わしの云はんこつちやない。』彼は配偶も自分にぴつたりしたのを貰ひ當てた。タチャーナ・イリイニチナ・オフシャニコフは、背の高い、物々しい様子をした、口數

の少い女で、何時も肉桂色の絹の布で頭を包んでゐた。彼女は何となく冷たい感じがしたけれど、それかといつて、誰もやかまし過ぎると云つてとかくの苦情を唱へる者もなかつた。それどころかおつ母さんとか、恩人とか云つて慕ふ貧乏人も少くなかつた。輪郭の整つた顔かたち、大きな黒い眼、薄い唇などは、かつて評判の高かつた彼女の美貌を、いまだに物語つてゐるのであつた。オフシャニコフには子供がなかつた。

讀者の既に承知して居られる通り、私はこの男とラヂーロフの家で知り合ひになつたのであるが、それから二日経つて、訪問に行つて見た。彼は折よく在宅であつた。大きな皮の肘椅子に腰をかけて、殉教者傳を讀んでゐた。灰色をした猫がその肩の上で咽喉をごろ／＼鳴らしてゐた。彼はいつもの癖で、愛想はいゝけれど、さも重々しい態度で私を迎へた。二人は心置きなく話し始めた。

「どうか、ルカー・ペトローギッチ、腹藏のないところを聞かして下さい。」と私は何かの話の序にかう云つた。「以前あなたなどの若かつた時の方が、今より世の中はよかつたでせうね？」
「そりや、中には全く今よりいゝこともありましたがよ。」とオフシャニコフは答へた。「世の中がしづかで、氣樂なことが多かつたですよ、全く……が、それにしても、今の方がやつぱりよろしいですな。これで孫子の代となれば、もつとよくなるでせうよ、きつとね。」

「ところが、わたしはね、ルカー・ペトローギッチ、あなたが昔のことを自慢なさるだらうと思つてましたよ。」

「いや、昔のことは取り立てて自慢するがものはありません。まあ、早い話が、あなたはいま現に、亡くなられたお祖父さまと同じやうに、れつきとした地主さままでいらつしやるけれど、そ

れでも、もうあれだけの威勢はお持てになれませんよ！それに、あなたご自身からして、まるでお人柄が別ですからね。私たちは今でもほかの地主たちに壓されてをりますが、それはどうも致し方のないことらしいございます。辛抱してあるうちに、何とかものにならうといふ道理でしてな。いや、何にしても、私が若い時分にさんざん見て来たやうなことは、今どきもう二度と見るわけに参りませんよ。」

「例へば、どんなことでせう？」

「それでは物の譬に、またお祖父さまのことをお話しませう。實に豪いご威勢の方でしてな！われわれ仲間随分いぢめられたものですよ。いづれご承知でもありませんが——いや、ご自分の地所をお知りにならんといふわけはない——チェプルーギノからマリニノへかけて、楔形に食ひ込んである地所ですな……今、お宅では燕麥を作つていらつしやいますか……實は、あの土地は私どものものなんで——そつくり私どもの持ち地だつたのを、お祖父さまが取り上げておしまひになつたのですよ。ある時、馬に乗つてお出かけになりますと、あの地所を手でさして、これは俺の持ち地だ、と仰しやつて、そのまゝ自分のものにしておしまひになりました。亡くなつた親父は（なにとぞ天國に安らはせ給へ！）やはり癩癖の強いたちで、正直一途の人間でしたから、我慢しきれないで——それに誰にしたつて、みす／＼自分の財産を取られて嬉しいものはありませんでな！——裁判所へ訴訟沙汰にしたのです。それをやつたのは親父ひとりで、ほかの連中は後難を恐れて、尻込みしてしまつた譯です。すると、『ピョートル・オフシャニコフがあなたを訴へた。地面をお取り上げになつたと云つて訴訟を起こした』……とお祖父さまに注進したものがあつた……お祖父さまは早速わたくしどもの家へ、獵師のバウーシユに手下のものをつけ

てお寄越しになつたのです……バウーシユはいきなり親父を掴まへて、ご領地の方へ引き立てて参りました。私はその頃、ほんの餓鬼でしたが、跣足で親父の後を追つたものです。ところが、どうでせう？……親父はお邸の傍へ引いて行かれて、窓の下で打ち打撃されるぢやありませんか。お祖父さまはバルコンに立つて、それをご見物です。お祖母さまもやはり窓の下に腰をかけた、眺めていらつしやる。親父は、『奥さま、マリヤ・ヴシーリエヴナ、どうぞお取りなしを願ひます、せめてあなただけでも、私を可哀さうと思つて下さいまし！』と喚くのですが、お祖母さまはたゞ首をさし伸べたまゝ、見物に餘念がないのです。かうして親父はあの地所から手を引くといふ約束をさせられて、無事に釋して貰つたお禮まで云はされたものですよ。からいふ風で、土地はそのまゝお宅のものになつてしまひました。まあひとつ、お宅の百姓どもに、あの地所をなんと云ふか、訊いてご覧なさいまし。『棍棒が原』と云つてをりますが、つまり棍棒で殴り取つたといふわけなんです。ま、かういつたやうな次第で、われ／＼小前の連中はあんまり昔の風習を、懐かしがるわけに行かないんです。」

私はオフシャニコフに何と答へたらいいか分からず、その顔を見る氣力さへなかつた。

「かと思ふと、その時分もう一人近所にコモフといふ地主がをりました——スチェパン・ニクトポリオーヌイチといふ呼び名でした。これがすつかり親父を悩ましぬいたもので、あの手でなければこの手といふやり方だね。恐ろしい飲んでしてな、人に飲ませるのが好きでした。酔ひが廻つて来ると、佛蘭西語で『善哉』とか何とか云ひながら、ぺろ／＼と唇を舐め廻す——いやはや、お話にならぬ體たらくなんです！近所の地主連のところへ、どうかおいでを願ひたいと思ひを出し廻るので、三頭立トイカがいつもちやんと用意してある。もし招待に應じなければ、すぐに自

分で押しかけて来るのです……：實に變はつた男でしてな！『素面』のときは大して法螺を吹くわけでもないけれど、一杯ひつかけるとさつそく、やれペテルブルグのフォンタンカに家が三軒ある、一軒は煙突のついた赤い家で、いま一軒は二本煙突の黄色い家、もう一軒は煙突なしの青い家だとか、やれ、息子が三人あつて（そのくせご當人、結婚した事もないので）、一人は歩兵で、一人は騎兵に勤め、あとの一人は自分で一本立ちになつてゐるとか、そんな話をはじめののです……：それから、云ふことがいゝでせう、三人の息子がそれ／＼一軒づつの家に陣取つて、長男のところへは海軍の將官連がぞろ／＼押しかけて来るし、次男のところへは陸軍の將官連がわんさと訪ねて来るし、三男のところへは英國人が始終やつてくる、とかうなんです！ さうかうする中に立ちあがつて、『長男の健康を祝して乾杯しよう、あれは一番親孝行なやつでな！』と云つて、おい／＼泣き出す。誰にもせよ、いやだなどと云ふ者があつたら、それこそ大變、『射ち殺してくれ、埋葬もさすことぢやないだ！』と呶鳴る。かと思ふと、今度は跳り上がつて、『さあ、踊れ、皆の衆、自分も楽しみ、俺も娛しませて貰はう！』さあ、かうなると、踊らないわけに行かない、たとへ死んでも踊らなけりやなりません。百姓の娘どもはそれこそくた／＼になるほど、苛め抜かれるのです。よく懸け値なしに、朝までコーラスを歌ひ通して、一ばん高い聲を出した者にはご褒美が出る。みんなが疲れて来ると、兩手で頭をかゝへて、『あゝ、俺のやうに頼りない身の上はない、こんな可哀さうな人間をみんなが構つてくれん！』と掻き口説く。すると早速、馬丁達が娘どもに氣つけを食らはせる、といふ譯です。厄介なことに、うちの親父がその男の氣に入りましたな、なんとも始末がつかないのですよ！ 親父はお蔭で、危く棺の中へ突つ込まれないばかりの目にあひました。全く冗談でなしに、殺されてしまつたかも知れないのですが、有

難いことに、當人の方がころりと往つてくれました。酔つぱらつて鳩小舎から墜つこちたので……：まあ、こんな風の連中ばかりでしたよ、以前この近所にゐた地主連は！

「ずるぶん世の中が變はつたものですね！」と私は云つた。

「さうですとも、さうですとも。」とオフシャニコフは合槌を打つた。「が、さうはいふものの、昔の貴族たちは今よりずつと派手な暮らしをしてつたものですよ。都會の大貴族のことなどは、改めて云ふがものはありません。私もモスクワで、さういふ人たちを飽き飽きするほど見ましたからね。今ぢやあちらでも、あゝいふ人たちが絶えてしまつたといふ噂ですな。」

「モスクワへおいでになつたことがあるのですか？」

「ありますよ、昔、ずるぶん昔の話です。私は今年とつて七十三ですが、モスクワへ行つたのは、十六の年でしたからな。」

オフシャニコフは溜め息をついた。

「あちらでどんな人にお會ひになりました？」

「いろんな大頭株を見ましたよ——また誰でも見られましたのでな。みんな開けつびろげに、人が見て驚くほど派手な暮らしをしてをりましたよ。たゞ亡くなられたアレクセイ・グリゴリエフ・ピッチ・オルロフ・チェスマンスキイ伯爵だけには、誰も敵ふものがありませんでした。アレクセイ・グリゴリエフ・ピッチは私もよくお見かけ申しました。伯父が侍僕頭をしてをりましたのでな。伯爵はカルーガ門に近いシャーポロフカにお邸を構へてをられました、あれこそ、本當の大貴族でしたよ！ あの威風あたりを拂ふご様子、あの物柔らかなお愛想のいゝ態度は、筆にも言葉にも盡くせん程でした。堂々たるお身丈だけでも大したもので、力に充ちたお眼もと！ な

んとも云へませんでしたな。お人がらを知らんうちには、とても傍に寄れないやうな氣がするほどの方で、——恐ろしくつて、氣おくれがするくらゐなのです。ところが、一旦お傍へ寄つてしまふと——まるでお日様に暖められてゐるやうな氣持ちで、すっかり浮き浮きしてまゐります。どんな人間でも必ずお身近へお寄せになりましてな、何でもお好きでいらつしやいました。競馬なぞでもご自分でおのりになつて、みんなと競争なさるのです。決して一息に抜いてしまつて、相手に恥ぢを搔かしたり、氣落ちさせたりするやうなことをなさらない。たゞいよ／＼おしまひといふ頃に追ひ越しなさるのですが、まことにお愛想がよくつて、相手を慰めたり、馬を賞めたりなさるので。例の宙返りをする鳩なども、飛び切り上等のを飼つてをられましたな。よく庭へお出ましになつて、肘椅子に腰をお下ろしになると、鳩を飛ばしてみろとお云ひつけになる。まはりの屋根には、家來がたが鐵砲を構へて、大鷹が襲つて來るのを防いでゐる。伯爵の足もとに、銀の盥に水を入れたのを据ゑて置くとお前は水に映る鳩の影をご覽になるといふ段取りです。貧乏人や乞食など、何百人といつて伯爵家のお臺所で食ひ扶持にありついてをりましたつけ……まあ、どれだけのお金が伯爵の手を通つて流れて出たことやら！ それで、一旦お腹立ちとなると——まるで雷さまでも落ちたやうで、それは／＼恐ろしいことでしたが、泣く程のことはない、見てる間に、もうにこ／＼顔になつていらつしやる。さて、宴會の催しとなると——それこそモスクワ中のものを集めて大盤ぶるまひですよ……しかも、大した智恵者でしてな！ 土耳古を征伐したのもこの方でした。相撲もやはりお好きでして、トゥーラとか、ハリコフとか、タムボフとか、所々方々から力士をお呼び寄せになる。御前様の方がお勝ちになつても、褒美が出るのですが、もし御前様を負かすものであつたら、それこそ大變なお引き出物で、おまけに唇へ接吻

までなさる……それから、これも私がモスクワに滞在してゐるうちにあつたことですが、それまで露西亞で例のないやうな獵をお催しになりました。全國の狩獵家をありたけ残らずお招きになつて、日取りもちやんとお決めになり、三箇月の猶豫をお置きになりました。やがて、ぞろぞろと集まつて來たわ、來たわ。みんな犬や獵師を引きつれてゐるので、まるで軍隊が乗り込んだ様な騒ぎでしたよ、全く軍隊ですな！ 初めまづ然るべく酒もりがあつて、さてそれから、見附け外へ繰り出しました。その總勢まるで雲霞の如き有様でしたよ！ ところで、どうでせう……

あなたのお祖父さまの犬が、一番がけの功名を立てましたぜ。」

「ミロギードカ（美貌）ぢやありませんでしたか？」と私は訊ねた。

「そのミロギードカです、ミロギードカです……そこで伯爵が、お祖父さまを掴まへて、『どうか君の犬を賣つてくれないか、代は何ほどでも進呈するから』とご執心になつたものです。すると、『いけません、伯爵、私は商人ぢやございませんから、不用の檻籠一つだつて賣るといふ譯には參りません。尤も、意地づくなら、女房を譲るくらゐの覺悟はありますけれど、ミロギードカだけは眞つ平です……あれを進呈するくらゐなら、いつそ自身が虜になつた方がましな程です。』といふご返事。するとアレクセイ・グリゴリーエギツチは大變感心なすつて、『いや氣に入つたと仰せになりました。お祖父さまはミロギードカを馬車に乗せてお連れ歸りになりましたが、その犬が死んだ時には樂隊に吹奏させて、お庭に埋葬なすつたもので——たかが牝犬一匹、このやうにしてお葬ひになつて、その上に立派な銘を彫つた碑をお建てになりましたつけ。』

「そらご覽なさい、アレクセイ・グリゴリーエギツチなどはその通り、誰も苛めはなさらなかつたぢやありませんか。」と私は口を入れた。

「さやう、それはいつもさうしたもので、浅いところを泳いでゐるやうな雑魚に限つて、空威張りをしたがるものですて。」

「お話のバウーシュといふのは、一體どんな男だつたのです？」暫らく無言の後に、私はかう訊ねた。

「これは又、どうしたことです、ミロギードカのことをお聞き及びで、バウーシュのことをご存じないとは？…あれはお祖父さまの獵師頭で、獵犬の仕込み係りでしたよ。お祖父さまはミロギードカに劣らない程、この男をご寵愛になりました。向かう見ずの男でしたな、お祖父さまのお云ひつけでし、どんなことでも即座にやつてのけて、火の中でも水の中でも飛び込まうといふたちでしたよ…；そいつが犬を咬しかけると—それこそ森の中ぢゆうが、獵犬どもの唸り聲で鳴りどよもすといふ勢ひ。ところが、一旦やつが強情を張り出すと、もう馬から下りて了つて、ごろりと横になる…；かうなると、犬どもはやつの聲が聞こえないものだから—もう萬事休す！ みす／＼分かつてゐる獸の足跡も打つちやらかして、どんな餌で釣つても、獲物を追はうとしない。さあ、お祖父さまは腹をお立てになるのならないの！ 『あののらくら者を、縊り首にしてやらなけりや、生きてゐる甲斐がない！』あの極道めの體を裏返しにくるりと引ん割いてやる！ 足を尻から通して喉へ引き出してくれる！』でも、とゞのつまりは、バウーシュのところへご家來をおやりになつて、一たい何が氣に入らないのか、どうして犬を咬しかけないのか、お訊ねになる。すると、バウーシュは大抵かういふ場合に酒を註文して一杯ひつかけると、このこ起き上がつて、また景氣よく掛け聲を始めるといふ寸法で。」

「あなたもやはり獵はお好きのやうですね、ルカー・ペトロローギッチ？」

「好きなことは好きですけれど…；全く—したか今はやりません。今ではもう私などの出幕は濟んでしまひましたでな—ところが、若い頃は…；しかしお察しでもありませんが、どうも具合が悪いですな、何しろ身分違ひなので、われ／＼風情が貴族がたの眞似をするわけにはゆきませんでな。成る程、我々の仲間でも、飲んだくれの能なしのくせに、大地主連と交際ふやうなものも居りますが…；さて、それが何の楽しみになりませうぞ！…；唯、自分の恥ぢをさらすばかりですよ。狩り仲間に入つても、やくざな跛馬を當てがはれて、のべつ帽子を地べたへ跳ね飛ばされる、馬を打つやうな振りをして、しよつちゆう鞭の先きを食らはされる。そして當人はのべつえへらく／＼と笑ひながら、みんなの笑ひ草になつてゐるのですからな。いや、全くのところ、身分が低ければ低いほどわが身の態度も慎しまんと、反つて恥ぢをかばかりですよ。」

「さやう、」とオフシャニコフは溜め息つく／＼言葉を續けた。「私がこの世を渡つて來てからも、ずるぶん世間の様子が變はつてしまつて、すつかり別の時世になりましたよ。とり分け、貴方がたの變はりやうと云つたら、全く大變なものですわい。小地主連はお役所務めなんかして、ぢつと自分の地所に落ちついてゐるものは少いし、少し大きいところになると、まるでもう昔の面影はありやしません。私はこの連中、つまり大地主連を、境界定めの時につくづくと眺めて見ましたが、正直なお話が、その變はりやうを見て、芯から嬉しくなつたものです。態度が慇懃で、萬事鄭重なものでな。たゞ不思議に思つたのは、いろんな學問を納めて、話しぶりなど實に調子がよくて、聞いてゐても有難いくらゐだが、さて、本當の仕事となると、空つきしお先き眞つ暗で、自分の得になることさへ分らないのですからな。現在、自分が百姓から取り立ててやつた番頭づれに、勝手放題な事をされて、いゝおもちやになつてゐる。現に御存じかもしれませんが、アレ

クサンドル・ウラヂーミロキッチ・コロリヨフなども、どこから見たって立派な貴族でせう？
押し出しも好いし、金は持つてゐるし、大學で勉強もしたらしいし、外國にも行つたことがある。辯舌も爽やかで、しかも威張つたところがなく、私どもにも一々握手をして下さる。あなたも御存じでせう？：：：な、そこで一つ聞いて頂きますが、先週、私達は仲人のニキーフォル・イリイチに招かれて、ベレゾフカへ集まつたことがあります。そこで仲人のニキーフォル・イリイチが云ふことには、『皆さん、地境はちやんと決めてしまはなければなりません。よその區ではみんなちやんと決まりをつけてゐるのに當區だけが後れてゐるのは醜態と云ふものです。さつそく仕事にかゝらうではありませんか。』かういふわけで、仕事にとりかゝつて見ると、例の如く小田原評定や口論が始まつて、私どもの代理人などは打つ毀しまで始めるといふ始末です。然し、一番に亂暴をおつはじめたのはポルフィーリイ・オブチニコフなんで：：：あの男、なんだつてあゝ暴れるんでせう？：：：自分は猫の額ほどの地面も持つてをらんくせに、兄貴の代はりに差し出がましい口を利くのですからな。『駄目だ！ お前らなんぞの手に乗つてたまるものか！』どつこい、少しばかり相手が違ふぞ！ 圖面を寄越せ！ 測量師を此處へ呼んで來い、あの圖々しいべてん師を呼びつけて貰はう！』と呶鳴り出す。『まあ一體お前さん、どうして欲しいと云ふのだね？』へん人を馬鹿扱ひにして、見損なつちやいけない！ わしが直ぐこの場で、實はかうかういふ風にして貰ひたいのだと、いきなりお前さん方にぶちまけるとでも思つてゐるのか？
：：：駄目だよ、とにかく圖面をこつちへ借して貰はう——これなんだよ！』と云ひながら、拳固で圖面の上をどん／＼敲くといふ始末。マルファ・ドミートリエヴナなどは、手ひどい恥ぢをかかされました。そこで『どうしてあなたはわたしの評判を落とすやうな眞似をなさるんです？』

と喚き出すと、『わしはお前さんの評判など、うちの栗毛馬にだつて眞つぴら御免蒙りたい位だ。』とやり返す。やつとのことで、赤葡萄酒を飲ませて酔ひつぶしてしまひましたが、こつちを納めたかと思ふと、今度は他の奴等がごて始めるのです。例のアレクサンドル・ウラヂーミロキッチ・コロリヨフ先生は隅つこにちつと坐り込んだまゝ、ステッキの握りを噛みながら、しきりに頭を振つてござる。私は妙に氣がさして、終ひにはその場を逃げ出したいくらい、やり切れなくなつて來ました。一體この人は我々の事をどう考へてゐるのだらう？ と思ひました。見ると、不意にアレクサンドル・ウラヂーミロキッチは何か一言ありさうな素振りをしてゐる。仲人は慌て出して、『皆さん、皆さん、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチがお話をなさるさうです。』と云ふと、さすが貴族がたは感心なもので、直ぐにひつそりと靜まつてしまひました。さて、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチが口を切つて申されますには、我々は何のために集まつたか、肝心の目的を忘れてゐる、境界定めは云ふまでもなく、地主連の爲になることには相違ないけれども、打ち割つた話、何の爲にこんな事が始まつたかと云ふと——他でもない、百姓に樂をさせてやらう、働きいゝやうにしてやらう、義務労働に便宜を計つてやらう、といふのが目的だつたのだ。今のやうな有様では、百姓たちは自分の地所さへ知らないので、五露里も先きへ野良仕事に出掛けるやうな事も珍らしくない。——これちや百姓を責めるわけにいかんぢやないか。それからアレクサンドル・ウラヂーミロキッチはかうも云はれました。地主として農民の幸福を心配してやらないのは罪な事だし、第一、とつくりと考へてみれば、百姓の利益も我々地主の利益も、結局は一つもので、先方がよければこつちもよし、先方が困ればこつちも困る：：：だから、些細なことを楯にとつて、みんなが折り合はないのは、罪なことでもあるし、無分別なことと云はな

ければならない……といった按配で、どこまでも際限なしにまくし立てる……しかも、その辯舌の達者なこと！　まるで腹の底まで掻き廻されるやうな気がしましたよ……貴族連中もみんな情氣返つてしまふし、かういふ私なども、全くの話が、すんでの事で涙をこぼさないばかり。本當のところ、昔の本にだつて、あゝいふ立派な話は滅多に載つてをりません……で、結局どうなつたと、お思ひになりますか？　その演説をした肝心の御當人が、四町歩の苔沼を譲らうとしないし、賣るのも厭だと来るぢやありませんか。しかも、その云ひ草がかうなんです。『私はあの沼を自分の領地の百姓に潤し上げさせて、そこに何から何まで設備の整つた羅紗工場を建てるんだ。あの地所はもうちやんと選定してあるので、それについては私にも自分相當の考へがあるから……』とかうなんです。それも筋道の通つた事ならまだしも、聞いてみれば何の事だ……アレクサンドル・ウラヂーミロキツチの隣り村の地主でアントン・カラシコフといふ人がけちをして、コロリヨフ家の番頭に百ルーブリのつけ届けをしなかつたが因なので。かういつた次第で、私たちは何一つ仕出來さないで、そのまゝ散會してしまひました。アレクサンドル・ウラヂーミロキツチは今でもやつぱり自分の云ひ分が本當だと思つて、始終羅紗工場の話をして居りますが、沼を潤す方はまだ仕事にかゝつてをりませんよ。』

「ところで、その人は自分の領地内では、どんな遣り方をしてゐますか？」

「後から後からと新しい事ばかり始めてをりますよ。百姓どもはとやかく申しますが、なに、あんな連中の云ふことに、耳を藉す必要はありません。アレクサンドル・ウラヂーミロキツチの遣り方が本當ですよ。』

「それはどうしたことです、ルカー・ペトロキツチ？　あなたは昔風を守つていらつしやるもの

と思ひましたが？」

「私は話が別です。私は貴族でもなければ、地主でもありませんでな。私の世帯なぞお話になりませんよ……それに、私は今よりほかの遣り方が出來ないので。たゞ、道理と掟を踏み外さないやうに心がけてをりますが、それだけのことで、出來れば結構ですよ！　若い地主たちは昔風をお嫌ひなさるが、私はそれを結構だと思つてをります……そろ／＼頭を働かしてもいゝ頃ですからな。たゞ困つたことには、若い人たちは恐ろしく理窟ばつたことが好きで、百姓をまるで人形同様に扱つて、さんざん捻くり廻した擧句、こはしておつぱり出すのが落ちなんですからな。で、百姓あがりの番頭か、でなければ獨逸生まれの支配人が、元々通り百姓どもを締め上げるといふ段取りです。今の若い人の中であゝの一人でも、『それ、領地の經營はかういふ風にやるものだ！』と云つてお手本を見せてくれる人がありますか……これは結局どうなるんでせう？　一體わたしは新しい時勢といふものを見ないで、このまゝ死んでしまふのでせうか……警へにもさう云ふぢやありませんか——古いものは死に絶えたが、新しいものはまだ生まれなかつて！」

私はオフシャニコフに何と返事をしていゝか、分らなかつた。彼はあたりを見廻して、私の方へびつたり寄り添ひながら、聲を潜めて話し續けた。

「ときに、プシーライ・ニコライイチ・リュボズヴォーノフの話をお聞きになりましたか？」

「いや、聞きません。」

「實に奇體なことで、一體どういふ譯か、よく納得のゆくやうに説明して頂きたいもので。ほとほと合點がゆきかねます。あの人の領地内の百姓が話して聞かせたのですが、その云ふことが

腑に落ちかねます。ご承知の通りまだ若い人で、近ごろおふくろさんが亡くなられたために、遺産相續をなさつたばかりです。これが自分の領地へやつて來たので、百姓達は新しい且那を拜まうと思つてぞろ／＼集まつて來た。やがてヴシーリイ・ニコライイチがお出ましになる。見ると百姓どもは驚いた！——且那様がまるで馭者のやうな綿天鵞絨のズボン（ついで）を着いて、縁飾りのある長靴を穿いていらつしやる。それに赤い襦袢（じゆばん）を着込んで、その上からこれもやはり馭者風俗の長上衣といふ扮装、鬚鬚は長く伸ばして、頭には奇妙きてれつなしやつぽを被つてるが、その顔がまた挺妙來で酔つぱらつてるのかと思へば、さうでもない。が、とかく正氣とは見えないのです。『ご機嫌よう、皆の衆！』と聲がかゝる。『お前たちも變はりはないかね。』百姓たちは腰を二重に折つてお辭儀をするが、みんなだんまりなのです。つまり、氣おくれがしたんですな。且那の方もどうやらびく／＼ものらしい。やがて一場の演説が始まる。『私は露西亞人だ。またお前たちも露西亞人だ。私は露西亞のものなら何でも好きだ……私は露西亞魂を持つてゐるし、私の體の中を流れてゐる血も露西亞のものだ……』などと云つてる中に、突然かう號令がかゝつたものです。『さあ、皆の衆、一つ露西亞の民謡をうたつてくれんか！』百姓どもは、足の筋が引つ吊つて、頭がぼろ／＼となつてしまつた。一人だけ度胸のいゝのが、何やら歌ひ出したけれど、すぐに地べたに蹲み込んで、ほかの連中の蔭に隠れてしまつた……そこで、どうも不思議でたまらないのは、ほかでもない。この界限には向かう見ずな亂暴者で、札つきの道樂者といつたやうな地主も偶々をりました。全く馭者と間違ひさうな服装をして、自分で露西亞風の踊りををどつたり、ギターを弾いたり、歌をうたつたり、下男どもと一杯やつたり、百姓相手に酒もりをしたり、といふやうな有様でした。けれど、ヴシーリイ・ニコライイチはそれと事かはつて、まるで年ごろ

の娘のやうに音なしくつて、いつも本を讀むか、書きものをなさるばかり、さもなければ、大きな聲で讚美歌をうたつてゐるといふ風で——誰とも一切話しをせず、人を避けるやうに避けるやうにして、たゞもう頻りに庭などを散歩してゐられる。その様子は氣分が淋しいのか、それとも悲しいのかと思はれるやうな按配。前々から勤めてゐた番頭などは、初めの間すつかり憎え上がつたもので、ヴシーリイ・ニコライイチが村へお着きになる前に、百姓どもの家を一軒々々廻つて歩いて、みんなにべこ／＼お辭儀をするといふ始末でしたよ。——つまり、脛に傷もつ足といふやつですな！——そこで百姓どもも新しい且那を頼みにして、『くそ、その手に乗るものか！今度こそ貴様にすつかり泥を吐かせてやるぞ。今に貴様、ぎう／＼いふ目に遭はされるんだぞ、この古狸め……』ところが、案に相違の結果となりました——さあ、何と申し上げたら宜しいか？——神さまだつて、あれがどういふ事になつたのか、お判じがつかねるくらゐでせうよ！——ヴシーリイ・ニコライイチは番頭を居間へお呼び寄せになつたが、自分の方から顔を赤くしながら、こんな風に息をはずませ、何を云ひ出すかと思ふと、『必ず公平にやつて貰はなくちやいけな。誰も壓迫することはならぬぞ、いゝか？』とたゞこれぎり、それ以來つひぞ一度も番頭をお召しになつたことがない！——ご自分の領地に暮らしてゐながら、まるで他所の人間も同じことなので。そこで番頭はほつと息をついた。百姓どもはヴシーリイ・ニコライイチのお傍などへ寄りつかうともしない、恐ろしいのでな。それから、こゝにもう一つ、不思議なことがあればあるもので、且那さまの方が百姓に頭を下げて、愛想のいゝ顔つきをなさるのに百姓は恐ろしさに擧丸が縮み上がるといふ始末。一體なんといふ不思議な話でございませうな、一つご意見が伺ひたいもので……それとも、私が年をとつて馬鹿になつたのでせうか——ふつ／＼合點が參り

ませんで。」

私はオフシャニコフに、多分リュボズヴォーノフ氏は病氣なのだらう、と答へた。

「何が病氣なものですか！ 横の方が縦より大きいくらい肥つて、顔などもなか／＼堂々たるものでしてな、年こそ若いけれど、頭から頬へかけてぐるりと髯を生やしてゐるほどで……尤も、そんなことなど、どうだつて構ひませんよ」オフシャニコフはかう云つて深い溜め息をついた。「まあ、貴族連中の話はそれくらゐにして、」と私は口を切つた。「郷士のことについては、どういふ御意見をお持ちですね、ルカー・ペトローギツチ？」

「いや、もうそれだけは御免蒙ります。」と彼はせき込んで云つた。「實のところ……私の意見を申せば……なに、こんな話をしたつて始まりません（オフシャニコフは片手を振つた）。それよりかお茶でも飲みませう……百姓はやつぱり百姓ですからな。尤も、正直なところを申し上げると、私どももどうしたら好いものかと迷つて居りますよ。」

彼は口を噤んだ。そこへお茶が出た。タチャーナ・イリイニチナは自分の席を立つて、私たちの傍に腰を下ろした。この晩彼女はのべつ何度も、そつと音のせぬやうに部屋を出ては、また物靜かに引つ返して來るのであつた。部屋の中には靜寂が立ち罩めてゐた。オフシャニコフは勿體らしい様子で、ゆつくりとお茶を何杯もかへて飲んだ。

「ミーチャが今日まゐりましたね。」とタチャーナ・イリイニチナが低聲で教へた。
オフシャニコフは眉をひそめた。

「何の用だね？」

「お詫びにまゐりましたので。」

オフシャニコフは頭を振つた。

「ねえ、一つ考へてみて下さい。」私の方へ振り向きながら、彼は言葉を續けた。「一體親戚の連中はどう始末したらいいのでせうな？ 知らん顔をして澄ましてゐるわけにも行かんし……現に私もなんの因果か、甥を一人持つて居りましてな、頭もいゝし、元氣のいゝ若い者で、學問もあり、申し分はないのですが、それでゐて一向に先きの見込みがありません。お役所で暫らく務めてゐたと思ふと、それも止めてしまひました。何分出世の道が塞がつてをりまして……もと／＼貴族とは違ひますからな。又その貴族がただつて、直ぐいきなり閣下にしてもらへるとは行きませんよ。かういふ譯で、いま職を離れてぶら／＼して居りますが……それだけならまだしも、こと、三百代言の仲間入りをしてしまひましてな！ 百姓どもに願書を作つてやつたり、報告書を書いてやつたり、百姓監督に入れ智恵をしたり、測量師のあらを拾つたりして、居酒屋などを飲み廻り、町の職人や門番などと旅籠屋あたりで懇ろにするといふ有様、これちや間違ひが起るに決まつてゐます！ 村の警部や町の署長さん方からお目玉を頂戴したことも、もう一度や二度ちやありません。ところが、仕合はせと奴は輕口が上手なので、警察の人たちを笑はした揚句、後では結局、みんなを手古摺らしてしまふのです……まあ、こんな話はこれくらゐにして、あいつは今お前の部屋に坐り込んでゐるんぢやないかな？」と、彼は配偶の方へ振りむいて、かうつけ足した。「なに、お前のやり口はちやんと分かつてゐる。お前は情に脆い性質だから、何かにつけて彼奴をかばふのだ。」

タチャーナ・イリイニチナは眼を伏せて、につこり笑ひながら顔を赧らめた。

「あゝ、やつぱり圖星だ。」とオフシャニコフは言葉を續けた。「やれ／＼、お前はどうも甘くて困

るわい！ まあ、こゝへ来いと云ひなさい——仕方がない、珍客様に免じて、阿呆めを赦してやらう……さあ、さう云つて来なさい、さう云つて来なさい……」

「タチャーナ・イリイニチナは戸の傍へ行つて、『ミーチャー』と呼んだ。

ミーチャは背の高い、すらりとした、長い毛の渦巻いてゐる、二十八九の若者で、部屋へ入りかけて私を見るなり、闕ぎわに立ち止まつた。獨逸風の服を着てゐたが、やけに大きい肩の鬘を見ただけで、これを仕立てたのがたゞの露西亞人でなくて、大時代の露西亞人だといふ事が、一目にそれと知れるのであつた。

「さあ、傍へ寄らんか、傍へ寄らんか。」と老人は口を切つた。「何を含羞んでゐるのだ？ 伯母さんに禮を云ふがいゝ、お詫びが叶つたのだから……では、貴方、御紹介いたしますが、」とミーチャを指さしながら言葉を續ける。「これは私にとつて親身の甥なんです、けれど、何とも手に負へないやつで、世も末になつてしまひましたよ！」（私達は互ひに會釋を交はした。）「さて、一體どんな不しだらを働らいて来たか、それを俺に話して聞かせなさい。なんだつて皆が尻を持つて來るのかそのわけを云ひなさい。」

ミーチャは私を前にさし置いて、事情を話したり、云ひわけしたりする氣に、ならないらしかつた。

「後でしますよ、伯父さん。」と彼は口の中で云つた。

「いや、後ぢやいけない、いま話せ。」と伯父は言葉を續けた。「俺にはちゃんと分かつてゐる、お前はこの旦那の手前が恥づかしいんだらう。それならもつけの幸ひだ——いゝ懲らしめになるからな。さあ、さあ、話せ……みんなで聞いてやる。」

「私は何も含羞むことなんかありませんよ。」とミーチャは元氣よく口を切つて、頭を一振りふつた。「まあ、伯父さん、考へてもみて下さい。私の所へシェチーロヴォの郷士連がやつて來て、『どうか加勢してくれ』といふんです。『どうしたのだ』と訊くと、『實はかういふ譯なのだ。わし等の村の穀倉はちゃんと規則通りになつてゐて、あれ以上きちんと出來ない位なのだ、そこへひよつこり役人がやつて來て、お上の命令で倉を検査に來たと云ふ。見せてやると、お前たちの倉は規則通りになつてをらん、いろ／＼容易ならん手ぬかりがあるから、然るべき筋へ報告しなけりやならん、とかう云ふのだ。一體どんな手ぬかりで？』と訊ねると、それはこつちだけの知つた事だ、といふ挨拶なので……そこで、わし等は集まりを開いて、その役人にうまく鼻薬を嗅がせようといふことに評議が一決した。ところが、ブローホルイチ老人が邪魔を入れて、それでは奴等を増長させるばかりだ。本當に何といふ事だ？ 一體わし等には正しいお裁きを受ける權利がないのか？』と云ひ出したので、わし等も老人の云ふ通りにしたわけさ。すると、役人はかん／＼に怒つて、報告を書いてお上に訴へた。そこで、今わし等はその申し開きをしなけりやならん事になつた。』で、私は『本當にお前さん方の倉は規則通りになつてゐるのかね？』と訊くと、『そりや、神様も御照覽だ、規則通りになつてをらいでか。おきてで定められただけの穀高も納まつてゐる……』いや、それなら何もびく／＼する事はないぢやないか。』と云つて願書を作つてやつたわけです……まだ今のところ、どちらの勝訴になるか分かりませんがね……この事件のどが悪くつて、伯父さんの所へ私の尻を持つて來たんでせう——尤も、無理もない話ですよ。誰だつて我身が一番可愛い、んですからね。」

「誰だつてさうに違ひないが、お前だけは別物らしい。」と老人は低聲で云つた。「それならシュト

ローモヴォの百姓連と、どんな小細工をやつてゐるのだ？」

「それをどうして御存じですね？」

「云ひ出すからには、知つてゐるのが當たり前だ。」

「それだつても私の方に理窟があるんです——もう一度とつくり考へて見て下さい。シュトロローモヴォの百姓の借りてゐる土地へ、隣り村のベスパンゲンといふ地主が四十町歩ばかり鋤を入れたんです。これは俺の地所だと云つてね。シュトロローモヴォの百姓らは年貢で借りてゐたのです。が、肝心の地主が外國へ旅行に出て了つたので、誰も百姓らの肩を持つてやるものがないわけです。さうぢやありませんか？ その地所は大昔からその連中が作つてゐたもので、議論も何もあつたものぢやない。そこで、百姓達が私の處へ来て、願書を書いてくれといふものだから、書いてやりましたよ。ところが、ベスパンゲンがそれを聞きつけて、おどし文句を並べ立てるんです。『俺はあのミーチャの兩足を、腿の付け根から引つて抜いてくれる。さもなければ、首をそつくり捻ぢ切つてやる』……などとぬかしやがる。どんな風にこの首を捻ぢ切るつもりか、一つ拜見したいものさ。まあ、今のところ、ちゃんと臺についてゐますがね。」

「ふん、大きなことを云ひなさんな。お前の首も今に碌なことはないぞ。」と老人は云つた。「本當にお前は向かう見ずな人間だなあ！」

「だつて、伯父さん、あなたが自分でさう仰しやつたぢやありませんか……」

「分かつてゐるよ、お前の云ひ草はちゃんと分かつてゐるよ。」とおフシャニコフは遮つた。「そりやその通りさ。人間は正直な暮らしをして、他人を助けてやらにやならん。時と場合によつちや、わが身を粉にしてもやらにやならん事がある……ところが、お前は、いつもそんな風にして

をるか？ 始終居酒屋へ引つ張り込まれてゐるのは誰だ？ ふるまひ酒で拜み倒されてゐるのは誰だ？ ドミートリイ・アレクセイイチ、どうかお助けください——お禮は前金で致します

——などと云つて、一ルーブリ銀貨か、五ルーブリ紙幣を、そつと袖の下から掴まされるのは、一體だれだらう？ え？ さういふことは無かつたかな？ どうだ、白状せい！」

「そりや、なるほど私も悪うござんしたが、」とミーチャは伏し目になつて答へた。「しかし、貧乏人から金なんか取らないし、曲がつた事はこれつから先きもしませんからね。」

「よしんば、今取らないにしろ、都合が悪くなつてくると、おひ／＼取るやうになるだらうよ。曲がつた事をしないつて……なにを、この野郎！ その云ひ分を聞いてると、いつも聖者様のやうな連中の辯護ばかりしてゐるやうだが……お前はあのポリカ・ペレホードフの事を忘れたのか？……彼奴のために骨を折つたのは一體だれと思ふ？ 彼奴を庇つてやつたのは何者だい？ え？」

「ペレホードフが酷い目にあつたのは身から出た錆だ、そりや確かにその道理だが……」

「お上の金に穴を明けやがつて……飛んでもないことだ！」

「だつて、伯父さん、察してもみてやつて下さいよ。貧乏暮らしで、女房子はあるし……」

「貧乏暮らし、貧乏暮らしだつて……彼奴は呑んだくれの博奕打ちぢやないか——さうとも！」

「あれは自棄酒から始まつたんですよ。」とミーチャは聲を低めて云つた。

「自棄酒だつて！ ふん、お前にそんなに親切氣があるなら、そんな呑んだくれと一緒に居酒屋などでのらくらしてゐないで、本當に力になつてやつたらいいぢやないか。口先きばかり巧いことを云やがつて——へん、そんな文句は珍らしくもないわい！」

「あれはこの上もない善人なんで……」

「お前に云はせりや誰でもみんな善人さ……ときに、つれあひの方へ振り向きながら、オフシャニコフは言葉を續けた。「あいつに送つてやつたかい……な、そら、お前わかつてゐるだらう……」

タチャーナ・イリイニチは頷いてみせた。

「この二三日、お前はどこに姿を晦ましてゐたのだ。」

「町に行つて居りましたんで。」

「いづれ玉突きをやつたり、茶を飲んだり、ギタァをぼろん／＼鳴らしたり、方々の役所を駆けずり廻つて、奥の方の曖昧な部屋で願書の文句を考へたり、商人の小悴どもと伊達競べでもしてゐたんだらう？　なあ、さうだらう？……白状せい！」

「そりやまあね、さうかも知れませんさ。」とミーチャはにこ／＼しながら云つた。「あつ、さうだ！　すんでの事で忘れるとこだつた。あのフンチコフが、アントン・パルフェヌイチが、日曜日にお出でを願ひ度い、食事をさし上げるからと云ふことでしたよ。」

「誰があんなどん腹の所へ行くものか。魚といつたら一束いくらといふやうな奴を喰はすし、バタは少しまゐりかゝつたのを出すんだからな。あんな奴は眞つぴら御免だ！」

「それから、フェドーシャ・ミハイロヴナに逢ひましたぜ。」

「誰だ、そのフェドーシャといふのは？」

「ガルペンチェンコ、ほらあのミクーリノ村を競賣でせり落とした地主の妾ですよ。ミクーリノ在のフェドーシャでさ、一時モスクワで仕立屋に住み込んで、年貢は金で拂ふことにしてゐました。が年に百八十二ルーブリ五十コペイカといふ金を、几帳面に納めてゐましてね……仕事の方も

確かりした腕を持つてゐて、モスクワでもいゝ所から註文を貰つてゐましたよ。今ではガルペンチェンコが呼び戻して、別に何ていふ仕事も決めないで、たゞいゝ加減に抱へてゐるんです。女は身のしろ金を拂つて、すつかり自由になりたいといふ氣があるので、旦那にもその話を持ち出したけれど、こつちはなんとも決まつた返事をしないのです。伯父さん、あなたはガルペンチェンコと知り合ひなんでせう？……一つあなたから口を利いてみてくれませんか？……フェドーシヤはたんまり身のしろ金を出しますぜ。」

「そりやお前が出す金ぢやないか？　うむ？　なに、よし、よし、云つてやらう、俺が彼奴に云つてやらう。しかし、當てにはならんぞ。」と、老人は不満さうな面持ちで言葉を續けた。「あのガルペンチェンコといふ男は、かう云つちや悪いが、慾の皮の突つ張つた奴で、手形で買ひ占めたり、高利の金を廻したり、競賣に出た領地をせり落したりしやがつて……全體だれがあんな奴をこの土地へ引つ張つて來たのだらう？　いや、あゝいふよそのものは閉口だ！　あんな奴と話したつて、なか／＼急には埒があくまいて——だが、まあ當たつて見ようよ。」

「一骨折つて下さい、伯父さん。」

「よろしい、やつて見よう。だが、お前も氣をつけて、憤まなけりやならんぞ！　まあ、まあ、云ひ譯はいらん……お前の勝手にしなさい、お前の勝手に……しかし、さき／＼はよく氣をつけん、碌なことはないぞ、いゝか、ミーチャ——本當に身の破滅になるぞよ……いつまでも俺の脛を噛つてもをれまいぢやないか……それにこの俺だつて、しがなない身の上なんだからな。ぢや、もういゝから氣をつけて行きなさい。」

ミーチャは出て行つた。タチャーナ・イリイニチはその後につゞいた。

「まあ、彼奴に茶でも飲ましてやるがい、この甘い伯母さん。」とオフシャニコフはうしろから聲をかけた。「なか／＼氣の利いた若い者で、」と彼は言葉を續ける。「それに氣立ても至つて好いのですが、どうも私はあれの身の上が心配でしてな……いや、失禮しました、詰まらん事を長々とお耳に入れて。」

このとき、控へ室の戸が開いた。天鵞絨の上衣を着た背の低い胡麻鹽頭の男が入つて來た。

「や、フランツ・イワーヌイチ」とオフシャニコフは叫んだ。「こんにちは、御機嫌いかゞですか？」

親愛なる讀者諸君、この紳士をも紹介させて頂きたい。

フランツ・イワーヌイチ・レジョン (Lejane) は、私とは近所同士に當たるオリョール縣の地主、ちよつと竝み外れた經緯で、光榮ある露西亞貴族の肩書きを獲得した人である。オルレアンの町で、佛蘭西人を兩親として生まれ、ナポレオンの露西亞遠征に鼓手となつて従軍した。初めの間は萬事調子よく行つて、この男も昂然と首を上げながらモスクワに乗り込んだ。けれど退却の途中、可哀さうにムシウ・レジョンは半ば凍えて太鼓をも失ひ、スモレンスク在で百姓どもの掌中に落ちたのである。スモレンスクの百姓はその晩、彼を空屋になつた羅紗工場に閉ぢこめ、夜が明けてから、堤の傍の氷孔に連れて行き、この La grande arnee (偉大なる軍隊) の鼓手に向かつて、俺たちの顔を立ててくれと云ひ出した。つまり、その孔から氷の下へ潜り込んでくれと云ふのである。ムシウ・レジョンは、さういふ申し出をおいそれと承知することが出来ないのだ、こちらも負けずに佛蘭西語で、オルレアンへ歸してくれと、スモレンスクの百姓たちに談判を始めた。『そこには、諸君、』と彼は云つたものである。『私の母親が住んでゐるのだ、優しい母親が。』

けれど百姓達はオルレアン市の地理學上の位置を知らなかつた爲だらう。相變はらず、グニロチヨールカの流れに沿ふ水底旅行を勧めて、しまひには頸筋や脊骨をちよ／＼突きながら、實行を迫るやうになつた。と、不意に小鈴の音が響き渡つて、レジョンを譬へやうもないほど喜ばした。堤の上には、頑丈さうな葦毛の三頭立てに曳かせた大きな櫓が現はれた。後部を大仰に高く上げて、派手な毛氈をかけてゐる。その中に乗つてゐるのは、狼の毛皮外套を着こんだ赤ら顔の肥つた地主である。

「お前たちはそこで何をしてゐるのだね？」と彼は百姓に訊ねた。

「佛蘭西の野郎を沈めてゐるので、旦那。」

「はゝあ！」と地主は氣の無い調子で云つて、そつぽを向いてしまつた。

「ムシウ！ ムシウ！」と不仕合はせな男は叫んだ。

「おい、おい！」と狼の毛皮外套はたしなめるやうに云つた。「多くの國の軍勢を引き連れて、露西亞に攻め寄せ、モスクワを焼き拂ひ、イワン大帝鐘樓の十字架を引き摺り下ろした太い野郎どもぢやないか。それが今更……ムシウ、ムシウもないものだ！ 今になつて尻つ尾を捲いたつて後の祭りだぞ。悪黨にそれ位の報いは當たり前だ……さあ、やれ、フィリカア！」

櫓は動き出した。

「だが、しかし待てよ！」と、地主は云ひ足した。「おい、お前、ムシウ、音樂の嗜みはあるか

い？」

「お助け下さい、お助け下さい、お慈悲深い旦那様！」とレジョンは繰り返した。

「ちよつ、なんといふ奴等だ！ 露西亞語が分かる奴は一人もゐやしない！ ミュージック、ミ

ユー・ジツク、サエエ・ミュージック・ヴー？ サエエ？
 答しろ！ コンプルネ？
 (音楽だよ、音楽だよ、お前、音楽を) さあ、返
 (かいて？) サエエ・ミュージック・ヴー？ ピアノを、ジウエ・サエエ

レジョンは地主の苦心慘愴して訊ねてゐる事がやつと分かつたので、首を縦にふつて見せた。
 「はい、旦那様、はい、はい、わたしは音楽師です。わたしはどんな楽器でも弾けます！ はい、旦那様……どうかお助け下さい、旦那様！」

「いや、お前は運のいゝ奴だ。」と地主は答へた。「皆の衆、そいつを放してやれ。それ、二十コヘイカ、これがお前たちの酒手だ。」

「有難うございます。旦那、有難うございます。では、お渡し致します。」

レジョンは襦に乗せられた。彼は嬉しさに息をつまらせ、身をふるわせて泣いたり、お辭儀をしたりして、地主や、馭者や、百姓たちに禮を云ふのであつた。彼が着てゐるものは、薔薇色のリボンをつけた緑色のジャケツ一枚きりで、しかも寒さは牙え返る厳しきであつた。地主は無言のままその紫色になつたこち／＼の手足を見てゐたが、やがて自分の毛皮外套を不仕合はせな男の身體に纏んでやつて、我が家へ連れて歸つた。召使ひ一同が忽ち馳せ集まつて、この佛蘭西人を手早く温めた上、食べものや着物を當てがつてやつた。地主は、彼を自分の娘たちのところへ引つ張つて行つた。

「さあ、みんな、」と彼は云つた。「到頭お前たちの先生が見つかつたよ。いつも、音楽を教へて頂戴、佛蘭西語を教へて頂戴と、うるさくねだつてゐたものだが、ほれ、この通り、佛蘭西人の先生が出来たぞ。ピアノも弾けるし……さあ、ムシウ、五年前にオーデコロンを商つてゐる櫛

太人から買つたぼろピアノを指しながら、彼は言葉を續けた。「一つお手並みを見せて貰はう、弾きなさい！」
 レジョンは人心地もなく椅子に腰をかけた。彼は生まれ落ちてから今まで、ピアノに觸つた事

もないのである。

「ジウエ、ジウエ、と云つたら！」と地主は繰り返した。

可愛さうな佛蘭西人は、まるで大鼓でも敲くやうに、自棄に鍵盤を撲りつけながら、出任せに弾き出した。……「私はその時、せつかく生命を救つてくれたあの人が、いきなり私の襟髪を掴んで邸から追つぱり出してしまふだらうと観念しましたよ。」と彼は後でよく云ひ云ひした。けれど、心ならずも即席音楽家にされたレジョンの驚き入つたことには、地主は暫らくしてから、感心したやうに、彼の肩を叩きながら、「結構、結構、如何にも腕が有りさうだ。それではもう行つて休んでもよろしい。」と云つた。

二週間ばかりして、レジョンはこの地主の手もとを離れて、それより一段金持ちで教養のある地主のところへ移つたが、陽氣で温順しい性質が氣に入られて、その家の養ひ娘と結婚し、勤め口にもありついて、いつぱしの貴族になり濟まし、退職龍騎兵で詩作などもやつてゐるロブイザニエフといふオリョールの地主に娘を嫁入らせ、自分も永住の目的でオリョールの町へ移つた。つまり、このレジョン、或ひは一般の呼び方に従へば、フランツ・イワーヌイチが、私の訪問中にオフシャニコフの部屋に入つて來たのである。この二人は親しい友達同士であつた……しかし、恐らく讀者諸君も私の相手をして、郷士のオフシャニコフのところへ長居するには、もう飽きて來られた事と思ふから、私はこの邊で雄辯なる沈黙を選ぶことにしよう。

リゴフ

「リゴフへ行つてみませんか。」もう讀者諸君にお目通りした事のあるエルモライが、或るとき私にかう云つた。「あすこなら鴨が思ふ存分撃てますぜ。」

本當の銃獵家にとつては、野鴨など一向になんの魅力もないのであるが、目下のところ、ほかに獲物がないので（それは九月初めのことで、山鶺はまだ飛んで來ないし、鷓鴣しやこを追ひ廻して畑の中を駈けずり歩くのも、いゝ加減あき／＼してゐたので）、私は獵師の云ふことを聞いて、リゴフへ出かけた。

リゴフは曠原地方の大きな村で、圓屋根をたつた一つ聳えさせた至つて古い石造りの教會堂があつて、ロソタといふ泥つぽい川の畔りには、水車場が二軒たつてゐる。この川は、リゴフから五露里ばかり先きの方で、一つの大きな池になつてゐて、周りばかりでなく、ところによると、池心の方までオリョールで「マイエル」と云はれてゐる葦が、びつしりと生ひ繁つてゐた。この池の入り江や、葦の間のひっそりした所には、眞鴨、蒼頸、尾長鴨、島阿治、小鴨など、ありとあらゆる種類の野鴨が無數に棲んでゐた。ちよつとした群れは始終水の上を飛び廻つてゐたが、一發の銃聲が聞こえようものなら、それこそ雲霞のやうな大群が舞ひ上がるので、狩獵家も思はず片手で帽子を抑へ、「うわつ！」と言葉尻を引きながら、嘆聲を發する位である。私はエルモライと二人で、池の縁に沿つて歩き出したが、第一、鴨は用人深い鳥で、岸の傍などは泳いでゐないし、第二に、よしんば仲間にはぐれたぼんやりの小鴨などが、うっかり彈丸を見舞はれて、生

命を落とすやうな事があつても、葦が一面に生えてゐるので、その間から取つて來る事は、私達の犬には出來ない藝當であつた。どんなに立派な自己犠牲の精神があるにもせよ、泳ぐことも出來なければ、底を踏んで歩くことも出來ず、たゞ葦の鋭い葉で大事な鼻を切るくらゐが落ちてゐる。

「駄目だ。」到頭エルモライもかう云ひ出した。「こいつは具合が悪いや。小舟を手に入れなくちや：：一先づリゴフへ引つ返しませう。」

私たちは引つ返した。まだ幾足も歩かない中に、向かうのこんもりした楊の蔭から、可成りやぐざな獵犬が一匹飛び出して、その後から中背の男が姿を現はした。ひどく草臥れた青い上着を黄色つぽいチョッキの上に重ね、グリ・デ・レン色だか、ブルー・ド・アムール色だかわからぬいズボンに穴だらけの長靴の胴へぞんざいに押し込み、赤いハンカチを首に巻き、單發銃を肩にかけてゐる。私たちの犬どもは、持ち前の支那人流の禮儀作法を守つて、新顔の犬と互ひに嗅ぎ合つてゐたが、先方はどうやら怖氣づいた様子で、尻尾を捲き、耳を立てて、膝も曲げずに齒をむき出しながら目まぐるしいほどくる／＼廻つてゐた。——その間に、見知らぬ男は私たちの傍へ寄つて、馬鹿丁寧にお辭儀をした。見たところ年は二十五ぐらゐで、クワスの匂ひがぷんぷんするほど浸みこんだ長い薄色の髪を、ところ／＼にぴん／＼とおつ立たせ、小さな鳶色の眼を愛想よくばちつかせてゐる——まるで齒痛に悩んででもゐるやうに、黒い布で顔を縛つた顔は、一面に甘つたるい微笑を漲らしてゐた。

「不躰ですが、名乗りを上げさせて頂きます。」と彼は物柔かな、忍びよるやうな聲で云ひ出した。「私はこの土地の獵師で、ウラヂーミルと申します：：あなたが當地へお見えになつて、この池

の岸へお出向きになつたと聞きまして、もし御不承く下さいますれば、お役に立たして頂かうと決心いたしましたわけだ。」

獵師のウラヂーミルは、主役の二枚目をやる田舎廻りの若い役者そつくりの言葉遣ひをした。私はその申し出を肯き入れた。そしてまだリゴフまで行き着かない中に、早くも彼の身の上を聞いてしまつた。この男は主人から自由にして貰つた邸づとめの農奴で、物に感じ易い年頃に音楽を習ひ覚え、その後侍僕頭を務めるやうになつたので、讀み書きの術も心得、私の觀察したところでは、多少は物の本も讀んだ事があるらしい。今では多くの露西亞人の例に洩れず、一錢の現金も持たず、定まる仕事もなしに暮らして、天から降つて来るマナで口過ぎしないばかりの有様であつた。ウラヂーミルは竝み外れて雅びた言葉遣ひをし、明らかに、自分の話しぶりを自慢にしてゐるらしかつた。それに、間違ひなく凄腕の色事師で、どうみても決してやり損ひがないらしかつた。露西亞の女は口説上手を好くものである。さうかと思ふと、時には近所の地主たちを訪ねたり、町へ遊びに行つたり、歌留多の相手をしたり、都の人たちとも近附きがあるといふ事を、私に匂はすのであつた。笑顔の名人で、笑ひ方が千變萬化を極めてゐた。とりわけ、他人の話に耳を傾けてゐる時、彼の口邊に漂ふ控へ目な、つゝまじげな微笑が、殊のほか似つかはしかつた。ひとの話聞いて、ぴんからきりまで合槌を打ちながら、それでゐて、自己の品威といふ氣持ちを失はず、いざとなつたら自分の意見を洩らすことも出来るぞと、暗々裡に仄めかすやうな具合であつた。エルモライはあまり教育もないし、まるで細かい所に氣のつかない男だつたので、この男に『おめえ』よばはりを始めた。ウラヂーミルがなんとも云へない微笑を浮かべながらエルモライに『あなた』と云ふ時の顔は、それこそ見ものであつた……

「なぜ君は頤を縛つてゐるんです？」と私は訊いてみた。齒でも痛いのかね？」

「いゝえ、ちがひます。」と彼は打ち消した。「これは、もつと寒心すべき不注意の結果なのでございませぬ。私には友達が一人ありまして、いゝ男なんです、よくある話で、まるで獵の心得がございませぬ。ところが、ある日わたしに申しますには、『君、お願ひだから、僕を獵に連れて行つてくれないか。一體、どういふものか知りたいたいだから。』私は申すまでもなく、友達の頼みを無下に斷りたくなかつたので、自分で鐵砲のことまで心配してやつて、この男を連れて獵に出かけました。さて、いゝ加減撃つて歩いた揚句、いよ／＼一休みといふことになつて、私は木蔭に腰を下ろしました。ところが、友達は却つて銃の操法などを稽古しだして、おまけに私を的にするのです。私は止してくれと頼んだのですが、相手は素人だものですから、一向に肯かうともしません。その中にどん、と云つたと思ふと、私は下頤と右の人指し指を無くしてしまひましたので……」

私たちはリゴフに辿り着いた。ウラヂーミルもエルモライも二人ながら、小舟なしには獵は出來ないと決めてしまつたのである。

「スチョークのところは平底舟がありますが、」とウラヂーミルが云つた。「彼奴、何處へかくしたのか、私も存じませぬ。一走り行つて來なければなりませんまい。」

「それは誰のことだね？」と私は訊ねた。

「こゝに或る男が居りましたね。通り名をスチョーク(小枝の意)と申します。」

ウラヂーミルはエルモライを連れて、スチョークの所へ出かけた。私は教會の傍で待つてゐるからと云つた。墓地の墓石を見廻してゐるうちに、ふと黒ずんだ四角い碑に行き當つた。表に

は佛蘭西文字で、『Ci git Theophile-Henri Vicomte de Blarney』と彫つてあり、裏には『佛蘭西臣民ブランジイ子爵の遺骸、この石の下に眠る。一七三七年生、一七九九年歿、享年六十二歳』とあり一方の横には『この亡骸に安らひあれ』と誌され、もう一方の側には

『この石の下に佛蘭西の亡命の客眠る。』

名門の家に生を享け、才智も人に優れしが

妻子を人に殺されて歎きのあまり

逆賊に踏み蹂られし祖國を見棄て

露西亞の國の境に入りぬ

年老いて、情けの宿に世を送り

子等を導き父母の意をば安めつ……

いまこゝに神の恵みに安らひぬ。』

* 『子等を導き』で家庭教師となつたことが知られる。(譯者)

と書いてあつた。

エルモライとウラチーミル、それにスチョークとかいふ妙な綽名を持つた男が姿を現はしたの私の冥想は破られた。

ぼろ／＼の着物を着て、髪をおどろに振り亂した跣足のスチョークは、年の頃六十前後で、見たところ、隠居した門番といつた風であつた。

「お前んとこに小舟があるかね？」と私は訊ねた。

「舟はありますが、」と彼は妙に籠もつた毀れたやうな聲で答へた。「とてもひどくなつて居りま

すんわ。」

「どんな風なのだ？」

「繼ぎ目がみんな離れて了つて、それに、方々の穴に填めたものがすつかりとれて了ひました。」

「何も大した事じゃない！」とエルモライが引き取つた。「麻屑を填めさへすりやいよ。」

「そりや、いゝに決まつてるさ。」とスチョークが合槌を打つた。

「一體、お前は何者だ？」

「お邸の漁師でさ。」

「それはどうした事だ。漁師のくせに、舟がちやんとしてゐないなんて？」

「でも、こゝの川にや魚がゐないんで。」

「魚は沼地の鰯を好かないからね。」と、私の獵師は勿體らしく註を入れた。

「ぢや、」と私はエルモライに云つた。「何處かへ行つて、麻屑を手に入れる。そして舟を修繕するんだ、さあ、早く。」

エルモライは出かけた。

「したが、こんな有様ぢや、みんな土左衛門になりやしなにかしらん？」と私はウラチーミルに話しかけた。

「まさかそんな事もございますまい。」と彼は答へた。「どつちにしても、池はさして深くなささうに思はれますが。」

「さうですよ、深かあございませぬ。」とスチョークは口を入れたが、その話しぶりはまるで寢呆けてでもゐるやうに、なんとなく奇妙なところがあつた。「おまけに底は泥と草で、一面に草がび

つしり生えて居りますよ。尤も、深い穴も所々にございますがね。」
 「それにしても、草がそんなにひどかつたら、どウラチーミルは云つた。「漕ぐことだつて出来な
 いぢやないか。」

「だれが平底舟を漕ぐ者があるかい？ 竿をさすんだよ。わつしが御一緒にまゐりませう。うち
 に手頃な棹がありますよ——でも、鋤だつてやれますがね。」

「鋤ぢや具合が悪いだらう。場所によつちや底まで届かないかも知れない。」とウラチーミルが云
 つた。

「そりや、その通りで、具合は悪いに違ひない。」

私はエルモライを待つ間、墓石に腰を下ろした。ウラチーミルは遠慮して、少しばかり小脇へ
 離れ、同じやうに腰を下ろした。スチヨークは頭を垂れて、昔からのくせで両手を後ろに組みな
 がら、相變はらず一つ所に立つてゐた。

「ときに、どうだね、」と私は口を切つた。「お前は古くから此處で漁師をしてゐるのかい？」

「もう今年で七年目になりますよ。」と彼はぴくりと身慄ひして、かう答へた。

「その前には何をしてゐたい？」

「前には馭者をやつて居りました。」

「誰に馭者の仕事をやめさせられたんだね？」

「新らしい奥様で。」

「奥様とは？」

「わつし共を買ひ取りなすつた方で。御存じありませんかね、アリョーナ・チモフェーヴナとい

つて、こんなに肥つた……もう年の若くない。」

「どうして又、お前を漁師なんかにしようつて氣を起したんだらう？」

「そんな事が誰に分かりますもんで。タムボフの御領地からおいでになつてね、邸中の召使ひを
 集めた上で、みんなの前へ出て來られました。わつし共は先づお手に接吻しましたが、奥様は別
 にお怒りになる様子もございせん……やがて順々に一人一人、お前は何をしてゐたか、どうい
 ふ役目を當てがはれてゐたか、とお訊ねになる。その中に順番が廻つて來て、お前は何をして
 てゐたかとわつしにお訊ねになるものだから、馭者をして居りましたと申し上げると、「なに、馭
 者をしてゐた？ ふん、お前が馭者なものか、自分の面を見るがい、そんな馭者があつてたま
 るものか、お前なんか馭者をする柄ぢやないから、髻を剃つて漁師におなり。私がこゝへ來た時
 にはお臺所へ魚を届けるやうにするんだよ。いゝかい？」とかう仰しやつて、それ以來わつしは
 漁師といふ事になつて居ります。『いゝかい、うちの池が何時もきちんとしてゐるやうに氣をつけ
 るんだよ……』と云はれましたが、どうしてあれをきちんとして置かれるもんですかね？」

「お前たちはもと誰に抱へられてゐた？」

「セルゲイ・セルゲエキツチ・ペフチェレフ様で。わつしら、相續ゆづりでその方の手に渡つた
 のでございしますが、それも永く保たないで、たつた六年きりでお終ひになりました。つまりこの
 人の時分に、わつしは馭者を務めたものでございしますが、それも町ぢやございせん——そつち
 の方にやほかに馭者があましたので、村の方だけで致しましたよ。」

「で、お前は若い時から、始終馭者をやつてゐたのかい？」

「なんの、始終馭者なんかしちや居りません！ わつしが馭者になつたのは、セルゲイ・セルゲ

エキツチ様の代になつてからで、その前は料理場いんたまへの方をやつて居りました。——でも、町のお邸ぢやなくつて、やつぱし田舎の方がございました。」

「誰のこの料理人をしてゐたのだね？」

「先代のアフナーシイ・ネフェードイチ、セルゲイ・セルゲエキツチの伯父様のことなので。リゴフを買つたのも、その方で、つまりアフナーシイ・ネフェードイチがお求めになつたのでございます。ところが、伯父様が亡くなられたので、自然とセルゲイ・セルゲエキツチの手に入つたといふわけで。」

「伯父さんは誰の手から買ひ取つたんだね？」

「タチャーナ・ワシーリエヴナからで、」

「タチャーナ・ワシーリエヴナつて誰のことかい？」

「それ、一昨年、ボルホヴォ在で……ではない、カラーチエヴォ在で、娘のまゝで亡くなられたお方でございますよ……一度もお嫁に行かず終ひでしたが、御承知ではございませんかね？ わつし共はその方のお父様のワシーリイ・セミョーヌイチから娘御の手に譲られたわけなので。この方は随分ながい間、わつし共を抱へて居られましたよ……かれこれ二十年ばかりも。」

「それで何かね、お前はその人の處で料理人をしてゐたのかい？」

「初めの間は、なるほど、料理人をして居りましたが、やがて珈琲係コーヒエツクりにされました。」

「なんだつて？」

「珈琲係コーヒエツクりで。」

「そりやまた、どんな役目だい？」

「分かりません、旦那様、食堂の方の係りで。クジマーと云はないで、アントンと呼ばれて居りましたよ。さういふ奥様のお云ひつけでございます。」

「お前の本名はクジマーなんだね？」

「さやうで。」

「で、ずつと珈琲係りをやつてゐたのかね。」

「いゝえ、ずつとぢやございません。役者も致しましたよ。」

「まさか？」

「どういたしましたして、本當なので……劇場たうで芝居をしました。奥様がお邸の中にその劇場をお作りになりましたな。」

「一體お前は、どんな役をやつたんだい？」

「なんと仰しやります？」

「お前は劇場で何をしたのだ？」

「おや、御存じありませんかね？ なに、みんながわつしを掴まへて、衣裳をつけてくれますので、わつしはその衣裳をつけたまゝ、その時の都合で、歩いたり、立つたり、坐つたりして、それ、かう云へ、と云はれ、ば、その通りに喋ります。一度は盲人をやつた事もありましたつけ……：両方の眼まなこの下に、ゑんどう豆を一つづつくつ附けてな……：本當のことでございますとも！」

「それから何になつたね？」

「それからまた、料理人になりました。」

「なんだつて料理人などにおとされたい？」

「弟が逃げてしまつたからでございませよ。」

「ぢや、初めの奥様のお父さま時代には、どんなことをやつてゐた？」

「いろ／＼様々な役目を勤めましたよ。初めは使童をやつて居りましたが、それから馭者をやつたり、庭師になつたりして、一度などは獵犬の係りになりました。」

「獵犬係りになつた？……ぢや、犬を連れて騎りまはしたのかい？」

「犬を連れて騎り廻しも致しましたよ。ところが、たうとう怪我をしてしまひました。馬がぶつ倒れて、馬も足を挫いたやうな始末で。大旦那はとても喧しいお方で、わつしを折檻した揚句、モスクワへ靴屋の年季奉公にやられました。」

「え、年季奉公？　だつて、まさかお前は子供の時に、獵犬係りになつたわけでもあるまい？」

「さやう、えゝと、はたち餘りの時でございましたかな。」

「二十歳にもなつて、年季奉公に行く奴があるものかね？」

「なに、旦那様がお云ひ付けになる位だから、別に構はないわけでございませうよ。それに仕合はせと、間もなくお逝れになりましたな、わつしは村へ呼び戻されましたよ。」

「いつ料理なんか習つたんだね？」

「スチヨークは羨びた黄色い顔を上げて、にたりと笑つた。」

「誰がそんなことを習ふんですか？……女でも煮焚きぐらゐしませあね！」

「ふむ、」と私は云つた。「クジマー、お前は一生の間に、随分いろんな事を見て來たわけだな！　ぢや、いま漁師になつてから、一體なにをしてゐるんだね、魚もゐないのに？」

「なに、旦那様、わつしは別に苦情を申しませんよ。漁師にしていたただけでも、有難いくらゐで。なにしろ、わつしと同じくらゐ年を老つたアンドレイ・プイリなどは、紙漉工場へやられて、汲み出し役をやらされて居りますからな。奥様のお云ひ付けだもんで……たゞで食はして置くのは勿體ない、と仰つしやつてね……プイリの奴、もつと甘い口にあると當てにしてゐたんですよ。また甥に當るのが、お邸の事務所で手代をやつて居りますので、そのうちに折を見て、奥様にお願ひしてやると約束したものですからね。ところが、お願ひしてやるどころか……それでもプイリの奴は、現にわつしの見て居る眼の前で、甥の足もとに頭を摺りつけたものでございませぬ。」

「お前、女房子はあるのかね？　世帯を持つたことは？」

「いゝえ、旦那様、ございませぬ。亡くなられたタチヤーナ・ワシーリエヴナは——どうか天國にいらつしやいますやうに！——誰にも女房を持つことはお許しになりませんでしたよ。』とんでもない！　現に私だつて獨り身で暮らして居るのに、そんな我儘な話つてあるものぢやない、そんな事をするわけはないよ。』と仰しやいましたね。」

「いまお前はなんでくちすぎして居るね？　給金でも貰つて居るのかい？」

「なんの、旦那、お給金なんか……食べる物だけ寄越して下さるので、まあ、それだけでも有難いと思つて、わつしや満足して居りますよ。どうか神様のお恵みで、奥様が、長生きなさいますやうに！」

エルモライが歸つて來た。

「舟のつくるひが出來ました。」と、彼は氣難かしげな調子で云つた。「おい、お前、棹を取つて來

んか！……」

スチョークは棹を取りに駈け出した。私が可哀さうな老人と話して居る間、獵師のウラヂーミルは、始終馬鹿にしたやうな微笑を浮かべながら、スチョークをじろく見廻して居た。

「馬鹿な奴だ。老人が行つてしまふと、彼はかう云ひ出した。「まるつきり無教育な奴で、つまり土百姓ですな。それつきりのものですよ。あれはお郎に奉公する人間とも云はれませんよ……そのくせ法螺ばかり吹いてやがる……あんな奴に役者が出来てたまるものですか、まあ考へても御覽なさいまし！ あんな奴とお話なんかすつて、とんだ御酔狂でございますね。」

十五分ばかりしてから、私たちはスチョークの平底舟に乗つた（犬は小屋に残して、馭者のイエルグヂールに監督させて置いた）。私たちはあまり居心地が好くなかつたけれど、獵をする人間は氣さくだから、別に文句も云はなかつた。先きの尖つて居ない艫の方にはスチョークが立つて、棹をさして居た。私はウラヂーミルと一緒に胴の横木に腰をかけ、エルモライは舳のつ先きに陣取つた。麻屑をつめてはあつたけれど、水は忽ち足もとに流れこんで来た。幸ひ天氣は穩かで、池はまるで假睡んで居るやうであつた。

舟足はかなりのろかつた。老人は、一面に青い絲のやうな藻のからみついて居る長い棹を、やつとのことで粘つこい泥の中から引き抜くのであつた。びつしり茂り合つた睡蓮の圓い葉も、小舟の行く手を妨げた。私たちはやつとの事で蘆の茂みまで漕ぎよせて、そこでいよく楽しみが始まつた。鴨は自分たちの領分に突然私たちが姿を現はしたのに驚いて、騒々しく水面を離れながら、がや／＼と舞ひ上がるのであつた。私たちはその後から銃音を揃へて火蓋を切つた。あの尻つ尾の短い鳥どもが、空中でもんどり打つて、ばさりと重々しく水の上に落ちて行くのは、な

かなか愉快な眺めであつた。彈丸を受けた鴨を殘らず拾つてしまふことは、むろん出来な相談であつた。手傷の輕いのは水の中に潜つて行つた。一撃ちに殺されたのでも、あのひどい葦の茂みの中へ落ちたのは山猫のやうな目をしたエルモライですら、見つけることが出来なかつた。それでも晝頃までには、私たちの小舟は縁から溢れさうなほど獲物で一杯になつてしまつた。

ウラヂーミルは鐵砲打ちがからつ下手だつたので、エルモライはそれを酷く痛快がつた。彼は一發撃ち損ずる度に鐵砲を檢めたり、吹いてみたりして、如何にも合點が行かぬといふやうな顔をして、最後に自分のやり損つた譯を、私たちに説明して聞かせるのであつた。エルモライはいつもの通り得々として撃ち續けて居た。私は例によつて、餘り上手と云へなかつた。スチョークは、若い時から旦那がたの世話をしたれた人間のやうな眼付きで、私たちの様子を眺めながら、時々、『それ／＼、あそこにもう一羽！』と嘯鳴る。——そして、のべつ背中を搔いて居たが、それも手をつかはないで、肩をもぞ／＼動かして搔くのであつた。天氣は引き續き快晴で、白いまる／＼とした雲が高く靜かに頭上を流れながら、はつきりと水に影を映して居た。四邊では葦がさ／＼やき交はして居る。池の面はところ／＼まるで鋼鐵のやうに、日光を受けて輝いて居る。私たちはそろ／＼村に引つ返さうとしたが、そのとき思ひがけなく、かなり不愉快な事件が持ち上がった。

私たちが乗つてゐる平底舟に、水がだん／＼溜まつて來るのには、もう大分前から氣がついて居た。ウラヂーミルは柄杓でそれを汲み出す役目を命じられて居た。この柄杓は用意周到な私の獵師が、何かの場合のために、ぼんやりして居る百姓女の所から盗んで來たものである。ウラヂーミルが自分の役目を忘れないで居る間は、何事もなく無事に濟んだが、獵も終りに近づいた

頃、鴨どもがまるでいよ／＼お別れだといふやうに、夥しい群をなして飛び立つたので、私たちは弾丸をこめる暇がない位であつた。夢中になつて続け撃ちするのに紛れて、私たちは舟がどうなつて居るかといふ事に、氣をつけようとしなかつた。——と、不意にエルモライが激しく身を動かしたので、射止めた鳥を拾はうと一生懸命になつて、全身を舷にのしかけたのである。私たちの乗つて居たぼろ舟はぐいと傾いて、水を被つたと思ふと、そのまま悠々と沈んで行つた。たゞ仕合はせと、深い處ではなかつた。私たちはあつとばかり叫びを上げたが、もう遅かつた。我に返つた時には、水の中に首まで浸つて、ぶか／＼浮いて居る鴨の死骸に取り囲まれてゐた。今でも私は、吃驚して眞つ蒼になつた仲間の連中の顔を思ひ出すと、聲を立てて笑はずにはゐられない。私たちはみんな鐵砲を頭の上に差し上げて居た。スチョークは旦那がたの眞似をする癖が出たものらしく、棹を高々と差し上げたものである。まづ一番に沈黙を破つたのは、エルモライである。

「ちよつ、くそ、忌々しい！」彼はべつと水に唾を吐きながら呟いた。「なんちゆうことだ！これといふのも、みんなてめえのお蔭だぞ、老いぼれめ！」と彼はスチョークに向つて、いま／＼しきうに云ひ足した。「てめえの舟はなんちゆう代物だ？」

「濟みませんこつて。」と老人はへどもどしなから云つた。

「それにおめえもおめえだ」と私の獵師はウラヂーミルの方へ顔を向けて、言葉を續けた。「何をぼんやりして居たんだ？　なんだつて水を汲み出さなかつたんだ？　おめえは、ぼんにおめえといふやつは……」

けれど、ウラヂーミルは口答へどころではなかつた。彼は木の葉のやうに慄へて、齒の根も合

はず、まるつきり無意味にや／＼笑つて居た。あの雄辯も、あの優美な禮儀作法も、自己の尊嚴を意識する氣持ちも、すつかりどこかへけし飛んでしまつた！

いま／＼しい平底舟は私たちの足もとで、弱々しく揺れて居る……難船した瞬間は、水が度はづれに冷たいやうな氣がしたが、すぐ馴れて苦にならなくなつた。最初はつとした驚きが過ぎたとき、私はあたりを見まはした。十歩ばかり離れた邊には、ぐるりと葦が生ひ茂つて、その高い葉越しに遠く岸が見えて居る。「こりやいけな！」と私は考へた。

「どうしたものだらう？」と私はエルモライに相談した。

「まあ、今に何とかしませう。こゝで夜明かしも出来ませんや。」と彼は答へた。「さあ、お前、鐵砲を持つてくれ。」とウラヂーミルに云つた。

ウラヂーミルは唯々諾々と命に服した。

「ひとつ行つて、淺いところを捜して來ませう。」とエルモライは、どここの池にも必ず淺瀬はあるものと決めこんだやうに、自信ありげに言葉を續けた。——スチョークから棹を取ると、用心ぶかく足で底を探りながら、岸の方をさして歩き出した。

「一體お前、泳げるのかい？」と私は聲をかけた。

「いゝや、泳げません。」といふ聲が葦の茂みから聞こえた。

「ふん、それちや土左衛門になつてしまふに。」とスチョークは平氣な調子で云つた。この男は、前に吃驚したのも危険を恐れたからでなく、私たちに怒られるのが心配だつたのであるが、今はすつかり落ちついてしまつて、たゞ時々ふうつと深い息をつくばかり、現在の状態を變へなければならぬなどは、てんから考へても居ないらしかつた。

「しかし、全くの犬死にでございますよ。」とウラヂーミルは隣れつばい聲で云ひ添へた。エルモライは一時間以上も歸つて來なかつた。この一時間が私たちには永劫の長さに思はれた。初めの間は、根氣よく互ひに呼び交はして居たが、やがてエルモライの『おう』と答へる聲が次第に間遠になつて、つひには全く聞こえなくなつてしまつた。村では晩禱の鐘が鳴り出した。私たちはお互ひ同士、話もしなくなり、顔すら見合はせないやうにして居た。鴨は私たちの頭上を飛びめぐつて、中には私たちの傍ちかく止まらうとするものもあつたが、急にはゆる『眞一文字』に舞ひ上がつて、啼き聲たかく飛んで行くのであつた。私たちの體はだん／＼こはばつて來た。スチヨークはそろ／＼寢支度でもしようかといふやうに、目をばち／＼させて居た。

やつと、筆にも口にも盡くせぬ嬉しさ、エルモライが歸つて來た。

「おい、どうだつた？」

「岸まで行つて來ました。淺瀬が見つかりました……さあ参りませう。」

私たちはすぐに出かけようとした。けれど、エルモライはまづ水の中で衣囊かぶから繩を取り出して射殺めた鴨の足を縛り、兩端を口に啞へ、先頭に立つて歩き出した。ウラヂーミルがそれに續き、私はウラヂーミルの後に従つた。スチヨークが殿りをつとめた。岸までは二百歩ばかりあつた。エルモライはずん／＼と足も止めずに進んだ（よくも道を覺えたものである）。たゞ時々、『左へとつた——その右手には穴があるぞ』とか、『右へよつた——その左手は泥が深いぞ』とか呶鳴るだけであつた。どうかすると、水が喉まで來ることがあつた。誰よりも一番背の低いスチヨークは、可哀さうに二度ばかりぶく／＼やつて、あぶくを吹いた。『おい、おい、おい！』と、エルモ

ライはいかつい聲で呶鳴りつけた——すると、スチヨークは足をばたつかせたり、跳び上がった。り、もがいたりした後、どうやらかうやら背の立つところへ出る。けれど、どんなに切迫つまつた時でも、私の上衣の裾にだけは遠慮して擱まらうとしなかつた。へと／＼に疲れて、泥だらけの濡れ鼠になつて、私たちはやつと岸に辿り着いた。

二時間許り経つたとき、私たちはみな出来るだけ着物を乾かして、大きな乾草小舎に尻を据ゑ、夜食の支度が出来たのを待つて居た。馭者のイェルグヂールは、並みはづれてのろ／＼した尻の重い、理窟つばいことを云ふのが好きな、寢ぼけ面をした男であつたが、門のところ立つて、一生懸命にスチヨークに嗅ぎ煙草をふるまつて居た。私の觀察によると、露西亞の馭者同士は忽ち仲よしになるものである。スチヨークは恐ろしい勢ひで、胸が悪くなるほど煙草を吸ひ込んで居た。唾を吐いたり、咳をしたりして、如何にも大満悦らしい様子である。ウラヂーミルはもの憂げな顔つきをして、首を横へかしたまゝ、あまり口敷をきかなかつた。エルモライは私たちの鐵砲を磨いて居る。犬どもは燕麥粥オツメを待ちかねて、わざとらしい程せか／＼尾を振つて居るし、馬は掛け庇の下で、蹄をとん／＼鳴らしたり、嘶いたりしてゐる……陽はまさに没せんとして、最後の光線が茜色の縞をさつと投げかけて居る。金色のちぎれ雲が、さながら洗ひ淨めて梳き上げた羊の毛のやうに、いよ／＼細かく空に擴がつてゆく……村の方では歌の聲が聞こえて居る。

ページンの草野

それはすつかり天候が決まつてしまつた時でなければ見られないやうな、明朗な七月のある日のことであつた。空は朝早くから晴れ渡つて、明け方の東のくれなゐも火事のやうに燃え立つのでなく、もの柔かな赤らみを漲らすのである。太陽も焼きつくやうな早魃ひかりの頃のやうに、赤熱した火の塊りを想はせるやうでもなければ、嵐の前のやうに鈍い茜色でもなく、明るい樂しげな輝きを放ちながら、細長い横雲のかけから、こやかに浮かび上がつて、朗かな光りを漲らした後、また薄紫いろの霧の中に没してしまふのである。横に長く延びた雲の上の方の端が、小蛇のやうにちらちらと閃めき始める。その輝きは、鍛へ上げた銀のかゞやきを想はせる……けれど、又やがて揺れ動く光りがさつと迸り出る——と、樂しげに、おほどかに、さながら舞ひ上がるかのやうに、日輪が力づよく昇つて来る。正午ひるころになると、大抵黄金いろを帯びた灰色の圓い高い雲が、白い華奢な縁をつけて、いくつもく、現はれて来る。はてしなく溢れ擴がる川の面で、深く透き通つた紺青の水に抱き包まれながら、點々と撒き散らされた島のやうに、雲は殆ど動かうとしない。たゞ、遙か地平線に近いあたりでは、雲は互ひにひしと寄り合つて、その間にはもう空の青が見られない。けれど、雲そのものが空と同じやうに瑠璃色をして、光りとぬくみを一杯に吸ひ込んで居る。うつすりと軽い紫色をした地平線上の空は、終日いちじつずつと變はりもしなければ、また四方八方すべて一様である。どこにも、夕立雲の影もなければ、雷氣の集まる様子もない。たゞこゝかしこに碧みがかつたすぢが、上から下へすつ／＼と引かれる——見えるか見えないかの雨

が篩ひ落とされるのである。夕方ちかくなると、この雲も消えてしまふ。たゞ幾つか消え残つたのが、黒ずんだ煙のやうにそこはかとなく、入り目の前に薔薇色の玉かとはかり懸かつて居る。太陽が昇つた時と同じやうに靜かに没したところには、猩々緋の夕焼けが暫らくの間、黝ずんで行く大地の上に照り映えて、その中にはそつと大切に運ばれる燭ろうの火のやうに、夕星がたつた一つ靜かに瞬きながら、覺束きやくなげに光り始める。かういふ日にはすべての色が柔かく、明るいけれども、何となくいぢらしいやうな、つゞましい感じが投影されるのである。かういふ日にはどうかすると、暑さがことのほか酷こしく、野づらの傾斜になつたところなどは、『陽炎』が立つことさへもある。けれども、やがて風が起こつて、鬱積した苦熱を追ひ拂ひ吹き飛ばす。すると、天氣のつゞく間違ひのない兆候とされて居る埃の渦が、白い龍卷きのやうに高く舞ひ上がつて、街道を傳ひ畑を越えて狂ひ歩くのである。乾いて澄んだ空中には、苦蓬くそうや、刈り取られた裸麥や、蕎麥の匂ひが漂つてゐる。夜になる一時間前あたりまで、濕氣などは少しも感じられない。農夫は作物の穫り入れにからした日柄を望むのである。丁度かういつたやうな日に、私はトゥーラ縣のチュルン郡でえぞやまどりの獵をした事がある。獲物は澤山に見つかつて、獵の首尾も上々だつたので、一杯になつた囊は情け容赦もなく肩に食ひ込んだ。けれどももう夕焼けは色あせて行つて、落日の光りこそ射さね、まだ明るみを湛へた空にはそろ／＼冷たい影が次第に濃く擴がり出したので、私もいよ／＼歸らうと腹を決めた。長々と續いた灌木の「原つば」を足早に過ぎて、とある丘に登つた。すると、右手にちよつとした榊の林があつて、遠くの方に低い白堊の教會のある馴染の平地が目に入ることと思ひきや、意外にも、まるで見覚えのない別の場所が眼前に展げた。足もとには細長い谷が連らなり、眞向ひ

には、高い壁のやうに、こんもりした泥楊の林が聳えて居る。私は合點のゆかない氣持ちで足を止め、四邊を見廻した。『おや！』と私は考へた。『どうもこれはまるで見當違ひのところへ迷ひ込んだらしい。餘り右へ右へと取り過ぎたのだな。』我乍ら自分の間違ひに呆れながら、急いで丘を下りて行つた。すると、まるで穴藏の中へでも入つたやうに、澱んで動かない厭な濕氣が私の全身を包んだ。谷の底にびつしり生ひ茂つて居る濡れた高い草が、一面に布でも擴げたやうに白々として居て、その中を歩くのがなんとなく薄氣味が悪かつた。私は大急ぎで向かうの岸へ登つて、泥楊の林に沿つて道を左へとりながら進んで行つた。蝙蝠どもは薄明かりのさして居る空に神祕めかしく、慄へるやうな輪を描いて、もう眠りに陥ちた梢の上を飛び交つて居る。歸り遅れた一羽の鷹が埒をさして急ぎながら、まつしぐらに勢ひよく空の高みを飛んで行つた。『やがてあの林の外れまで出たら、』と私は心の中で考へた。『すぐに道が見付かるだらう——いやはや、一露里ばかりも餘計な廻り道をしてしまつた！』

私はやつと林の外れまで辿りついたが、そこには道らしいものは更になかつた。草刈りが刈り残したらしい何かの低い灌木が、廣々と眼前に開けて、その先きには茫漠とした原が遙かに見渡された。私は又もや足を止めた。『これは一體どうしたといふのだ？……どこへ迷ひ込んだのだらう？』私はこの日朝から晩まで、どこをどんな風に歩いたかといふ事を、記憶の中から呼び醒まさうとした。『やつ！』これはパラードの藪だ！』たうとう私はかう叫び聲を上げた。『ちがひない！』あそこに見えて居るのがシンヂェーフの森らしい……だが、どうしてこんな所へ來てしまつたのだらう？ こんな遠いところまで？……不思議だ！』これからまた右の方へとつて行かなくちやならない。』

私は灌木の原を通つて右の方へ足を向けた。その間に夜はまるで夕立雲のやうに迫つて、次第に濃く擴がつて行つた。闇は夕べの水氣と共に到る處から立ち昇るばかりか、上の方から降り注ぐやうにさへ思はれた。私はいつしか、人の足に踏み固められてゐない草茫茫たる小徑へ出た。氣をつけて前の方を見透しながら、踏み外さぬやうに歩いて行つた。四邊は見る見る中につきかきり黒一色に包まれて、鳴りを靜めて行つた。——たゞ鶉がとき／＼啼き聲を立てるばかり。小さな夜鳥が、やわらかい翼を音もなく搏ち交はして、低く飛んで來たかと思ふと、危く私に打つたさうになつて、慄えたやうに横へはづれて、闇の中に没した。私は藪の外れへ出て、畦道づたひにとぼ／＼と進んだ。もう遠くのものを見分けるのに骨が折れるやうになつた。まはりには畑がほのかに白く見えるばかりで、それから先きは刻一刻、不愛想な闇が大きな團塊のやうに湧き起こり、迫り寄つて來るのであつた。私の聲音は、冷たく凝つて行く空氣の中に鈍くこだました。色褪せはてた空は、再び青味を帯びて來た。しかしそれはもう夜の青味である。その中に、星屑がち／＼と光りながら微かに揺れはじめた。

私が森と思つたのは、暗く圓味を帯びた丘であつた。『一體これはどこへ來たんだらう？』と、私はまた聲を出して同じ事を繰り返して、三たび足を止めて、相談でも持ちかけるやうに、黄色い斑のある英國種の獵犬チアンカを見やつた。これは四つ足類の中では、間違ひなく一番かゝい動物であつた。けれど、四つ足類の中で一番伶俐なこの犬も、たゞ尻尾を申し譯に振つて、疲れたやうな眼を、物憂げにぼちりとさせたばかりで、一向にいゝ分別も授けてはくれない。わたしは自分の飼犬に對してきまりが悪くなつたので、自分の行くべき道が忽然と分かりでもしたやうに、自棄半分にずん／＼先きへ歩き出した。丘の裾を廻ると、すっかり耕地になつてゐる餘り

深くない窪地へ出た。私は突然妙な氣持ちに襲はれた。この窪地は縁の傾斜になつた窪子に、殆どそっくりそのままの形をしてゐた。その底には幾つかの大きな白い石が突つ立つてゐる。――まるでそれらの石は密談のためにこゝまで這ひ下りたかのやう――それ程この窪地は啞聲のやうにがらんとして、おまけに上からは平つたい空が侘しげに垂れかゝつてゐるので、私は心臓をしめつけられるやうな氣がした。何やら小さな野の獸が石の間で、弱々しい物哀れ氣な鳴き聲を立てた。私は急いで丘の上に引つ返した。それまではまだ歸る道を探し當てる望みを失はないでゐたけれども、この時いよ／＼完全に道を踏み迷つたものと觀念してしまつた。で、もう殆ど霧の中に沈みつくしたあたりの地形をまるで見究めようともせず、たゞ屏をたよりに、當てもなくずん／＼歩き出した。……ものの三十分ばかり、私はやつとの事で足を引き摺りながら、こんな風に歩き續けた。私は生まれてこの方こんな淋しい處へは、後にも先にも來た事がないやうに思はれた。どこにも灯影一つ見えないし、物音一つ聞こえなかつた。たゞ傾斜のゆるい丘が後から後からと現はれ、野は涯しなく野に連らなり、藪は丁度わたしの鼻先まで忽然と地から湧き出るかと疑はれるのであつた。私は絶えず歩き續けたが、もういよ／＼何處かで夜の明けるまで身を横たへようかと考へ始めた頃に、思ひがけなく恐ろしい切り岸の上に出てしまつた。

私は踏み出した足を咄嗟に引いた。仄かに透いて見える夜の薄闇をとほして、足下に廣い平地がはる／＼と見渡された。大きな川が半圓形にその縁をうねつて、視界から次第に遠ざかつて行く。鋼鐵いろをした水の反射が、とき／＼鈍く光りながら、川の流れてゆく道を示してゐる。私の立つてゐる丘は、殆ど屏風を立てたやうな切り岸になつてゐて、その逞ましい輪郭が、蒼味がかつた虚しい空を背景に、くつきりと黒く浮き出してゐる。私のすぐ真ん前に當たる、斷崖と平

地の交叉した片隅では、川がこのあたりだけ動かない暗い鏡のやうにちつと澱んでゐて、そのかたはら丘の斷面の眞下には、二つの火が赤い焰を立てて燃えつ、煙りつしてゐた。その周りには人の蠢めく姿が見え、その影が揺れ、時をり房々とした捲き毛の頭の前面が、あか／＼と照らし出される。

私はやつと自分の迷ひ込んで來たところが分かつた。この草野は、私たちの地方でベージンの草野と呼ばれて、名の響いたところなのであつた。……しかし、家へ歸ることなどは考へも及ばなかつた。殊に夜分のことではあり、足は疲れて膝頭がぐ／＼してゐた。私は焚き火の傍へよつて、家畜商人らしく思はれる人たちの仲間に入つて、夜が明けのを待たうと腹を決めた。私は無事に崖をおりたが、最後に掴まへてゐた小枝をまだ放しもしないうちに、思ひがけなく老毛の大きな犬が二匹、意地あるさうな吠え聲を上げて飛びかゝつて來た。子供らしい甲高な聲が火のまはりに響いて、二三人の男の子が素ばやく地べたから身を起こした。私は彼らの不審さうな呼び聲に應じて叫んだ。子供らは私のそばへ駆け寄つて、すぐ犬どもを呼び戻した。二匹の犬は私のつれてゐたチアンカの出現に、格別吃驚したらしかつた。私はみんなの方へ近づいた。

焚き火のまはりに坐つてゐた人たちを家畜商人と見たのは、私の思ひ違ひであつた。これはただ馬の群れを番してゐる近在の百姓の子供たちなのであつた。私たちの方では夏あつた頃、馬を追ひ出してひと晩野飼ひする習慣があつた。晝間は蠅や虻がうるさくて堪らないからで、馬の群れを夕がた追ひ出して、夜の引き明けに追つて歸るのは、百姓の子供たちにとつてこよない楽しみなのである。帽子を被らずに、古い半外套を着て、恐ろしく威勢のいゝ百姓馬に跨がり、楽しさうな叫びを上げたり鬨の聲を立てたりして、手や足を振りながら駆け出し、高く跳び上がった

り、聲高く笑つたりする。輕塵が黄色い龍卷きのやうに立ち昇つて、街道づたひに流れて行く。よく揃つた蹄の音が遠くの方まで響き渡り、馬は耳をびんと立てて駈けて行く。まつ先きには縛れた鬘に牛蒡の實をつけた老毛の栗毛か何か、尾を高々とふり上げて、絶えず足どりを變へながら、まつしぐらに駛つてゐようといふもの。

私は道に迷つたことを子供たちに話して、その傍に腰をおろした。子供らは私にどこから来たのかと訊ねて、暫らくおし黙つたまゝ、少し片寄つてくれた。私たちはちよつと言葉を交はした。私はぐるりを馬に鬪られた灌木の下に身を横たへて、あたりを見廻しはじめた。それは實に素ばらしい情景であつた。焚き火の周りには圓い赤みがかつた光りの反射が、闇に凭りかゝるやうな風情で慄へながら、いまにも消えるかとばかり。焰は折々ぱつと燃え上がつて、光りの圏の外まで反射を投げてゐる。かほそい光りの舌は、あらはな楊の枝をひと舐めしては、すぐに痕もなく消えてしまふ。——尖つた長い影が、今度は自分の方から、ほんの束の間光りの中へ流れ込んで、火のすぐ傍までとゞく。闇が光りと争つてゐるのであつた。をり／＼焰の力が弱まつて、光りの圏が狭められると、襲ひかゝつて来る闇の中から、真ん中に白い斑のある栗毛や、眞つ白の馬の首がぬつと突き出て、素早く長い草を噛みながら、鈍い目付きで私たちを睥のるかと思ふと、又うなだれてすぐに隠れてしまふ。たゞ、いつまでももぐ／＼と噛みつゞけて、鼻を鳴らす音が聞こえるばかりであつた。灯りに照らされた場所からは、闇の中でしてゐる事が容易に見分けられなかつた。で、すぐ傍のものまで何も彼も、殆ど眞つ黒な帷でもかけられたやうに思はれる。けれども、遙か地平線に近いあたりには、丘や林が長い斑點のやうに、ぼんやりと見えてゐた。暗いまゝに澄み渡つた空は、一面に神祕めかしい美を湛へながら、私たちの頭上に涯しな

く高く、嚴かに擴がつてゐる。この一種特別な、惱ましいままで爽やかな香り——露西亞の夏の夜の香りを吸ひ込むと、胸が甘く締めつけられるやうな氣がする。あたりには殆ど何の物音も聞こえない……たゞ、間近かの川で、だしぬけに高く水音を立てながら、大きな魚が飛び上がるのと、岸邊の葦が寄せ来る波にゆられて、かさこそとしめやかな囁きを立てる……たゞ焚火ばかりが、靜かにぱち／＼と爆ぜてゐる。

子供たちは火のまはりに坐つてゐた。私に噛みつきさうな勢ひを示した先程の二匹の犬も、やはりそこに坐つてゐる。二匹ともまだ永い間、私が傍にゐるのが氣になつて堪らないらしく、睡さうに眼を細めて、焚火を流眄に見ながら、時々いかにも自分の威嚴を示すやうに、唸り聲を立てる。はじめの中はたゞ唸つてゐるけれど、終ひには自分の望みが叶はないのを悲しむやうに、いくらかきい／＼聲で泣き出すのであつた。男の子はみんな五人、フェージャ、バヴルーシヤ、イリユーシヤ、コスチャ、ワーニヤであつた。(私は彼等の話でみんなの名前を知つたので、これからこの少年たちを讀者に御紹介しようと思ふ。)

先づ一番年かきのフェーヂャは、見たところ十四ばかりの年配と思はれる。背恰好のすらりとした少年で、華奢で美しいけれど、少し小づくりの顔立ちをして、白っぽい髪はふさ／＼と渦巻き、眼は薄色で、いつも半ば愉しげな、半ばぼんやりしたやうな薄笑ひを浮かべてゐる。すべての様子から察したところ、裕福な家庭に育つたらしく、野飼ひに出たのも暮らし向きの必要のためではなく、たゞ何となく慰み半分の身には黄色い縁を取つた派手な更紗の襦袢を着け、軽く羽織つた新らしい小さな外套は、僅かにそのほつそりした肩に載つかつてゐた。淺黄色の帯には櫛がぶら下がつてゐる。胴の淺い長靴は、慥かに自分が拵へて貰つたもので、親父譲りでは

なかつた。次のパウルーシャといふ少年は、黒い髪をくしやく／＼に縛らして、灰色の眼をし、頬骨が廣く、蒼白い顔には痘痕のあとを見せ、口は大きいけれど尋常で、頭は俗に云ふ麥酒釜のやうに大きく、身體はずんぐりとして不恰好である。この少年はいゝ子振りとは云へなかつた——それは辯解しやうがない！——それでも私はこの子が氣に入つた。圖抜けて伶俐さうな、悪びれない眼付きをして、聲には力が籠もつてゐた。身なりも人前で威張れるやうなものではなかつた。身につけてゐるのは粗末な太麻の襪衣と、つぎはぎだらけの股引だけであつた。三番目のイリュエーシャの顔は可成り貧弱な方で、鈎鼻にしよ／＼した眼、間のびのした輪郭、すべてが一種愚鈍らしい病的な不安を現はしてゐた。引き締めた唇はまるで動かさず、八の字に寄せた肩はいつかな開かうとしない。——まるでいつも火が眩しくて、顔を鑿めてゐるやうである。殆ど白く見えるくらゐ黄色な髪は、のべつ両手で耳の上まで引つ張り下ろしてゐる低いフェルト帽の下から、ぴん／＼とはみ出してゐる。彼は新らしい木の皮鞋と脚絆を穿き、胴を三つ巻いてゐる太い繩は、小ざつぱりした黒の長襦袢スライダカをきつちり締めつけてゐる。この子もパウルーシャも、見たところ、十二を越してはゐないらしい。四番目のコスチャはまだ十歳そこ／＼の少年で、その考へ深さうな愁ひを帯びた眼付きが、私の好奇心をそゝつた。瘦せた小さな顔はそばかすだらけで、栗鼠の様に下の方が尖つてゐる。唇は殆ど見わけがつかない位であつたが、その代はり瑞々した光りを湛へて輝く大きな黒い眼は、不思議な印象を與へる。その眼は何か物云ひたげな風であつたが、それを表はさうにも、言葉では——妙くとも彼の言葉では盡くせないものである。背が小さくて弱々しさうな體格、身なりも可成り見すばらしい。殿りに控へたワーニャは、初め私の眼に止まらなかつた。彼はごつ／＼した蓆の下に大人しく丸まつて、地べたの上に寝ころがつたま

ま、たゞ時折り亞麻色をした捲き毛の頭をのぞかせるばかりである。この子はやつと七つばかりであつた。

かういふわけで、私はやゝ離れた灌木の下に身を横たへて、子供たちの様子を眺めてゐた。一つの方の焚き火には小さな鍋がかけてあつて、そのなかでは「じゃがたら」が煮えてゐた。パウルーシャは鍋の番について、膝をつきながら、煮え立つて來た湯のなかを木切れで突つき廻してゐる。フェーチャは外套の裾を擴げ、臍づきをして横になつてゐた。イリュエーシャはコスチャと並らんで坐つてゐたが、相變はらず一生懸命に眼を細めてゐる。コスチャは稍々うなだれ氣味に、どこか遠くの方を眺めてゐた。ワーニャは蓆を引つ被つたまゝ身動きもしない。私は眠つてゐるやうな振りをした。子供たちは又ぼつり／＼話を始めた。

初めの中は明日の仕事のことや、馬のことなど、あれこれと取り止めのない話をしてゐたが、急にフェーチャがイリュエーシャの方へ振り向いて、仕さしになつてゐた話の縊むすを戻すやうに、かう問ひかけた。

「ぢや、何かい、お前はほんとに家魔ドモフイを見たのかい？」

「いんや、俺は見やしない。第一、そんなものを見るわけには行かないさ。」イリュエーシャは曖昧な弱々しい聲で答へたが、その響きはこの上もなく顔の表情にふさはしかつた。「俺は聲を聞いただけなんだよ……それも俺一人だけぢやないんだ。」

「一體どこにゐるんだね？」とパウルーシャは訊ねた。

「古い方の紙漉場さ。」

「おめえらは工場へ行つてるのかい？」

「そりや、行つてるとも。俺は兄貴のアヴヂューシカと、伸し手をやつてゐるんだ。」
 「へえ、お前は工場もんなのか……」
 「それで、どうしてお前は家魔ドモイの聲なんか聞いたんだい？」とフェーヂャが口を入れた。
 「かういふわけなのさ。俺はな、兄貴のアヴヂューシカと、フォードル・ミヘーフスキイト、イ
 ワーシカ・コソイトワグスマイホクマイと赤。丘から来たもう一人のイワーシカと、イワーシカ・スホルーコフと、
 それからまだ他にも仲間があつたんだ。みんなで十人ばかりの連中が當番の組になつてゐて、紙
 漉場とまらなくちやならない事になつた。と云つて、本當のとまりといふわけぢやないけれ
 ど、監督のナザローフが、『お前たち、家までのこゝ歸ることはいりやしない、明日は仕事がある
 とあるんだから家へ歸るのは止めた方がいゝ』つて、足止めを食はしたのさ。で、仕方がないか
 ら居残つて、みんなと一緒にごろ寝してると、アヴヂューシカがこんな事を云ひだすぢやない
 か。——おい、みんな、ひよつと家魔ドモイが出たらどうする？……アヴヂューシカ（愛稱の本名）がかう
 云ふか云はない中に、誰やら急に俺たちの頭の上を歩き出したんだ。俺たちが下で横になつてゐ
 ると其奴は上の方で水車の邊を歩いてゐるのさ。ちつと聞いてると、其奴が歩く度に板がしなつ
 て、みし／＼と音がするんだ。そのうちに、俺たちの頭の上を通り過ぎてしまふと、だしぬけに
 水がざあ／＼と水車に流れ込んで、水車かことん／＼と音を立てながら廻り出した。ところが、
 水門の口は閉まつてゐたんだからな。一體だれが水門を開けて、水を落とすんだらうと、不思
 議でたまらなかつたけれど、水車は暫らくく／＼と廻つて、それきりまた止まつてしまつた
 よ。やがて足音は二階の戸口の方で聞こえて、今度は階段傳ひに下りて来るぢやないか。こんな
 風にゆつくり／＼下りて来るんだ。段々が足の重みでめき／＼云ふ位……その中に、いよく俺

たちの部屋の戸口まで来て、暫らくの間ぢいつと立つてゐる様子だつたが——いきなり戸がぼつ
 と一杯に開いてしまつたのさ。みんなぎよつとして見たけれど——なんにもあやしない……ふつ
 と見ると、一つの紙漉桶の傍に置いてあつた濾し網が動き出して、ひよいと持ち上がつて、水の
 中に一度浸つたかと思ふと、まるで誰か揺つてでもゐるやうに、宙を右に行つたり左に行つたり
 してゐたが、また元の場所に納まつちまつたよ。それからもう一つの桶の傍にあつた鈎が釘から
 外れたが、また元の釘に引つか／＼つた。それから今度は誰か戸の傍へやつて来て、いきなり咳を
 し出すぢやないか。まるで羊かなんかのやうに、大きな聲でごほん／＼とやるんだ……俺たちは
 みんな一塊りになつて、お互ひ同士身體の下に頭を突つこんでしまつたよ……その時は本當に
 おつたまげたもんだ！」

「へえ、さうかい！」とパーゼル（愛稱の本名）は云つた。

「だが、なんだつてそんなに咳をしたんだらう？」

「わからない、殊によつたら濕つぽいせゐるかも知んない。」

みんなは暫らく黙つてゐた。

「どうだ」とフェーヂャが訊いた。「じゃがたらは煮えたかい？」

パヴルーシャは薯を突ついてみた。

「いや、まだ生煮えだ……おや、跳ねやがつたぞ。」川の方へ顔をむけて、彼はかう付け足した。

「きつと校魚カマナだらう……ほれ、星が飛んだ。」

「おい、みんな、俺がいゝ話を聞かしてやらう。」と、コスチャがか細い聲で云ひ出した。「あのな
 この間、父つあんがみんなに話してくれた事なんだよ。」

「よし、開かして貰はうや。」

とフェーチャが、さも兄貴分らしい顔をして云つた。

「ねえ、おめえらはガヴリーラを知つてるかい、大村の木工のよ？」

「うん、そりや知つてるとも。」

「あの男がどうして何時もあんな陰氣を顔して、黙りこくつてばかりあるか、その譯を知つてるかい？ あいつがあんなに陰氣なのは、かういふ譯さ。父つあんが話して聞かしたけれど、あるとき胡桃を取りに森へ行つたんだよ。いゝかい、胡桃を取りに森へ行つたところが、道を迷つて矢鱈と歩いてゐるうちに、飛んでもない所に入りこんでしまったのさ。一生懸命にあちこち歩き廻つたけれど——駄目だ！ どうしても道がめつからない。するうちにもう夜になつちまつた。そこで仕方がないから、樹の下に腰を下ろして、まあ、夜の明けるのを待つとしよう、と云ひながら、尻を据ゑて、うと／＼居眠りを始めたわけさ。うと／＼しかけたと思ふと、だしぬけに誰か奴を呼ぶ聲が聞こえるぢやないか。眼を開けて見ると、誰もゐやしない、そこで又うと／＼すると——また呼ぶ聲がする。もう一ど眼を開けて見ると、前の木の枝にルサルカ（水精）がゐて、ゆら／＼と揺れ乍ら、大工を呼んでゐる。そのくせ息が止まりさうなくらゐ笑つて、笑つて、笑ひ轉げてゐるのだ……ところで、月の光りが眞つ晝間のやうに明るいので、何も彼もすつかり見通しなのさ。ルサルカは相變はらず呼んでゐるのだが、身體ぢゆうが透き通る様に白くつて、枝に腰かけてゐるところは、まるで鯉か、白楊魚か——でなけりや、ほら、鮎かなんそのやうに、白くぼけて銀色に光つてるんだ……大工のガヴリーラはぼうつと氣が遠くなつてしまつた。でもルサルカの方はやつぱりからから笑ひながら手をあげて、おいで／＼をしてゐるんだ。もうガヴ

リーラはすんでのことで起き上がつて、ルサルカの云ひなりにならうとしたが、きつと神様が智恵を授けて下すつたんだらう、いきなり自分の胸に十字を切つた……その十字を切るのに、とつても骨が折れたつてよ。手がまるで石みたいになつて、思ふやうに動かないんだ。え、どうだ、えらいもんぢやないか……それで、やつと十字を切るとな、ルサルカは笑ふのを止めてしまつて、急におい／＼泣き出すぢやないか……泣きながら髪の毛を拭くんだが、その髪の毛といふのが、まるで大麻のやうに眞つ青なのさ。それで、ガヴリーラはつく／＼とその様子を眺めてゐたが、『おい、森の化物、なんだつて泣くんか？』と訊いたんだ。すると、ルサルカはその返事に、『これ、人間、お前さん十字なんか切らなけりやいゝのに、そんな事をしなけりや、私と一緒に死ぬまで面白く暮らせたものを。お前さんが十字なんか切るものだから、私はそれが悲しくて泣いてゐるんだよ。でも私一人がよく／＼するばかりぢやない、お前さんも生涯よく／＼して暮らすやうにしてやるから。』かう云つて、見えなつてしまつたんだ。するとガヴリーラは、忽ち森から出て行く道が分かつたさうだが……それからといふもの、あの男はいつも陰氣な顔をしてゐるのさあ。」

「へーえ」と、フェーチャは暫らく黙つてゐた後、かう云ひ出した。「だが、どうしてそんな森の化物なんか、基督信者の魂を傷めるものに出來るんだらう——だつて、ガヴリーラはそれ

つの云ふことを聞かなかつたんぢやないか？」

「あゝ、それからな、お前？」とコスチャが云つた。「ガヴリーラの話ぢや、ルサルカの聲はとて

も細くつて悲しさうで、まるで蝦蟇の聲みたいだつてよ。」

「そりや、お前の父つあんが話して聞かせたのかい？」とフェーチャが言葉を續けた。

「そうよ。俺は天井床パライチに寝てて、すっかり聞いたんだ。」

「變な話だな！ なんだつて、くよくよする事があるんだらう？…：…してみると、ガヴリーラはルサルカの氣に入つて、それで呼ばれたんだな。」

「さうよ、氣に入つたのよ！」とイリユーシャが相槌を打つた。「さうとも！ ルサルカはガヴリーラを擦つてやらうと思つたんだ、きつとさうに違ひない。それが奴等の、ルサルカの十八番おはこなんだからな。」

「だが、こゝらにもきつとルサルカがあるに違ひないぜ。」とフェーチャが云つた。

「いんや、」とコスチャが答へる。「こゝはかりりとした、きれいなところぢやないか。でも、川が近くにあるにやあるけれど。」

みんなはちよつと話しやめた。不意にどこか遠くの方で殆ど呻くやうな物音が、長く尾を引きながら、ぢいんと響き渡つた。それはとき／＼深い静寂の中から湧き起つて、上へ上へと昇つて行き、暫らく空中にたゆたつた後、靜かに擴がりながら消えて行く、かの不思議な夜の物音の一つであつた。耳を澄ましてみても、一向なにも聞こえないやうだけれど、やはり妙にぢいんと響くのである。それは誰かが天と地の接するあたりで、長い長い叫びを上げると、もう一人誰かほかの者が森の中から、細い鋭い笑ひ聲でそれに應じ、弱々しいしゅうといふ響きが川の面を走つてゆくやうな具合である。子供らは顔を見合はせて、身慄ひした…：

「俺たちには神様がついてゐて下さるよ！」とイリヤーが呟いた。

「やい、臆病もの！」パーゼルが叫んだ。「なにをびく／＼してゐるんだ？ みる、ぢやがたらが煮えたぢやないか。一同は鍋の傍に集まつて、湯氣の立つ馬鈴薯を食べ始めた。たゞワーニャだ

けは身動きもしなかつた。「おい、どうしたんだ、お前？」とパーゼルは云つた。

けれどワーニャは蓆の下から這ひ出さうとしなかつた。鍋はみる／＼空になつてしまつた。

「おい、みんな、聞いたかい。」とイリユーシャが云ひ出した。「この間、バルナギーツイであつた事を？」

「あの土堤の上であつた事かい。」とフェーチャが訊ねた。

「うん、うん、土堤の上であつた事さ、あの切れた土堤の上だよ。あれこそ、ほんとに化物でも出さうな氣味の悪いところで、とても淋しいところなんだ。まはりは一面に窪地や谷ばかりで、谷の中にや何時も蛇がゐるやがる。」

「うん、それで何事があつたんだい？ 話して聞かせろよ…：…」

「ほかでもない、こんな事さ。フェーチャ、お前は知らないだらうが、あすこにや土左衛門が埋めてあるんだ。それはずつと、ずつと前、池がまだ深かつた時分に身投げしたんで、いまだにその墓が見えてるよ。でも、ほんのちよつと見えるだけで、たゞ土が盛り上がつてただけなのさ…：…ところで、二三日前にお邸の番頭が獵犬番のエミールを呼んで、おい、エミール、驛遞へ行つて來いつて云つたんだ。エミールは何時も驛遞へ使ひに行くのが役目のさ。自分の預かつてゐた犬をすつかり死なしてしまつたのでな。どういふわけか、奴の手にかゝると犬が保たないんだ。どうしても永續きしないんだよ。それでゐて、當人はいゝ獵犬飼で、どこといつて難はないんだけどな。そこで、エミールは郵便を受け取りに馬で出掛けて行つたが、町で手間取つて、歸りにはもういゝ加減酔つぱらつてゐたのさ。あたりは夜景色で、明るい晩なのだ、月が照つてゐるのでな…：…かうして、エミールは土堤の所へ來かゝつたわけだ。さういふ道筋になつてゐたの

さ。獵犬番のエミールが暢氣にこゝまでやつて來ると、見れば、土左衛門の墓の上に小さな羊がゐるぢやないか。眞つ白でこんな風に毛のくるく／＼捲いた可愛い、奴が、ちよこ／＼歩き廻つてゐるんだ。そこでエミールは『よし、一つあいつを捕まへてやらう——打つちやつておけば、とられちまふばかりだ。』と考へて、馬から下りて、小羊を兩手に抱き上げた……ところが、羊の奴は平氣なんだ。エミールが馬の傍まで來ると、馬は鼻を鳴らしながら飛び退いて、頻りに首を振るぢやないか。けれど、そいつを『どう／＼』と宥めて、羊の仔を抱いたまゝ鞍に跨がつて、また先きへ先きへと行つた。羊は胸の所に抱へてゐたのさ。ひよいと見ると、小羊はぢいつとまともに、エミールの顔を見つめるぢやないか。こつちは、獵犬番のエミールは、薄氣味が悪くなつて來た。『こんな羊が人の顔を見つめるなんて、聞いた事もない話だ。』と思つたが、それでも別に變はつた事もない。毛をこんな風に撫でて『これ羊よ、羊よ』と云ふと羊の奴はだしぬけに齒をむき出して、同じやうに、『羊よ、羊よ』つて云ふぢやないか……』

イリユーシャがこの最後の言葉を口から出すか出さないかに、突然二匹の犬が一齊に跳ね起きてけたゝましい聲で吠え立てながら、いきなり火の傍を駆け出し、闇の中に消えてしまつた。子供たちはみんなはつとなつた。ワーニャは例の蓆の下から跳ね起きた。バヴルーシャは大聲を上げながら、犬の跡から飛んで行つた。犬の吠え聲は忽ち遠ざかつて行く……やがて憎えたらしい馬の群れのざわ／＼と駆け廻る聲音が聞こえた。バヴルーシャは聲高かに『白！黒！……』と呼びたててゐる……やゝあつて、吠え聲は静まり、パーエルの聲ばかりが遙か遠くから聞こえて來る……また暫らく經つた。子供たちはどうなる事かと待ち構へるやうに、怪訝さうに眼と眼を見交はしてゐた……不意に奔馬の跡の音が聞こえた。馬は焚き火のすぐ傍でびつたりと立ち止ま

つた。バヴルーシャは鬣に手をかけるが早い、ひらりとその背中から飛び下りた。二匹の犬もやはり光りの圈の中へ飛び込んで、赤い舌を吐きながら、すぐそこへ坐つた。

「何事だ？ どうしたのだ？」と小供たちは訊ねた。

「なんでもないよ。」とパーエルは馬の方へ片手を軽く振つて、かう答へた。「なに、犬のやつが何か嗅ぎつけたんだよ。俺は狼だと思つたもんだから。」胸一杯に、はあく／＼と大きく呼吸をし乍ら、彼は平氣な聲で云ひ足した。

私は思はずバヴルーシャの姿に見とれた。この時の彼は實に美しかつた。その醜い顔は早乗りのために生き生きと活氣づいて、をとこらしくきつぱりした凛々しさに燃えてゐた。手に小枝一つ持たないで、よる夜中たつた一人、一刻も躊躇しないで、狼を追ひに馬を飛ばしたのだ……

「なんといふ素晴らしい子だらう！」と私は彼を見ながら考へた。

「おめえらは、何かい、狼を見た事があるかい？」と臆病者のコスチャが訊ねた。

「あんなものはこの邊に何時でもうよく／＼してゐるよ。」とパーエルは答へた。「でも、奴等が暴れるのは多だけだあ。」

彼はまた焚き火の前にしゃがんだ。地べたに腰を落ちつける拍子に、一匹の犬の毛むくぢやらの頸筋に手が載つかつた。すると、犬はさも嬉しさに、感謝と得意の表情でバヴルーシャの横顔を眺めながら、いつまでも首を動かさないで、ぢつと蹲まつてゐた。

ワーニャはまた蓆の下にもぐりこんだ。

「だが、イリユーシャ、お前のした話は本當におつかない話だな。」とフェーヂャが口を切つた。彼は裕福な百姓の息子なので、いつも音頭を取るやうな風になつてゐた。(そのくせ、自分では品

格を落とすのを恐れるやうに、あまり口敷を利かないのであつた。「それに、きつき犬が吠え出したのも、何か化けものの仕業だつたんだぜ……うん、さうだ、俺も話に聞いてみたが、あそこは化けもの出るとこださうぢやないか。」

「ワルナギーツイかい？……さうともよ！ あそこは特別ひどい處なんだ！ あそこでは、何度も、大旦那様を——死んだ前の旦那様を、見た者があるといふ話だぜ。裾の長い長上衣を着て、あつちこつち歩き廻つてな、のべつ、頻りに溜め息をつきながら、何やら、地べたの上を探してゐるんだとよ。トロフイームイチ爺さんも、一ど出會つた事があるさうだ。「旦那様、イワン・イワノイチ、そんなに地べたを御覽になつて、何を探しておいでになります！」と訊ねたところ……」

「おぢいさんがさう訊いたのかい？」とフェーチャが吃驚して口を出した。

「うん、訊いたんだ。」

「ふむ、それがほんとなら、トロフイームイチは偉いもんだ……さあ、それで旦那はなんと仰しやつた？」

「錠切草を探してゐるんだ、といふ返事だつたが、その聲がとても低くて、低くて、『錠切草』と、こんな風なんだよ。「全體、錠切草なんかを何になさるので、旦那様、イワン・イワノイチ」と訊ねると、『黙しつけるんだ、トロフイームイチ、墓が黙しつけて苦しいから、外へ脱け出さうと思つてな』と……」

「ほら、なんてこつた！」とフェーチャが云つた。

「してみると、この世の暮らしが足りなかつたんだな。」

「なんてたまげた話だ！」とコスチャが口を入れた。「俺はまた萬聖節でなけりや、死人は見られなと思つてゐたつけが。」

「死人はいつだつて見られらあ。」とイリエーシャが確信ありげな調子で引き取つた。この子は私が見たところでは、誰よりも村のかつき話に通じてゐるらしかつた。……「だけど萬聖節にや、生きてる者でもその年に死ぬ番が廻つてゐる人なら、ちやんと分かるつて話だよ。夜、教會の玄關に立つて、ぢいつと街道の方ばかり見てりやいゝんだ。さうすりや、その年に死なけりやならない人間が、街道傳ひに通り過ぎて行くつてよ、ほら、村のウリヤーナ婆さんもつい去年、教會の玄關へ見に行つたぜ。」

「それで、誰か見えたのかい？」とコスチャが面白半分に訊ねた。

「見えたとも。初めだいたい長い間、ぢいと坐つて待つてゐたけれど、一向だれの姿も見えなけりや、足音も聞こえない……たゞ何處かで犬つところが變な聲で吠えてゐる。いつまでも吠えてゐるやうな氣がするのさ……その中にひよいと見ると、襦袢一枚きりの男の子が道を歩いて来るぢやないか。ぢいつと見透かすと——イワシカ・フェドセーフがやつて来るんだ……」

「あの、この春死んだあれかい？」とフェーチャが遮つた。

「あゝ、あのイワシカさ。とぼ／＼と歩いて、顔も上げないんだ……でも、ウリヤーナは誰だか見分けがついたのさ……ところが、また見ると、今度は婆さんが歩いてる。ウリヤーナが一生懸命に透かして見ると、え、おい、驚いたらう！——その道を歩いてる婆さんは、自分なんだよ、當人のウリヤーナなんだよ。」

「へえ、そんな事があるのかい？」とフェーチャが訊ねた。

「ほんとだとも、嘘はつかない。」

「でも、變だな、あの婆さんはまだ死なないぢやないか？」

「そりや、まだ一年経たないからだよ。見るがい、今だつて骨と皮ばかりだから。」

みんなは又ひつそりとなつた。パーゼルは枯枝を一握り火の中にくべた。すると枯枝は、ぱつと燃え上がった。焰の中にくつきりと黒く浮き出し、ぱち／＼と音を立て、煙を吹き出したかと思ふと焦げた端の方を反らしながら、うね／＼動き出した。光りの反射は、痙攣するやうに慄へながら、四方八方へ、とりわけ上の方へ延びた。不意に、どこからとも知れず、一羽の白い鳩が飛んで来て、この光りの圏の中へ入つた。燃えるやうな反射をいばいに浴びながら、暫らく一ところでぐる／＼廻つてゐたが、やがて、しゅつ／＼と羽音を立てながら消えてしまつた。

「大方うちからはぐれたんだらう。」とパーゼルが云つた。「かうなつたら、何かにつづ／＼かるまでいつまでも飛んでる事だらうよ。ぶつ／＼かつたら、そこで朝まで夜明かしだ。」

「どうだらうな、バヴルーシヤ、」とコスチャが云ひ出した。「あれは正直な人間の魂が天へ昇つて行つたんじゃないかな、え？」

パーゼルは枯枝をもう一握り火に焚べた。

「さうかも知れない。」暫らく経つて、彼はかう答へた。

「ぢや一つ聞かして貰はう、バヴルーシヤ。」とフェーチャが口を切つた。「おめえの方のシヤーラモヴォ村でも、天道様のお兆せが見えたかい？」

「お日さまが見えなくなつた、あれかい？ そりや、見えたとも。」

「さぞ、お前らもたまげたことだらうな？」

「なに、俺たちばかりぢやないさ。うちの旦那だつて、前からお兆せがあると、俺たちに講釋して下すつたくせに、暗くなりだすと、自分でもすつかりびく／＼ものだつたつて話だ、ほんとによ。女中部屋にゐた料理番の婆さんなんか、お日さまが暗くなり出すが早いさ、まあどうだ、いきなり、火掻きでありたけの瓶を叩き毀して、籠の中へ打ちこんぢまつたぜ。『世の最後が来たんだもの、今さら誰も、ものを食ふ人はありやしない。』といふわけさ。それで、菜つ葉汁がその邊に一杯こぼれる騒ぎなんだ。ときに、俺たちの村ぢやこんな噂があつたつて。白い狼が世の中を駆け廻つて、人間を取つて食ふだの、鷲や鷹が飛んで来るだの、やれ、恐ろしいトリシカのすがたが見えるだのつて。」

「その、トリシカつていふのはなんだい？」とコスチャが訊いた。

「お前、知らないのか？」とイリュエシヤは熱くなつて引き取つた。「へえ、トリシカを知らないなんて、お前は全體どこの者だい？ お前の村の連中は井戸ん中の蛙で、よその事はなんにも知らないんだな！ トリシカといふのはな、いづれこの世界へやつて来る凄奴で、とても凄顔をしてやつて来るんだ。さうすると、掴まへる事も出来ないし、何一つ手を出すわけにも行かないんだ。本當にさういつた凄奴なのさ。基督信者の百姓が、そいつを掴まへようと思つて、樞の棒なんか持つてかゝつて行つてよ、周りをぐるりと圍んでしまつても、そいつはみんなの眼を暗ましてしまふんだ——すつかり目をくらましてしまふもんだから、百姓らは却つて同志打ちをやらかすといふ始末だ。牢の中へ入れても、そいつ、水が飲みたいから柄杓に入れて来てくれと頼むので、その通りにしてやると、いきなり柄杓の中へ潜り込んで影も形も見えなくなる。鎖で縛つても、そいつがほんと手を叩くと、そのまゝぱらりと解けちまふ。まあ、こんな風

にして、そのトリーシカは方々の村や町を歩き廻るのさ。このトリーシカは悪智恵のある奴で、基督信者の連中をいくらでも胡麻化しやがる……でも、こつちからはどうする事も出来ないんだよ……本當に、それこそ悪智恵のある凄い奴だからな。」

「まあ、さういつたわけで、」とパーエルは、持ち前のゆつたりした聲で話し続けた。「そんな奴なんだよ。つまりこいつを俺達の村で待つてたのさ。年寄り達は、それ、いまにお天道さまのお兆せが始まるが早いよ、すぐにトリーシカがやつて来るぞ、と云ひ云ひしたものだ。そのうちに、いよいよお兆せが始まった。村中の者はみんな、通りだの畑だのへ飛び出して、どうなるかと待つてゐたんだ。俺たちの村は、みんなも知つてゐる通り、見晴らしのいい、廣々としたところだからなあ。かうしてみんなが見てゐると、ひよつこり大村の方から、なんだか變な男が坂道を下りて来るぢやないか。とても凄しい頭をした奴なんだ……みんなはいきなり『さあ、トリーシカがやつて来た！』 さあ、トリーシカがやつて来た！」と喚いて、てんでに思ひ思ひの方に逃げ出したものだ！ 百姓頭は溝の中へ這ひ込むし、百姓頭の女房は門の下でまご／＼しちまつて、金切り聲で怒鳴り立てたもんだから、自分の家の飼ひ犬を吃驚させちやつたのさ。犬は鎖を切つて、編み垣を飛び越したと思ふと、林の方へ逃げ出しちまつた。クジカの親父のドロフェーイッチは、燕麥畑の中へ駆け込んで、そこに尻餅をついたまゝ、鶉の鳴くやうな聲を出して、『よしんば人殺しの悪黨でも、鳥くらはひは見逃がしてくれさうなものだに。』と泣き出す始末だ。こんな風で、みんなの騒ぎといつたら大したものだつたぜ——ところが、その男は村の桶屋のワヴィラだつたのさ。新らしい壺を買つたもんだから、空の壺を頭に被つてゐたんだよ。」

子供らはみんなどつと笑ひ出した。やがて、野天で話してゐる人にはよくある事だが、また少

しの間聲が途切れた。私はあたりを見廻した。王者の如く莊重な夜があたりに領してゐる。初夜の露を帯びた涼風は、夜半の乾いた温みに變つた。この温みはまだ暫らくの間、眠りに沈んでゐる野原の上に、柔かいとぼりのやうに垂れかゝつてゐることだらう。黎明の最初の嘯きが聞こえ、朝の露が下り初めるまでにはまだ大分間があつた。月影は空に見えない。その頃は月の出が遅かつたのである。數限りない金の星は、競つて瞬き交はしながら、揃つて靜かに、銀河の方へ流れて行くやうに思はれた。まことにそれを見てゐると、自づと地球の烈しい止み間のない運行が、それとなく感じられる思ひである……不意に奇妙な、けたましましい、病的な叫びが、二度ばかり續けて川の上で聞こえたが、暫らくすると、今度はもう少し先きの方で繰り返された……

コスチャはびくつとした……『あれはなんだらう？』

「あれは蒼鶯が鳴いてるんだよ。」とパーエルが落ちつき拂つた聲でたしなめた。

「蒼鶯、」とコスチャは鸚鵡がへしに云つた。「そんなら、バヴルーシヤ、昨晚俺が聞いたのは何だらう？」と彼は暫らくたつて云ひ足した。「お前なら分かつてゐるかも知れない……」

「何を聞いたんだよ？」

「俺が聞いたのは他ぢやないが、昨晚、石山からシャーシキノへ行つたんだが、初めの間はずつと村の胡桃林を通つて、それから草つ原にかゝつたところ……ほら、あの谷になつた急な曲がり角のところだ……ほら、春からずつと水溜まりになつてゐるところさ。お前も知つてるだらう、おまけに葎がびつしり生えてゐるぢやないか。で、俺があの水溜まりの傍へさしかゝると、どうだ水溜まりの中からいきなり誰か唸り出す聲が聞こえるんだ。さも情けななささうな、さも辛さうな聲で、うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……うーう……つてさ。俺はぞつとするほど怖くなつたよ。」

おめえ、時刻は晚いし、それにあんな苦しきやうな聲なんだもの。それこそ本當に、自分でも泣き出したいやうな気がした位だよ……一體あれは何だつたらう？ え？」

「あの水溜まりの中で、一昨年アキームが追剥ぎに沈められたぢやないか。」とパヴルーシャが云つた。

「だから、ひよつとしたら、アキームの魂が泣いてるのかも知れない。」

「あ、ほんとにさうかも知んないな。」それでなくても大きな眼を一ぱいに見開きながら、コスチャが合槌を打つた。「俺はあの水溜まりで、アキームが沈められた事を知らなかつたよ。それを知つてたら、あんなにたまげもしなかつたらうに。」

「でも、ひよつとしたら、こんな小さな蛙があるぜ。」とパーエルが言葉を續けた。「そんな辛さうな聲をして鳴くやつがよ。」

「蛙だつて？ うん、違ふよ、ありや蛙ぢやない……あれがなんで……（蒼鷺がまた川の上で鳴いた）——ちよつ、あの野郎！」コスチャは思はず口走つた。「まるで森のぬしが鳴いてるやうだ。」

「森のぬしは鳴かないよ、ありや啞だもの。」とイリユーシャが抑へた。「ありや手をはたいて、木の枝をぱち／＼折るばかりだよ……」

「ぢや、お前はそれを見た事があるかい、森の主を？」とフェーヂャが茶化すやうに遮つた。

「いんや、見た事なんかないよ。それに、見てたまるもんか。でも、他の人は見たつて云ふぜ。」

「この間も、村の百姓が奴に引き廻されたよ。森中をさんざん引っぱり廻されて、しかも始終同じ森の草つ原のまはりばかり歩かされたのだ……東が白む頃にやつと家へ歸れたとよ。」

「ふん、それぢや、その百姓は森の主を見たんだな！」

「見たとも。なんでも恐ろしくでつかい、でつかい恰好で仁王立ちになつて、顔も身體もどす黒くてさ、まるで木の蔭にでもなつてるやうにもしやく／＼して、よく見分けられないんだとよ。お月様がさ、ないやうに身を隠して、大きな團栗眼でじろ／＼と見つめてな、おまけにその眼を、ぱちくりぱちくりさせるんだつて……」

「よせよ、お前！」フェーヂャは軽く身慄ひして、肩をゆすりながら叫んだ。「ちえつ！」

「一體なんだつて、そんな汚れたものが世の中に擴がつて行つたらう？」とパーエルが云つた。

「ほんとに！」

「悪口つくでないよ。うつかりすると聞かれるぜ。」とイリヤー（イリユーシャの愛稱の本名）が注意した。

「あれ見ろよ、みんな、あれ見ろよ。」不意に、ワーニャの子供らしい聲が響いた。「あのお星様を見ろよ——まるで蜜蜂がたかつてるみたいだ！」

少年は清々しい顔を席の下から覗けて、小さな拳で頬杖をつき、大きな温順しきやうな眼を靜かに上へむけた。子供たちの眼は一齊に空へ注がれて、頼には伏せられなかつた。

「どうだい、ワーニャ。」とフェーヂャが優しく云ひ出した。「お前の姉さんのアニエートカはどうした、丈夫かい？」

「丈夫だよ。」とワーニャは少し聲を鼻にかけながら答へた。

「お前、さう云つてくれないか、なぜ俺たちの方へ遊びに来ないのかつて？」

「知らない。」

「遊びに来いつて、姉さんにさう云つてくれよ。」

「あゝ。」

「俺がいゝ物をやるからつて、さう云つてな。」

「俺にやぐれないのか？」

「お前にもやるさ。」

ワーニャはほつと溜め息をついた。

「でも、いゝや、おらいらぬ。それよか、姉さんにやつてくれ。姉さんは本當に好い人なんだもの。」

かう云つて、ワーニャはまた頭を地べたにつけた。パールは立ち上がつて、空になつた鍋を手にとつた。

「お前、どこへ行くんだい？」とフェーヂャが訊ねた。

「川へ行くんだ、水を汲みによ。水が飲みたくなつた。」

二匹の犬は起き上がつて、その後からついて行つた。

「氣をつけろよ、川へ落ちないやうに！」とイリュエーシャが後から聲をかけた。

「なんで落ちるもんか！」とフェーヂャが云つた。「あれは用心するたちだから。」

「そりや、用心するだらうさ。でも、いろんな事があるからな。うっかり屈んで、水を汲まうとする拍子に、川のぬしが手を掴まへて、水ん中へ引つ張り込むかも知れないよ。後でみんなが、可哀さうに川の中へ落つこちた……と云ひ出すが、なんの、落つこちたんぢやない……ほー

ら、葦の中へもぐり込んだよ。」と彼は耳を傾けながら云ひ足した。

さう云へば本當に、葦が押し分けられて、この地方の言葉に従へば、「がさこそ」と響を立てたのである。

「ときに、ありや本當かな。」とコスチャが訊ねた。「馬鹿のアクリーナの氣が違つたのは、水ん中に落つこちてからだつてのは？」

「あゝ、あの時からよ……今はまあなんてごまだ！でも、もとは別嬪だつたさうぢやないか。あれも水の主に變にされたんだよ。大方川のぬしめは、あんなに早くアクリーナが助け出されようなんて、思ひがけなかつたに違ひない。あれはきつと水の底の巢の中で、アクリーナの氣を變にしたに違ひない。」

（私もこのアクリーナに何度も出會つた事がある。ぼろ／＼の着物を身にまとひ、恐ろしく瘦せ細つて、炭のやうに眞つ黒な顔色になり、濁つた眼付きをして、いつも齒をむき出しながら、どこか道の眞ん中で、骨ばつた兩手を胸にしつかりと押し當て、檻の中の野獸のやうに、のろ／＼と左右に身體を揺りながら、幾時間も幾時間も一つとところで足踏みをしてゐる。この女は何を云はれても一向わからないで、時々ひつ吊つたやうに高笑ひをするばかりである。）

「みんなの話だと、」コスチャが言葉を續けた。「アクリーナが川へ身投げをしたのは、色男に瞞されたからだつてな。」

「ほんとにそのせゐなんだよ。」

「ぢや、ヴァーシャを覚えてるか？」とコスチャはしんみりした聲で云ひ足した。

「どのヴァーシャだい？」とフェーヂャが訊ねる。

「ほら、あの土左衛門になつたのさ。」とコスチャは答へた。「やつぱりこの川でよ、本當に可愛い子だつてが！ あゝ、とても可愛い子だつたがなあ！ お袋のフェクリスタなんか、どんなにあなたの子を、ワーシヤを可愛がつてたか知れないよ！ フェクリスタはあの子が水で死ぬつて事を、蟲の知らせで知つてたらしいぜ。夏なんか、ワーシヤが俺たち子供仲間と一緒に、川へ水浴びに行かうとすると、慄へ上がつて心配したもんだよ、ほかのお袋たちは平氣なもんで、盥を持つて傍を通りかゝつても、暢氣らしく尻をふつて歩いてゐるのにフェクリスタは盥を地べたにおいて、『歸つておくれ、うちの大事な坊や、歸つておくれ！ おゝ、本當に歸つておくれ、可愛い坊や！』と呼び立てたもんだ。一體どうして落つちたのか、まるで分らないんだ。川つぶちで遊んで、お袋も直ぐその邊で乾草を掻いてゐたんだが、ひよいと氣がつくと、誰か水の中で泡を吹いてゐるやうな音がするので、見ると、もうワーシヤの帽子ばかりが水の上に浮いてゐるぢやないか、さあ、それからといふもの、フェクリスタは氣が變になつちまつたんだ。川つぶちへ行つては、ワーシヤの落つちた所に臥るんだ。臥て歌を唄ひ出すのさ。——覺えてるだらう、ワーシヤがいつもあんな歌を唄つてゐたぢやないか。あの歌をフェクリスタも唄ひながら、泣いて泣いて、さも辛さうに神様に口説き立てるのだ……」

「あゝ、ほら、パヴルーシヤが歸つて來た。」とフェーヂヤが云つた。

「おい、みんな、」彼は暫らく黙つてゐてから、かう口を切つた。「なんだか變だぜ。」

「なんだい？」とコスチャがせき込んで訊ねた。

「ワーシヤの聲が聞こえたんだ。」

みんな一齊に身慄ひした。

「何を云ふんだ、お前、何を云ふんだ！」と、コスチャが舌を纏らせながら云つた。

「本當だよ。おれが屈んで水を掬はうとすると、だしぬけにワーシヤの聲で俺を呼ぶのが聞こえるんだ。まるで水の中から、『パヴルーシヤ、おい、パヴルーシヤ、こつちへお出で。』と云ふやうなんだよ。おら飛びのいたが、それでも水だけは汲んだよ。」

「わあ、くはばら、くはばら！」と子供らは十字を切りながら云つた。

「それはな、パーゼル、川の主がお前を呼んだんだよ。」とフェーヂヤが附け足した。「俺たちはたつた今、あの子のことを、ワーシヤのことを云つてたところなんだもの。」

「あゝ、こいつあ悪い兆せだ。」とイリュエーシヤが句と句を切りながら云つた。

「なあに、大丈夫だ、かまふもんか！」とパーゼルは、きつぱりした調子で云つて、また腰を下ろした。

「どうせ約束ごとなら遁れつこないんだから。」

子供らは鳴りを靜めた。見たところ、パーゼルの言葉がみんなに深い感銘を與へたらしい。彼等は寢支度でもするやうに、焚き火の前で横になり始めた。

「ありやなんだ？」不意にコスチャが頭を持ち上げて、かう訊ねた。

パーゼルは耳を澄ました。

「ありや山しぎが飛びながら鳴いてるんだ。」

「どこへ飛んで行くんだらう？」

「なんでも、冬のない國へ向けて行くんだつてよ。」

「一體そんな國があるのかい。」

「あるとも。」

「遠いかな？」

「遠い、遠い、暖い海の向かうだよ。」

コスチャはほつと溜め息をついて眼を閉じた。

私が子供たちの仲間に入ってからもう三時間以上たつた。月は漸く昇つたけれども、すぐには眼につかなかつた。餘り小さくて細かつたからである。この覺束ない月の夜は、今までも劣らずやはり素晴らしい感じがした：けれども、つい先き程まで空高く輝いてゐた多くの星が、もう暗い地平に近く傾いた。あたりのものは何も彼も、いつも曉近くにのみ見られるやうに、闇として静まり返つた。萬物は夜明け前の深い静かな眠りに沈んでゐる。空氣はもう左程つよく匂はなくなつて——また濕氣が擴がつてゆくやうに思はれた：夏の夜の明けやすさ：子供らの夜語りは、焚火と共に消えてゆく：犬までも假睡み始めた。微かに流れる弱々しい星あかりに見透かされたところでは、馬も首をたれ、身を横たへてゐるらしい：ともすれば前後を忘れさうなうつとりした氣持ちが襲つて來て、それがいつしかうたゝねに變はつてゆく。

爽やかな風が顔を撫でた。私は眼を開けた——朝の氣配が感じられる。まだ空のどこにもくれないはさしてゐなかつたが、もう東の方は白みかけてゐる。四邊はぼうとしてゐるけれど、一つ一つのものがそれと見分けられた。淡い灰色の空が次第に明るみ、冷えてゆき、青味を帯びて來る。星は弱々しく瞬いたり、姿を消したりしてゐる。大地はしつとりとして、木の葉は汗ばみ、そここゝに活き物の聲や響きが聞こえて來た。淡い曉の微風がもう地上をさまよつたり、飛びぬ

ぐつたりし始めた。私の身體は軽く楽しい身慄ひでそれに應へる。私は身早く起き上がつて、子供たちの方へ行つた。子供たちはとろ／＼と燃え残る焚き火のまはりで、死んだやうに眠つてゐた。たゞパーゼルだけが半ば身を起こして、ちつと私をみつめた。

私は彼に一つ頷いてみせて、水氣を立て初めた川沿ひに、我が家をさして歩き始めた。まだ二露里と行かないうちに、もう私の周圍には、廣い濡れた草野にも、前の方に現はれて來た緑色の丘にも、森から森へも、後ろの方に蜿蜒と續く埃道にも、朱に染まつて輝く藪にも、薄れゆく霧の間から恥づかしさうに青い色を見せた川にも——初めは狸々緋、次には赤と金の若々しい燃えるやうな光りが、奔流のやうにふり注いだ：何も彼もが動き出し、眼をさまし、歌ひ、ざわめき、囁きはじめた。大粒な露の雫が、輝くダイヤモンドのやうに、そこにもこゝにも燃え立つた。やはり朝の涼氣に洗はれたやうな、清らかに澄んだ鐘の音が、私の行く手から流れて來た。突然、充分に休息を取つた馬の群れが、顔馴染みの子供らに追はれながら、まつしぐらに傍を走り抜けた：

残念ながら、一つ云ひ添へなければならぬことがある。その年、パーゼルが亡くなつた。溺れたのではなく、馬から墜ちて死んだのである。氣持ちのいゝ若者であつたのに、可哀さうなことをした！

クラシーワヤ・メーチのカシヤン

私はがた／＼の百姓馬車に乗つて、獵から歸つてゐた。夏の日にあり勝ちな曇り日の息苦しい暑さに（御承知の通り、かういつた日の暑さといふものは、晴れた日よりも、どうかすると餘計たまらない。風のない時などは尙更である）、私はへと／＼になつてしまつた。乾き切つて、ぎいぎい軋む轍に掘られた道の土が、細かい白い埃となつて絶えず舞ひ上がるのを、身體ぢゆう浴びるに任せ、いやな氣持ちでちつと我慢しながら、うと／＼と夢心地で揺られて行つた。——と、不意に、今まで私よりも本式に居眠りをしてゐた馭者が、容易ならぬ不安げな様子で、もぞ／＼と落ちつかぬやうに身を動かしたので、私は少し氣持ちがはつきりして來た。馭者は手綱を引いて、馭者臺の上であたふたしながら、のべつどこか脇の方を眺めては、馬を嗚り始めた。私は邊りを見廻した。馬車は折から廣々とした耕地を通つてゐたのである。同じやうに残る隈なく耕された低い丘が、ごく緩い傾斜をして、波のやうにうねりながら、四方からこの平地へ裾を曳いてゐた。僅か五露里ばかりのがらんとした野原が、目路を限つてゐるのであつた。はるかに見える小さな白樺の林だけが、まるみを帯びた鋸の齒のやうな梢を連ねて、殆ど直線になつた地平線の統一を亂してゐる。幾つかの細い小徑が野づらを走つて、窪みにかくれたり、丘をうねつたりしてゐる。五百歩ばかり先きで、私たちの行く手を横切つてゐる小徑の一つに、何か行列のやうなものが見分けられた。私の馭者が眼をつけてゐたのも、これなのである。

それは葬式の行列であつた。先頭に立つた一頭立ての百姓馬車には、一人の僧が乗つて、そろ

そろと馬を進めてゐる。その傍には伴僧が腰かけて、手綱を取つてゐる。馬車の後からは、素頭の百姓が四人で、白い布に包んだ棺を擔ぎ、棺の後からは二人の女がついて來る。女の一人が立てる細い悲しげな聲が、私の耳まで傳はつて來た。耳をすまして聞くと、泣きながら歌ふやうにかき口説いてゐるのであつた。潮のさしひきするやうに單調な、やるせない悲しみを帯びた歌聲は、荒涼とした野づらに侘びしく擴がつて行く。馭者は馬に鞭をあてた。この行列の先を越さうと思つたのである。途中で死人に出逢ふのは、縁起が悪いとされてゐるからで。馭者は首尾よく棺が道へ出るまでに、そこを駈け抜けてしまつたが、まだ百歩と行かないうちに、思ひがけなく、私の乗つてゐる馬車がかくんと揺れて一方に傾き、危くひっくり返らないばかりになつた。馭者は勢ひづいた馬を引き止めて、まゝよ、といつたやうに片手を一振りし、べつと唾を吐いた。

「どうしたんだね？」と私は訊ねた。

馭者は返事もしないで、悠々と馬車からおりて行つた。

「一體どうしたんだい？」

「心棒が折れたんでございます……焼け切れたんで。」と馭者は不機嫌さうに答へて、さも癪でたまらないとでもいふやうに、だしぬけに脇馬の尻帯をぐいと直したので、馬は横倒しになりさうな程よろ／＼となつたが、それでも持ち耐へて、鼻を一つ鳴らし、ぶるつと身慄ひした後、悠悠と前足の膝の下あたりを齒で搔き始めた。

私も車をおりて、暫らくの間、不愉快な得體の知れない氣持ちに漠然と浸りながら、路上に佇んでゐた。右側の輪は殆どすっかり車の下敷きになつてしまひ、聲に立てぬ絶望の表情で、轂を

一生懸命に持ち上げてゐるやうに思はれた。

「さて、どうしたらいいだらう？」と到頭、私はかう訊ねた。

「あれ、あいつが悪いんでさ！」もう街道へ入つて、私たちの方へ近附いて來る行列を鞭で指さしながら、馭者は云つた。「何時も氣をつけてゐますが、」と彼は言葉を續けた。「ありや、確かに驗が悪いですよ——途中で死人に出くはすのは……さうでがすとも。」

かう云ひながら、彼はまた脇馬に入つ當たりをした。親方が不機嫌で難かしい顔をしてゐるのを見た馬は、ちつと身動きもしない事に腹を決めて、たゞ時々つゝまじやかに尾を振つてゐたのである。私は暫らくその邊をあちこちして、また車輪の前に足を止めた。

その間に葬列は私たちに追いついた。そつと街道を外れて、道ばたの草の上に避けた佗びしげな行列は、私たちの馬車の傍を練つて行つた。私も馭者も帽子をぬいで、僧に會釋をし、棺かっぎの人夫たちと目を見交はした。彼等はさも重さうに、やつとの事で足を踏み出し、廣い胸を高く波打たせてゐた。棺に従つてゐる二人の女のうち、一人の方は随分の年寄りで、蒼い顔をしてゐた。悲しみに打ちひしがれて醜くなつたまゝ、ちつと凍つたやうに動かないその顔の輪郭は、嚴めしく莊重な物々しい表情を失はないでゐた。瘦せ細つた手を時をり落ちこんだ薄い唇に當てながら、黙々として歩いてゐる。もう一人の女はまだ若くて、三十四五かと思はれたが、眼を赤く泣きぬらして、顔中が涙にむくんでゐた。私たちの傍まで來たとき、女は聲高にかき口説くのをやめて、顔を袖でかくしてしまつた……けれど、やがて棺が私たちの傍を通り抜けて、また道へ出たとき、魂をかき捲るやうな、物悲しい歌聲が、またもや耳に入つて來た。規則正しく揺れてゐる棺を黙つて見送つた後、馭者は私の方へふり向いた。

「あれは大工のマルティンの葬式なんで。」と彼は口を切つた。「あのリヤバヤ村の。」

「どうしてそれを知つてる？」

「あの女どもで分かりましたよ。年取つた方がお袋で、若い方が女房なので。」

「病氣でもあつたのかい？」

「さやう……瘡を患ひましてね……一昨日支配人のかたが醫者を迎へにやられました、あいにくと醫者が留守でした……なかくいゝ大工で、少しは酒も飲みましたけれど、腕の出來た大工でございましたよ。まあ、女房の辛がつてる事はどうでせう……でも、それも別に不思議のない事で、女の涙は金を出して買つたものぢやないと云ひますからな、女の涙は水も同然でございませよ……さうですとも。」

かう云つて、馭者は身を屈め、脇馬の手綱の下をくゞつて、両手で軛を握まへた。

「それにしても、」と私は云つた。「どうしたものだらう？」

馭者は先づ膝で中馬の肩を抑へ、二度ばかり軛をゆすぶつて、鞍敷きを直した後、また脇馬の手綱の下をくゞり抜け、行きがけの駄賃に、鼻面へ一つ突きを喰らはして、車輪の傍へ寄つた——傍へ寄つて、車輪から目を離さずに、長上衣の裾をまくり上げ、木の皮作りの煙草入れを悠々と取り出し、悠々と皮紐を握んで蓋をあけ、同じく悠々と太い二本指を煙草入れに突つ込んで（その二本指も、やつと入る位であつた）、暫らく嗅ぎ煙草をもみほぐし、前から手廻しよく鼻を歪め、何度にも區切りながら粉を吸ひ込み、その度に長い呻き聲を出した。そして、涙の滲んだ眼を痛々しげに細めて、ぱちぱちと瞬きながら、深い物思ひに沈んだものである。

「おい、どうした？」私は到頭から云つた。

